市民文芸

令和３年度

函館市民文芸

第６１集

函館市中央図書館

指定管理者　図書館流通センター・

マルエイヘルシーサービス共同事業体

函館市民文芸　第61集

目次

◇随筆（対馬　俊明　選）

【入選】

パラレル・ワールド―二〇二一年夏・・・山野みちこ　1

先に逝くものは逃げ得、されど。・・・外山聖武　3

コロナを巡るエトセトラ・・・髙橋剛治　5

【佳作】

二人の祖母・・・・・・・・谷口敦子　7

少年のころ・・・・・・・・佐藤憲明　9

断裁機の追憶・・・・・・・森田昌恵　11

私の玩具箱・・・・・・・・元木いづみ　13

睡魔の夢・・・・・・・・・武田勉　15

【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・17

◇小説（安東　璋二　選）

【入選】

遠い夏・・・・・・・・・大西弘子　20

【佳作】

街の仕立て屋・・・・・・・埋橋優希　36

「きんま」道と「きんま」橋・・・水関清　44

揮発する感情とその道程・・・渡邉陸王　53

◇文芸評論（安東　璋二　選）

【入選】

病床詠から考える『一握の砂』以後の啄木のからだとこころ・・・水関清　61

『歴史小説の功罪～「坂の上の雲」他』・・・髙橋剛治　77

【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・89

◇ノンフィクション（竹中　征機　選）

【入選】

「松前家前史」―五代戦いの記録―・・・・木　村　裕　俊　92
交流が世界の人々を結ぶ絆へ・・・・末　永　玲　子　104
だから大沼って面白い・・・・小　島　栄　樹　114
座礁船の生涯―81年前の追憶―・・・・齊　藤　満　122

【佳作】

勤続三六年のはじまり・・・佐　藤　健　134

【選評】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146

◇詩（鷲谷　峰雄　選）

【入選】

食の喜遊曲・・・・・・・・水　関　清　148
自然につつまれて・・・・・・寺　崎　達　雄　158

【佳作】

六月の朝・・・・・・・・・森　田　昌　恵　160

【選評】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163

◇短歌（山縣　庸美　選）

【入選】

渡邉陸王・竹田光彦・菊地利春・・・・・・・・164

【佳作】

森田裕・伊藤静子・水関清・下地彩可・
久保美鈴・・・・・・・・・・・・・・・・・・164

【選評】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165

【選者詠】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166

◇俳句（熊澤　三太郎　選）
【入選】竹田光彦・斉藤ふじお・小板彩羊……167
【佳作】千葉誠一・清水法雄・太田満喜子・見春妙子・
菅原麗花……167
【選評】……168
【選者吟】……170
◇川柳（中村　宵星　選）
【入選】白井靖孝・岩本真穂・本間総子……171
【佳作】水島悦子・竹内穣・大山利子・齊藤満・剛田尊……171
【選評】……172
【選者吟】……174
◇審査員紹介・あとがき……175

随筆　入選

パラレル・ワールド ― 二〇二一年夏

山野　みちこ

八月七日、函館の気温が観測史上最高を記録した。三三・九度！コロナ禍のもと、東京オリンピックが始まった日本は、北海道でさえ四十度に近い酷暑・猛暑にみまわれているところもあったけれど函館は比較的おさえられていたのだが……。

そとに格別の用がない高齢者なので言われるまでもなく常にステイホームのわたし。保冷剤をつつんだガーゼタオルを首にまき、友が浴衣地でつくってくれただぶだぶの〝貫頭衣〟をまとう。たるんだ醜悪な身体がかくされ風がとおる。しかし他人様には見られたくない格好なので、玄関のチャイムが鳴っても居留守をつかうことにする。

風力を〝強〟にした扇風機の前で、関東にいる弟夫婦に「暑さに耐えています」と家族ラインを入れた。すぐ義妹から「これからは北海道でもエアコンは必需品ですよ」と応答があった。なんとなく意地になって「どれだけ我慢できるかガンバってみます」と返す。すると市内にいる、もう一人の義妹が「自分の力を信じよう！」と可愛いキャラクターが応援しているスタンプを送ってきた。「そうだね、がんばる～」と笑いがこみあげた。

朝起きて火をつけた蚊取線香が、無くなりかけていた。新しいのを、と箱を手にとった。夏の初めに買った三十巻入りはつかい果たし、二箱目。それも半分以下になった。今夏はそれだけ暑いのだ（網戸をつけていない窓も開けざるをえなかった）。

今年はBメーカーの蚊取線香を買ってみた。人気者が出ているTVコマーシャルを流している老舗のものだ。価格が高い分はその宣伝費だろうと去年までは安価なAメーカーのものを使っていた。Bにしたのは、どんなものか試してみようと思ったからだ。

すぐに分かったのは匂いの違いだった。やわらかい。Aより刺激が少なかった。立ちのぼる煙も心なしうすい。存在感でいえば全体的に控えめ、おとなしい。蚊をよせつけない効果はあるのだろうかと心配だった。だが買ってしまったので使いつづけ、二箱目もBにした。何故かというと長時間つかうから、淡い匂いが良いように感じたからだ。効き目の違いがあるのか無いのかは分からないままだ。

そんなふうに、暑い、暑い、とぐったりして過ごしていたら、何と、八月九日から

函館の気温は急激に下がった。日中でも二十度にならないこともあった。暑さに慣れた体は上着をはおっても血がめぐらないのか冷たい。夕食時、我慢できなくなってポータブルストーブを出し〝暖をとった〟。

ストーブと扇風機が並んでいる光景――なんとも奇妙だった。昨年春からわたしたちを脅かしている新型コロナウィルスが跋扈しているなか、世界中からアスリートが集合するスポーツの祭典・東京オリンピックが開催されていたのと通じる。ふつうならば共存するはずがない両者。

そういえば、感染を防ぐという目的のため、個人的な好みだとか違和感などいってられない状況にわたしたちは投げこまれている。夏なのにマスクをつけている顔を見るのにも慣れた。エアコンで冷やした空気がもったいないが窓をあけて小まめに換気するように、とのアナウンスも平常心で聞けるようになった。緊急事態宣言とか熱中症警戒アラートという物々しいことばにも動じない。そして、酷暑の夜に熟睡するにはエアコンを強にし、布団をかけて寝ることという勧めにも、もはや驚かない。度量が広くなったのか、クジラが魚をとるため海水をガバッと呑みこむように豪快に受け入れる。

十年前、東日本大震災で原子力発電がとまり、節電が叫ばれた。その夏、甥の結婚式に出席するため東京へ行った。羽田につき空港ビルに入ると薄暗かった。照明が半分になっていたのだ。行き交う人の表情も沈んで見えた。影もできないほど煌々と明るかったときは皆さっそうと歩いていたのに。頬に、ビル内の生ぬるい空気を感じながら暗澹となったことを思い出す。

今年三月、震災の十年式典は、人が集まるとコロナを広めるからと縮小されてとり行われた。節電推奨などどこからも聞こえない。

原発は《アンダーコントロールされている》福島の復興記念の筈だった東京オリンピック・パラリンピックは、いつの間にか《人類がコロナに打ち勝った証し》と言われるようになり、ＩＯＣ幹部も《日本人は忘れやすい》と宣い、《安心・安全を第一》に無観客で開催された。終了したとき、村上春樹のよく用いるコトバ「やれやれ」が口に出た。

口に出るといえば、「ワクチン打った？」というのが挨拶がわりになっている。今は、わたしのこども世代の四十代が接種しているようだ。

市民文芸へ、この原稿を投函する日、新しい自民党総裁が決まるらしい。日本の今夏の狂騒、落ちつくのか、さらに増幅するのか。

随筆　入選

先に逝くものは逃げ得、されど。

外山　聖武

一、魔法の言葉

妻がなくなり、初めて喪主をすることになった。その時、葬儀社の人が魔法の言葉を授けてくれた。「気持ちですから」

通夜で、線香番をしないと・・「ご遺族の方は、長い看病でお疲れでしょう。だから、蚊取り線香タイプの十二時間持つ線香を用意致しました。今晩は無理をしないで休んでください。通夜も気持ちですから無理せずに」

結局はその夜、私はアルバムを広げて朝日を迎えてしまったけれど、起きていなければならないという義務感はなくなっていた。

初七日までの精進料理。「奥さまがパンをお好きならあんパンでも、また時にお寿司でもいいのです。出来合いの惣菜でもいいのです。奥様への気持ちですから」

「大事なのは、残された遺族の方々。無理をしないことです、気持ちですから」その言葉に励まされて、無事初七日、納骨、一周忌、そして回忌を重ねていった。

今では出がけに、気が向いたときに仏壇にちょっと手を合わせるだけである。そうなのだ、いつでも気にかけているという気持ちはある。線香供花も途絶えがち。この魔法の言葉に甘えているのだろうか、そう思う毎日である。

二、土に還るということ

カルチャーショックであった。

納骨の仕方は土地土地で違うことを知らなかった。火葬にしてきれいに骨が残った。そっくり残った頭骨を一番上にして骨箱を閉じた。よかったと思った。

函館では、線香台を動かすと、墓石に5センチ足らずの横穴が開いている。そのままでは入らないので、せっかくの遺骨を細かく砕いてしまう。

「形がよく残ったのに」「痛そう」

そして、穴から遺骨を流し込む。その先のたて穴には底がない。大地につながる。流し込まれた骨は、いつか土に還る。

私の出身地である東京では墓石自体をずらすと、その下はコンクリートの石室である。そこに、代々の骨壺がいくつも並べられている。土に還ることはない。

葬式の「葬」の字は、土葬の形に思う。穴を掘って、「サ」の草を敷いた上に「死」体を置く。その上に「サ」草（カンムリ）をかぶせる。そして、土をかける。

思えば、函館の埋葬の仕方は、土葬の本

来の形を残している。このほうが自然なのかもしれない。思い出はいつか時間の中に埋もれていくものなのだろう。

三、花火が見えますか

亡くなった人の霊魂はどこにいるのだろう。霊魂なんてないと科学的に考えても、また、天国極楽あの世に行っているからと宗教的に考えても、そのような現代人の私であっても、折々故人を思い出す場として墓参りをする。そこには遺骨しかないとわかっているけれど。

お盆は特別である。故人の霊魂がはるばる家まで来てくれる。北海道ではあまり見かけないが、本州では、「迎え火・送り火」の風習がある。両親の故郷の長野県では「ダケカンバ」の皮をはいだものを使っていた。盆の入りに門口で燃やし、モウモウと煙が立つほど、先祖の霊が迷わず家まで来るというのだ。

お盆のお供えとして、きゅうりとナスに割り箸を差し、馬と牛をかたどる。馬のように早く来て、後ろ髪を引かれるように牛の歩みでゆっくり帰ってくださいという。

今は、火災の恐れがあるからか、この風習は都会ではあまり話題にならない。夏の花火大会はそのかわりかもしれない。

今年のお盆には玄関先でひとり花火をしようと思う。ちょうど「さだまさし」さんの「精霊流し」の一節のように。

四、先に逝くものは、逃げ得、されど。

妻は余命宣告された末期癌だったので、私も覚悟はできていたはずだった。一周忌までの日々、一人暮らし。料理のレパートリーもほとんどなく、家事から家計のことまで一気に降りかかってきた。いったい何を食べていたのだろうか。在りし日の妻の面影が、ゴースト（亡霊）のようにそこかしこに出没した。

次の一年間。つくづく「先に逝くものは、逃げ得。」遺品の整理処分は残された者に託される。思い出の発掘作業と「廃棄！」

ひと息ついたらもう七回忌である。そうなのだ。日々の生活の立て直しをしているうちに五回忌はいつの間にか過ぎ去るものなのだろう。生活している足元が見えるようになってきた。料理のレパートリーも増え、一人で生きていけると思うようになった。亡妻のことを意識することも少なくなった。山登りを始めた。ブログを作った。どれだけあるかわからないが、「余りの人生」などとは考えない。新たな生きているという意味を作るため一日一歩。次の十三回忌、六年後には私はどのような足跡を残しているだろうか。

随筆　入選

コロナを巡るエトセトラ

髙橋　剛治

コロナ感染の流行も二年目、外出を控え、家での引篭もり、読書生活が続いています。

私個人は、リタイヤの身なので、昼カラ喫茶や映画、外食等に出掛けられない位で、あまり変らない日常だと思っていたのですが、一年目の昨年早々に、何故か頭頂に小円形の脱毛が出来ていました。テレビ等によるコロナ・ニュースと毎日の感染者数を確認する心的ストレス?と、ただ驚く事になります。

現役で勤めていた頃に、二度程、円形脱毛にはなった事があり、よりストレスが大きくなると、体質的に腸に来る様で、二度程大腸の炎症による下血で、短期入院をした事がありました。胃は丈夫な様で、胃潰瘍にはならず、弱い腸に炎症が起こるのが、我体の特徴の様です。だから今回は軽いのですが、何のストレスなの?と不思議には思います。

さて、それはともかく、コロナ感染流行の中で開催されたオリ・パラで、重量挙げ女子の安藤選手が銅メダルを獲得しました。期待された三宅選手が駄目で、がっかりしているかなぁ、と大学時代の重量挙げ部の友人の事を思い出したのは、彼が「コロナ」と綽名されていたからでもあります。勿論、四十年以上昔にはコロナは存在しませんから、感染者の差別や虐(いじ)めの呼称ではありません。

何故、彼がそう呼ばれていたかと言うと、彼がいつも「**コロナ・エクストラ**」と英字で黒くプリントされた黄色いTシャツをトレーニングウェアとして着用し、体育館横にある練習場で、ひたすらにバーベルを上げ下げしていたから、と言う至極単純な理由でした。

彼はウェイト・リフティング部所属で、私はボクシング部でした。同じ体育会系で、練習時間帯に良く顔を合わせる誼(よしみ)で、他部の同学年の者も交えて、幾度か飲みに行きましたが、彼は、やはりコロナ・ビールの注文と飲酒に固守していました。

そのメキシコビールのどこが良いんか**ナ**、と一緒に行った陸上部のAの問いに、軽い味わいと独特の香、等と答えていましたが、本当か**ネ**、と場の全員が思ったものです。

バドワイザーと、そんな味が変らん**ヨ**、とレスリング部のYが、同じコロナ・ビールを飲みながら言うと、抑々ビール各社の味の違いすら怪しい**ヤ**、と言い、バレー部

のOが、うちの主将なんか、ビールに変えてホッピー出されても判らんゾ、と交ぜ返した。当時は発泡酒も第三のビールも存在しておらず、ホッピーが一番ビールに似ている物でしたが、さすがに焼酎味のあれは分かる、と思うが、酔っぱらったら怪しいかもナ、とYが言うので、そんなものだろうか、とも思った。

コロナ・ビールはサ、ジョッキなどに注がず、栓を抜いた瓶からラッパ飲みするのが正式な飲み方で、そのまま飲む他に、塩を加えたり、櫛形切りしたライムを瓶の中に押し込み、風味付けして飲む方法もあるンだ。『ライムがなければコロナを飲むな』と言うキャッチコピーが、昔使われた事もあった、と彼はお約束の蘊蓄を傾けますが、皆、何回か聞いているので、ただ聞き流していました。

そんな彼の事で印象深いのは、お前らのクラブは良いよな、競技を題材に漫画やアニメが一杯あってサ、華やかだから新人勧誘も楽だろう、と言っていた事でした。そうでもないよ。格闘技なんてきつい事、今の子は、あまり遣りたがらないね。そう私が言っても、いや、重量挙げ、地味過ぎるし、試合がドラマ表現しにくいから、アニメとかで取り上げられない。だからクラブにも人が集まらないヨ、と自虐的に力説していました。確かに、三宅兄弟の様な五輪メダリストもいるのに、アニメ無いかもしれないな、とは思う。

重量挙げ部の彼とは、卒業後に会う事もなかったのですが、コロナが猛威を振るう中、コロナ・ビールは、その名称から、いわゆる風評被害に襲われ、昨年初めに、かなりの売上が失われた、とのニュースを聞きました。そしてビールを飲む米国人の内、現在はいかなる状況下でもコロナ・ビールを買わない、と答えた人が三十八％にも上った、と言う記事も見ました。製造会社は、当初は販売の落ち込みを否定していましたが、メキシコ政府から、不要不急の産業の停止要請を受け、その夏の操業を取りやめるとの発表もありました。あれから一年、世界はまだ元に戻っていませんが、コロナ・ビールは大丈夫なのか？

そして、還暦を過ぎた彼は、今も、あの蘊蓄を吐き出しながら、コロナ・ビールを愛飲しているだろうか、と淡く考えます。

そんな私は、昨日スーパーでコロナ・ビールを見つけ、購入しました。そして、頑張れ安藤、とテレビ応援しながら、瓶からそれを飲んでいると、メダル獲得となったのです。

あいつ、見てるかな？そう言えば未だに重量挙げのアニメって、見ていないような気がするなア、と思ったのでした。

（了）

随筆　入選

二人の祖母

谷口　敦子

父方の祖母は、零細な開拓農家の娘として生まれ、同じく零細農家の嫁になり、その一生をほぼ土とともに生きた。3男である町場に住む父の家に時折やってくるようになったのは、祖父が亡くなり長男に稼業を譲って隠居の身になってからだった。若いころから働き通して来た習慣というものは抜きがたく残っているものなのか、父の家に来ても庭の草むしりや針仕事など、いつもなにかしらの仕事で手を動かしていた。

昭和30年代のそのころ、冬は零下30度にもなる酷寒の小さな町にまだ道は舗装されておらず、大通りと称された国道には夏場は馬車が、冬には馬橇がときおり通っていて春先には悪名高い「馬糞風」が吹いた。その大通りを走るバスに乗って、当時「原野」と呼びならわされていた部落から祖母はやってきた。いつも地味なモンペに冬はゴム長を、夏は稲藁で編んだ草履といういで立ちだった。私が小さかった時、一度だけその草履を手土産にもってきてくれたことがあった。赤い鼻緒がすげられた小振りな草履だったと思う。祖母は働き者だったがあまり器用ではなかったらしく、網目には凸凹が目立ち子どもの目にも綺麗なものとは思われなかった。せっかく作ってもらったのだから、と母には言われたが、それを履いて外を歩いたという記憶はない。それに、いくら田舎町でもさすがに草履履きの子どもはいなかったせいもある。しかし今ふりかえると祖母には悪いことをしたという思いが湧く。寡黙でめったに口を開かなかった祖母は、たまに用があるとき私たち姉弟をちゃん付で呼んだ。内孫である伯父の子たちは呼び捨てだったのにどうしてだろうと不思議に思ったものだ。貧農の3男だった父が苦学して資格を取り故郷に戻ってきた時、母の父が将来を期して娘である母をめあわせたのだと母の姉である伯母からきいたことがある。母の実家に対する祖母の引け目からだったのかもしれない、と気づいたのは大人になってからのことだ。

母方の祖母は、開拓村で唯一の医師であった祖父の妻として戦時中は国防婦人会の会長を務めるなど内助の功を発揮した。母によればそのころ、村で読み書きができたのは祖母くらいのものだったからだ、とのこと。そんな事情を差し引いても祖母は

当時の女性としては高学歴だった。九州の田舎の高等女学校を出て東京の産婆学校で学んだ経歴がある。

祖父母は大正のはじめ、九州の田舎の村から北の果てにある厳寒の開拓村にやってきた。交通の便の悪かったそのころ、九州から北海道の、それも奥まった地までやってくること自体が大変な覚悟のいることだったろう。祖父母は親族と水盃をかわしてきたのだと、子どものころ母から聞いた。

母の実家である病院は我が家のすぐ向かいに位置していて、お互いの家を「お向かい」と呼びならわしていた。二人の祖母は、一方は「原野のばあちゃん」と呼ばれ一方は「病院の大奥さん」とよばれた。

「お向かい」の祖母のところへは、よくお使いにいった。母に言われたからで、特に用がない時でも母は私たち姉弟を祖母のところへ行かせた。私が小学生だったそのころは祖父はすでに亡く、伯父が病院を継いでいて病弱だった祖母は耳も遠くなり寝たり起きたりの生活だった。行けば祖母から小遣いやチリ紙に包んだお菓子がもらえたので弟たちはそれが目当てで出かけたが、二人ともすぐに外遊びに出かけてしまうので補聴器を手にした祖母のそばに座って話を聞くのはいつも私の役割だった。

体調の悪さもあるが祖母は気が弱くなっていてよく母が呼び出されたが母が行くと義伯母の機嫌が悪くなる。子どもである私なら角が立たないと母は思ったようだ。そんな事情は後になってから知った。祖母は時折孫の私に向かって「おばあちゃんはもうしんでしまうかもしれない」といって涙ぐむことがあった。どうしてそんなことを言うのか子ども心に不思議で嫌だった。耳の遠くなった祖母は気配を察することがうとくなっていた。そんな祖母の世話をしている義伯母が癇癪を起して祖母の背後で祖母の巾着を蹴飛ばしたのをたまたま母が目にしたことがあった。ずっと後になって聞いた話だ。母はそれ以来何かにつけて私を祖母のもとに行かせることにしたのかもしれない。どうして私ばかりがと思ったこともあったが、母もつらかったのだ、と今にして思う。

二人の祖母も鬼籍に入って久しい。厳しい農作業の日々を生きて後半生はささやかな安楽を得た祖母と、大奥さんと呼ばれながら心身の不調に悩み孫の訪問がわずかな安らぎだった祖母。どちらも少しずつ不幸でそれでも少しずつは幸せだったと思いたい。

随筆　佳作

少年のころ

佐藤　憲明

母は、私が五年生の昭和二十四年十二月、突然、猛烈な血を吐いた。翌日、母を入院させるため、父の会社の三輪トラックを頼んだ。父は母を抱き上げ、歩道と車道の間にあるどぶをまたいだが、動けなくなった。その一瞬、私はどぶに落ちると思い〝あっ〟と声を上げた。運転手が慌てて母を受け取ってくれた。

家族は両親に男五人の子どもの七人家族、私は次男だった。五歳の弟がいたので私が学校を休んで守をした。母はその時、三十九歳。

翌日、弟を連れて病院に行った。母は吐いた血が溜まっている膿盆（のうぼん）を抱えていた。私は、唇の血を拭いてやりながら、母の変わりように目が潤み、母の顔がかすんだ。

「肺病だって」と母はかすかな声で、弟の頭を撫でた。その病気がどれほど恐ろしいものなのか、まったくわからない私だった。

母が、耳を近づけなさいと手招きした。私は顔を寄せて食事の仕方を習った。

朝早く、製麺屋から出来立ての玉うどん十玉を大ザルで買ってくる。母が作り置きした焼き鯖の出し汁に油揚を細かく切って、醤油で味を付ける。それにうどんをいれて食べた。

昼食は麦粉を溶いて、フライパンに油を引き、五、六ミリの厚さで焼く。夕食はコッペパンを買ってきた。食べるのはそれっきりだ。

母は少し喀血が治まり、家に逃げ帰ってきた。あとで聞いたら、病院代が高くて、払えないとつぶやき、涙を拭いた。

母の枕もとに、芋や人参、大根、ジャガイモにタマネギなどを新聞紙の上に並べ、一つひとつ皮剥きや、切り方を習った。やっと、食事らしいものが食べられた。喀血の治まりが悪く、入院を何度も繰り返した。その度に母は逃げ帰って来た。父は寡黙な人だった。ある日、逃げてきた母を猛烈に怒った。

「子どもたちの顔が見えるとこにいたい」と母は泣いた。その後も喀血を繰り返した。私はそれ以来、看病と弟の面倒見で、学校には一度も行けなくなった。

翌年二月、私に微熱が出て、寝汗をかくようになった。母からの感染だった。四月になって、私も六年生だと近所の友だちから聞かされた。

母の病状がいいので、学校へ行ってみた。

三時間目だった。四時間目が終わったので、学校が近いので走って帰ってみた。

母は、猛烈に血を吐いていた。弟が枕元で、焼き芋を頬張っていた。オマルのおしっこを捨て、洗面器の血を投げて洗う。

枕元においたご飯と味噌汁を、スプーンで母に食べさせる。昼からは行くのを止めた。

三時近くに、玄関に誰かが来た。担任の女の先生だった。チリンチリンと風鈴が鳴った。私を呼ぶとき、母は、そうして風鈴の鐘を釘で叩いて私を呼ぶ。母を振り返ると、上がってもらいなさいと手招きした。

先生は部屋を覗くなり、棒立ちになった。母は、血だらけの洗面器を抱えてる。枕元に、夕食の支度の野菜と、まな板に包丁がある。下げてある蠅取り紙が、蠅で真っ黒だ。部屋中に銀バエが、唸って飛び回っている。

先生は一声も発せず、慌てて逃げて帰った。

別な日、学校へ行くと腕の内側に小さな注射をされた。それがだんだん赤く腫れてきて、真ん中が腐った。それを見た母は言った。

「肺病で休んでいる子に、なんでツベルクリンなんだ」と怒った。

学校へは六年生の卒業まで、三日と行ってなく、卒業式も中学の入学式も行けなかった。

私の日常は、朝五時半に起き、ヘッツイでツバ釜の飯を炊く。七輪で味噌汁や塩ホッケを焼き、父と兄弟の弁当を作る。母親に一口ずつ食べさせる。片付けると、母の頭から毛布を掛け、部屋中の窓を開け、箒で掃く。舞い上がったゴミを、風が外へ運んでくれる。

それから洗濯をする。冬になると、指の関節が皹(ひび)割れ、硬いコブになる。皹(ひび)の割れ口を、安全カミソリで硬く盛り上がった部分を削ると、お湯に手を入れても指が曲がるようになる。そうして、七人分の洗濯をした。

私は医者から直射日光と夜露に当たるなといわれていたが、午後三時ごろから、魚屋、八百屋の買い出しにでる。

今日はサンマがある。おばさんたちの脇をかいくぐって、皿に載せられたサンマの数をかぞえる。七匹のがあった。それと言いかけたとき、どこかの小母さんの手が伸び、取られてしまった。また、皿にサンマが載せられる。七本盛られるのをじっと待つ。ようやく、七本盛りを買うことができた。野菜を買い、豆腐屋でおからと油揚げを買う。

夕食が済み、翌朝の準備が終わると八時だ。「灰色の部屋」「君の名は」のドラマがはじまる。二部屋なので、九時には全員一斉に寝床に就く。

母は病身のまま死に、父も逝った。兄弟も両親の待つ彼岸へ。

令和と変わり、私は一人残され八十三歳に。仏壇前に座り、灯明・香をたてて読経する。

随筆　佳作

断裁機の追憶

森田　昌恵

私の祖父は明治生まれ、いくつかの職業を経験した後、印刷物仲介の仕事に就いた。その傍ら製本の仕事も請け負うことになった。まだ若かった祖父の娘は、祖父の片腕となり製本業に勤しんでいたという。「北海印刷工芸社」と立派な社名を名乗っていたが、内実は細々としたものだったと聞いている。

それから何年かが経った。大黒柱だった祖父が体調を崩し、仕事から退かざるを得なくなった。そこで、働く人を求めたところ田舎から一人の青年がやってきた。若者は祖父の仕事を見て覚え、体で覚え、結果、祖父の仕事を引き継ぐことになった。やがてその青年と祖父の娘は結婚し、私の父と母になった。

昭和二十年代後半、祖父が製本業を始めたとき、断裁機という道具を買った。母に「道具？」と訊くと、「いや、機械だ」とこたえた。値段は七万円位だったそうだ。ひと目見て、鉄のかたまりといっていい。その重量は何百キロもあっただろう。頑丈な足が四本、グランドピアノくらいの大きさ、部品が幾つかついているテーブル状のものだ。

断裁機は、たくさんの紙を重ね一気に切る道具である。うちにあった断裁機が道具だったのか機械だったのか定義は難しい。すべて人力で動かすものだったので、私は道具と呼ぶことにする。紙の大きさは、どのようなものでも切れた。厚紙も切れたようだ。大概は普通紙というか、印刷に適した紙を切っていた。紙の切り方は次のようである。まず分厚いテーブル状の断裁機の上に何百枚も重ねた紙を乗せる。紙の束が乱れない仕組みがあり、この段階で紙の束はきちんと整っている。断裁機の正面にはハンドルのようなものがあり、それを動かすことで紙の切る幅を決める。決めたら万力をあてがい、紙の上からきつく締める。万力が断裁機とどのように一体化していたのか、残念ながら記憶にない。

紙を切る刃は、断裁機の鉄の棒の動きと連動している。円柱状の鉄の棒の根元は断裁機の右側にあり、そこから左側へ伸びている。それを一八〇度ぐるりと右へ倒す。刃がその時出てきて、紙を切る。鉄の棒を左側へ戻すと刃はもう現れていない。刃はおどろくほど鋭い。人の首もすっと落とせただろう。刃渡り八〇センチくらいだったろうか。

幼い頃から父と母が二人で断裁機を使う作業を見て、自分も切ってみたいと思ったのはいつ頃からか…。断裁機で切り落とされた使い道のなくなった紙がどっさり出る。それを私が切る。断裁機に適当な紙を何百枚か揃える。作業の工程はもうすべて知っている。直径五〜六センチの鉄の棒を左から右へ倒す。刃は、さあぁと軽い音をたてて紙を切り落とす。紙の切り幅を何度も変え鉄の棒を何度も動かしては紙を切ってみる。その切り口は一枚の〝面〟だ。羊羹の切り口のように真っ直ぐで美しい。私は飽きるまでその作業を続けた。

断裁機はおもちゃではない。どうかすると大怪我の危険さえある。でも私のなかには恐れはひとかけらもなかった。冴え、しずまった気持ち。それでいて昂ぶる気持ち。そばに父も母もいない、断裁機で遊ぶとき私はひとりだ。最近になって母に尋ねた、「私が断裁機で紙を切って遊んでいたの知ってた?」と。母は「えー?」と驚きを見せた。「今思ったらゾッとするね」とも。普通の親だったら絶対許さなかっただろう。子供が断裁機に近づこうとしただけで叱っただろう。でも私の親達はそうではなかった。父も母も仕事に忙しすぎ、また祖母は病の床に臥した祖父の世話に忙しく、子供の様子に注意を払う余裕がなかったのでは、と思う。特殊な家庭環境が私にありえない遊びをゆるしたのだ。

断裁機での遊びに夢中になっていたのは、小学校低学年の頃である。母は「あれは男の仕事だ」とも言っていた。重たい鉄の棒を左から右へ一八〇度動かすのには、かなりの力が必要だ。大人がするように一気に動かせたのか。多分できなかっただろう。でも、重たくて大変で頑張って頑張ってやっとできた、というのでもなかったと思う。子供なりのやり方で全身を使い、鉄の棒を少しずつ動かしたのだろう。真剣に油断なく、研ぎ澄まされたこころで断裁機と遊ぶ。父や母や祖母が見咎(とが)めなかったから出来た、私の最高の遊びだ。

断裁機は平成十年頃まで家にあったが、父の仕事の形態も変わり、断裁機にたよる仕事が激減していく。断裁機大活躍の時代は過ぎ、逆に家にとって大きなお荷物になった。そうした時期に運良く、欲しい、という人が現れ、二つ返事で渡してしまったそうだ。

あの黒く鈍く光っていた断裁機、もしも今会うことがあったらどうしているだろう。母は「また切ってみたいね」と言っていた。私も同じように思った。心地良い緊張感に身をまかせ、断裁機を正確に動かし鋭利な刃で何百枚もの紙を切る。還暦を迎えた今も、あの感触が、この体に、両腕に、残っている。

随筆　佳作

私の玩具箱

元木　いづみ

ほら、見てごらん、
面白い木が　あるよ。
綺麗なお花も　咲いているよ。
小さな生命が　蠢（うごめ）いているよ。
―自然の囁きが聴こえる。―

空を見上げ、両手を差し出し、まるで「高い、高い」をしているように見える木。

根元が籠の目のように張り出して、こんもり小山のようになっている松の木。

早春、赤紫色の花弁を誇るエンレイソウ。

自然たちは、四季を通して私を拒むことを知らない。

私は、歩くことが好きである。

昨年、二〇二〇年は、「新型コロナ」の衝撃から始まった。都会で起業した家族や癌を発症した身内のことなど、怯えにも似た不安は喉元にいつもひっ付いているようだった。

当初は、巣籠もりを遵守し、マスク作りの針仕事や読書など下向きの作業が多かった。

そのせいか眩暈・ふらつき・吐き気、加えてペットロス症状で、閉塞感に飲み込まれそうになった。

それでも、スーパーへの買物がてら、フレイル予防も兼ね極力歩数を増やすために入口から遠くに駐車し大回りに心がけていた。

そんな折り、六月中旬、初夏の風に誘われて、ウォーキングしようと午後から車を出した。あてはなかった。取りあえず西部地区へ向かった。駐車場を探しながら、結局、函館山の麓の登山口に着いた。

山登りは、十数年前からの腰痛・股関節痛から少しずつ遠ざかり、函館山は三年ぶり。歩き通す自信はないが、行ける所まで行こうと思った。下山は七曲りコースを選んだ。準備不足と雨の後の道だったので滑らないように緊張感をもって慎重に下りた。

歩き通した満足感はあったが爽快感に欠けた。体力に余裕がないことを知らされた。

その後、近くの野山や公園を歩き始めた。秋には義母を見送り、忘れ難い一年となった。

今年、二〇二一年も、新型コロナの猛威は収まることのないまま新年を迎えた。

松も明けないうちに事始めとして、家の近くの畑地の周りを歩いた。急ぎ足で体が温まると、冷気が頬に気持ちよい。

日を隔て、雪景色を見ようと外に出た。だだっ広い雪野原に目をやった。その時に限って、遠くに佇む函館山が目に飛び込んできた。

数日後、大寒に入って間もない日、その畑地に行った。厚い雲の隙間から悪戯っぽく春めいた光が漏れて驚いた。そうだ、また麓までも行ってみようか、と思わせる優しい光だった。

暖冬の二月の半ば、函館公園を歩いた。動物園で初めてミニチュアホースに対面した。

ちょっと小高い所からなら、どこからでも見える函館山とその麓と親しくなりつつあった。

三月三日。風はやや冷たかったが晴れて暖かい日だった。外人墓地あたりまで行こうと考えたが、急遽、少しだけ函館山に寄ることにした。準備は万全。しかし、雪道の時は十年以上も行っていない。試しだから、と歩き始めた。

その日は、リズムよく雪を踏みしめられた。裸の樹木の間から、青空と白い雲が見え心が弾んだ。足がよく動く！二時間ほどの森の旅は快かった。

その後も、初めて観音コースを体験したり登山の指導してくださった方と再会するなど楽しい三月になった。一月に垣間見た優しい光が思い出された。

家から一歩外に出て、陽の光を浴び、たっぷりと外気を吸い込み、青空・雲・雨・雪の中でも、樹木・草花・動物、出会った方々と挨拶やさり気ない会話をかわし、時を共有する。

静寂の中、体の声に耳を傾け、心の中で呟く。私にできることは何か、私にできることは何か、と繰り返し問う。今、元気だから、誰かの役に立つことも少しはあるはずだ。

家族の仕事が順調に進みますように、身内の病が快方に向かいますように……と祈るのみの行為に不安が浮遊し、私の周りをぐるぐる回る。

人には話せない心の内のことも、時の流れと共に閉じ切った唇からスーッと息を吐くように漏れる日も来るだろう。いつかは靄(もや)も晴れ、心も体も軽くなる日も来るだろう。

ゆらりゆらりと風に揺れるシラネアオイや木々を遊び回るエゾリスに出会ったあの日。

野山を歩くと、自然の思い出が次から次へと甦る。

自然は、私の玩具箱である。

随筆　佳作

睡魔の夢

武田　勉

「この街は住みやすい。そのとおぉり」
「食べ物が新鮮でうまい。そのとおぉり」
「人は皆親切だ。そ、そ、そのとおぉり」
海峡の風が吹き抜ける高台から、眼下の街に向かって呪文に似た叫び声を上げると、ちょっぴり気分がすっきりします。
ただ、街なかを歩いていても人影は少なく、熱量みたいなものがあまり感じられないのが気にかかるところです。
そんなどことなく寂しさが漂う故郷にも恐れている新型コロナがやってきて猛威を振るうかもしれません。身の回りには他にも命の危機につながる病気や事故、災害なども多くあります。ひょっとしたら天災より怖い人災による危機が迫ってきているかもしれません。とても気の抜けない状況が続いています。

戦後生まれのわたしは戦争による災難を経験することもなく無事に過ごしてこられた幸運な世代でした。歴史的に見ても稀な期間であったように思われます。しかし、ここに来て時代の歯車は思わぬ方向へ回り始め、永遠に続くと思われた平穏な時代が見失われようとしているようです。
まだ若くて幸せな時代のころは、何事においても希望に満ちていました。目から超人のように青緑色のビーム光線を発し、はるか彼方の未来を一直線に見詰めていました。その先には超近代的な未来都市があり、そこで活躍している自分の姿がキラキラと輝いていました。かならず自由と豊かな暮らしを両手につかみ、明るい未来が到来することを誰もが信じて疑う余地などありませんでした。

ところが、躍動していた時代はジェット機より速く飛び去り、いつの間にか高齢者とか老人と呼ばれる身の上になり、未来社会では想定外のカテゴリーに入れられてしまいました。巷間には排気ガスのような重苦しい空気が漂い、未知の疫病も蔓延して生命を脅かしています。
風通しの悪さなのか心身の病なのか、あるいは加齢によるものか判然としませんが、場所や時間帯に関わらず眠気が襲ってきます。突然やってくるこの眠気はベッドで寝ている時より何倍も心地好いのです。数分のときもあれば一、二時間のこともあります。気が付けば椅子などに座ったまま爆睡しているので自分ではコントロールできないのが難点です。噂に聞く睡魔というものかもしれません。信仰心の薄いわた

しは快適な寝心地の感触のみが残っているだけです。

睡魔は過去の楽しかった記憶だけを夢の中に浮かび上がらせます。大勢の人が押しかけた十字街の商店街のにぎわいや満員電車で買い物客が殺到した駅前の百貨店、白黒テレビに群がる貧しくも活気と笑顔にあふれていた人たちの電気店の店頭風景などが次々と浮かんできたりします。二十代や三十代だったころ、飲食街のネオンに照らされて回遊していたころの若々しい自分の姿なども見えています。睡魔が映し出す魅惑的な夢に魅了されている間は、新型コロナや抜け毛の悩みなど忘れて再び元気だった過去の懐かしい時代へ逆戻りさせ時を忘れさせてくれます。

手術を数回経た後なので体力が落ちていて、あまりに長い眠りに引き込まれると老化や衰弱が亢進するのが心配になってきます。少しでも気配を察知したら、効果のありそうな魔除け用品などを事前に準備しておいて、振り回すなり投げつけるなりして眠気を阻止しなければなりません。さらには新型コロナに感染するのも怖いですので、外出時には所定のものをチェックし人との間隔を測り、最もご利益のありそうな厄病除けのお守りを忘れずに持って万全の感染対策をして身を守っています。運悪く遭遇したら睡魔より怖い目付きで睨み付けて撃退してやろうかと思っています。ですが、青春時代に目から照射していた強力なビーム光線は使い果たしたらしく、どれほどの威力があるか定かではありません。

睡魔は甘く懐かしい夢の残り香で道に迷った人たちを引き寄せ、逃げる人たちの襟首を鷲づかみにして離そうとしません。どんなに救いの声を張り上げても助けは来ず、自分の身は自分で守らなければいけない大変な時代になってきました。

人それぞれが独自に自助努力をするか祈るよりほかありません。わたしは天気の良い日など故郷の野山へ散策に行ったついでに祈っています。山頂付近から青く輝く海と街並に向かって叫ぶと、日ごろの悩みがうそのように消えはしませんが、その刹那だけ祈りが届きそうに思えたりします。

何が起こるか　予測もできない世の中になってきました。睡魔がやって来る前にお守りを枕元に忍ばせ、去年使って余った渦巻き線香を焚くと魔力や蚊の被害から身を守ってくれそうな気がしてぐっすり眠れそうです。

海峡が覗ける遊園地の観覧車で回りながら、楽しく遊んでいる夢でも見れるでしょうか。

了

選評

対馬　俊明

コロナ禍二年目の随筆部門の応募作は四十編。驚くほどの作品数であるが、一般市民からの応募は二十編とほぼ例年通りの数で、他二十編は中学生一名を含む高校生の作品であった。応募規定には、「函館市内の学校に通学している児童、学生・生徒を含む」となっており、歓迎すべき状況といえるが、今回の高校生の応募作品については、大半が原稿用紙二枚八百字程度の短い作文・小論文の草稿であることにがっかりさせられた。

応募する場合、必ず過去の作品集を読んで、どのような作品が入賞しているのかを確かめてほしい。

一般の応募作品については、回想を語る作品が多いのは当然であるが、体験を思考に繋げていくエッセイ風の作品も見られ、読みごたえがあった。その中で随筆として完成度の高い作品を入選、市民生活の様々を伝える作品を佳作とした。

入選「パラレルワールド」山野　みちこ

今年の夏の猛暑から冷夏への急激な変化を扇風機とポータブルストーブの併用でやり過ごすなど、函館での生活の知恵を披瀝しながら、東日本大震災から十年、福島の復興記念のはずの東京オリンピック・パラリンピックが「人類」がコロナに打ち勝った証しとして世界に喧伝されるなど、パラレルワールド（平行して重なることがない二つの世界）を巧みに生きる日本人の適応力を揶揄的に披瀝した作品。おもしろい。

入選「先に逝くものは逃げ得、されど。」外山　聖武

妻を失って、その七回忌までの心情を書き記した作品。通夜で、葬儀社の人がかけてくれた言葉「気持ちですから」に、はりつめていた心が慰められたこととか、慣れない家事に取り組む中、在りし日の妻の面影をそこかしこに見る描写などを通じて、妻の存在がいかに掛替えのないものであったかを伝えてくる。さらに、その後、山登りを始め、ブログを作るという、人生を完結させるための努力の姿が語られる。人が生きる究極の意味を考えさせられる作品である。

入選「コロナを巡るエトセトラ」高橋　剛治

毎日のコロナ・ニュース視聴のストレスゆえか、頭頂に小円形脱毛が出来てしまったという話を枕に、大学時代の重量挙げ部の友人が「コロナ」と綽名されていたことを思い出す。彼はいつも「コロナ・エクストラ」とプリントされたTシャツを着て、コロナビールを飲みながら、重量挙げ部に部員が集まらないことを嘆いていた。四十年以上昔の話。かつてボクシング部だった私は、スーパーで見つけたコロナ・ビールを飲みながら、オリパラの重量挙げで安藤選手が銅メダルを獲得したのを見て、あいつ見てるかな？コロナがそんなに悪者じゃなかった時代があったことに心が和む。

入選「二人の祖母」　谷口　敦子

開拓農家の娘として生まれ、零細農家の嫁になり、その一生を土と共に生きた父方の祖母と、開拓村で唯一の医師であった祖父の妻であり、九州の高等女学校を出て東京の産婆学校で学んだ経歴を持つ母方の祖母。両家は開拓村で「お向かい」に住む。子供である私が、母の使いで母方の祖母の所に行くと父方の伯母の機嫌が悪くなる。昭和三十年代の開拓村での両家の微妙な関係を体験した私。「どちらも少しずつ不幸でそれでも少しずつは幸せだったと思いたい」という含蓄ある最後の一文がすばらしい。

佳作「少年のころ」　佐藤　憲明

昭和二十四年十二月とある。喀血した母を車で運ぶ父。母の代わりに家事を引き受ける少年。血だらけの洗面器を抱える母を見て逃げ帰る先生など、その惨状を描く描写力に感心する。ただし、この作者の描写中心の作品について、随筆というより、私小説の範疇に入れるべき作品とも読めるが、冒頭に年号を示し、作中でツベルクリン接種にも触れていることも含め、明治から昭和に至るまで流行した結核の罹患家庭の実際を描くことで、現代のコロナ時代の我々に警鐘を鳴らす意図を持った作品として評価した。

佳作「断裁機の追憶」　森田　昌恵

鉄の固まりのような断裁機が家に運び込まれて、それを動かすためにやってきた青年と娘が結婚、私が生まれる。まるでおとぎ話を語るような語り口だが、町工場があちこちに出現した戦後の復興期の様子がよく伝わってくる。巨大な断裁機にとりついた少女が、鋭利な刃がついている断裁機を操作している姿は恐怖映画の一シーンを見るようだ。昭和という時代背景が生きている作品。

佳作「私の玩具箱」　元木　いづみ

最初に、自然賛歌の詩があって、「私は歩くことが好きである」とある。次に二〇二〇年は「新型コロナ」によって、巣籠りを遵守。閉塞感に飲み込まれそうになりながら、歩くことを心がけ、六月中旬函館山の麓の登山口に着く。二〇二一年も新型コロナの猛威は続く。函館公園を歩き、函館山に寄る。そこで、出会った方々とさりげない会話を交わす。「私にできることは何か」自然の思い出が次から次へと甦る。ひとり歩きのつれづれに、心に浮かぶ諸々を書き綴った文章として、心が晴れていく思いがした。

佳作「睡魔の夢」　武田　勉

海峡の風が吹き抜ける高台に立つ思いで、かつて語られていた、この街の住みやすさ、食べ物のうまさ、人の親切を思う。そんな故郷にコロナがやってくる不安。若くて幸せな時代、未来都市の到来を疑わなかった時代から、あっという間に高齢者・老人と呼ばれる身の上になり、睡魔は過去の楽しかった記憶だけをよみがえらせる。今は自分の身は自分で守らなければいけない大変な時代。人それぞれに努力するか

祈るより外ありませんという睡魔にかこつけた詩的瞑想文。眠くなるような文章がおもしろい。

小説　入選

遠い夏

大西　弘子

函館の夏は花火の音とともに始まる。
中学生になった朝倉真生（あさくらまお）は友達同士でお祭りに行ける楽しみに胸を躍らせていた。初めての、親のいない夜のお出かけ。
だけど母は口うるさく心配という名の迷惑を振りかけてくる。
「本当に友達だけで大丈夫？遅くならないで帰ってくるのよ」
「うるさいなあ。いつまでも子供扱いすんなよ」
「何よその口の利き方！まだ子供のくせにさ」
ガミガミ言い続ける親が鬱陶しくて真生は無言を決め込んだ。何を言われても完全無視。
「真生！」
心配そうに玄関までついてきた母の目の前で乱暴にドアを閉めた。自転車に乗り込むと一気にペダルをこぐ。あーうるさい、マジでウザイ。自分でも持て余すイライラに真生は唇をかんだ。
待ち合わせのコンビニの前にはすでにみんなが揃っていて、真生の姿を認めるとおーいと手を振った。
「もう店出てるよな」
「俺、ぜったい焼きそば食う」
興奮しているのはみんな同じようで、誰もがいつもよりテンションが高かった。
まだ日は高く花火の打ち上げまで何時間もあるというのに、同じようなグループがいくつも同じ方向を目指している。
「すげえ人ごみ」
少しビビッてみんなで寄り添うようにして人の流れに身を預けた。まるで川が流れるように同じ方向に流れていく。
夕暮れが迫り、空が群青に染まってくると明かりがついたお店は更に魅力的に映った。キラキラとしたライトに照らされて、美味しそうな匂いが充満してくる。
現実と異世界とが混ざり合うような不思議な感覚。親と一緒じゃ味わえないフワフワとした高揚。
そんな不確かな一瞬だった。
今まで何度も通ったその場所にぽっかりと暗闇が現れたのは。
「ん？」
視界の隅に何かが動いた気がして目を動かすと、喧騒とは無縁そうな小道が一本続いていた。露店から外れているせいか真っ暗な路地だった。他の路地とはまるで違って、人の気配がまるでない。

気を取られてそれを見ていたのは、ほんの数秒の事だったと思う。だけど友達に視線を戻した時にそこには誰もいなかった。
「あれ！？」
慌てて辺りを見渡したけれど、どこにも友人たちの姿はない。もしかして真生がはぐれたことに誰も気がついていないのか。それとも探してくれているのか。
まさか迷子？　と、嫌な汗が出た。
そうだ電話、とスマートフォンに手をかけたけれど何故か圏外になっている。
「は？　まじかよ」
これだけの中心部で圏外って。なんで？
足元が奇妙に歪んだと思った瞬間、強いめまいを感じてしゃがみこんだ。
ぐるぐると世界が回る。

「おめえ、どこのもんだ？」
ふいに肩を小突かれ、真生は顔をあげた。
見ると何もない、のっぱらだった。まばゆい出店はどこにもない。
「え？」
何が起きているのかわからず声を漏らすと、いぶかしげな表情を浮かべた男たちがひそひそと耳打ちをしているのが見えた。みるからに貧しそうに薄汚れている。
何日も洗濯をしていないような、煤けた白いシャツ。ダボついたズボン。饐えたにおいが鼻をつく。
「ずいぶんとヘンテコな格好をしてあやしいもんだ。交番に連れて行くべ」
「おら立て」
だけど男たちは真生の方こそ不審者と思ったらしく、襟首をつかむと無理矢理立たせた。
「こんな子供が諜報員ってことはねえべ」
「わからん」
取り囲まれジロジロと品定めするような視線が不快だ。汚ねえオッサンが何様だよと顔をしかめた。
「離せよ！」
思わず振り払うと男たちは一気に気色ばんだ。
「なんだあ、おめえ！　大人にそんな態度を取っていいと思ってんのか！」
殴られる！　振り上げられた拳に身をすくめた真生の背中に高くもなく低くもない声が届いた。
「待ってください！」
その声はスルスルと真生と男たちの間に入り込んで「申し訳ありません」と続いた。
「ぼくの家に疎開してきた親戚の子で、何も勝手がわかっていないんですよ。ご迷惑をおかけして」
しっかり腰から頭を下げたのは、真生と同じような年ごろの

男の子だった。スッキリとした顔立ちに柔らかな笑みを浮かべている。
色白で半そでのシャツから出ている腕はすぐにポキリと折れそうに細い。
「どうか許してくださいませんか」
「ああ、まあ、坊ちゃんが言うんだら……」
さっきまでの乱暴さを消した男たちは顔を見合わせると気まずそうに踵を返した。それが見えなくなると彼はゆっくりと振り返り、真生に笑いかけた。
「危なかったね。諜報員疑惑なんて生きて戻れないところだった」
「……助けて、くれたんだよな、ありがとう」
ひとまずお礼を言うと、彼はニコリと笑みを浮かべる。
「それにしても君、本当にどこから来たの？見慣れない顔だよね。それにこのご時世にずいぶんと贅沢な格好をしている」
どうやら話が通じそうだと真生はさっきから気になっていたことを口にした。
「っていうかさ、これ何？　今日って花火大会だよな。ドラマのロケかなんか？」
「あ、待って、敵性語なんて使ったらダメだ。聞かれたらまずいことになる」
彼は真生の腕を掴むとグイグイと人気のない方へと歩き始めた。
どこか見たことがあるような、でも古ぼけた景色がずっと続いている。少し歩いて海へ出ると、そこには真生も見知った風景があった。
弧を描くような海岸線。緑が濃く生い茂る函館山。自転車で向かう時に見たのと同じようで少し違う。同じ場所なのに違う場所。
「わけわからん！」
突然頭を抱えてうずくまる真生に彼は柔らかな声をかけた。
「ねえ、ゆっくりでいいから教えてくれないかな？　君はどこから来たの？」
優しい声に思わず涙腺が緩んだ。
意味の分からない現実にどうしていいのかわからない。ついさっきまで友達とはしゃいで祭りの夜を楽しんでいただけなのに。
今、なにが起きているのか知りたいのは真生の方だ。
夢か？
もしかして花火大会もお祭りも今この瞬間も全部夢で、目を覚ませば自分の部屋にいるのか。なんて奇妙な夢なんだ。早く目を覚まそう。
ペチリと頬を叩く。けれど、痛いだけで状況は何も変わらなかった。
「……大丈夫？」
引き攣るような笑みに真生は盛大なため息をついた。

どうやら夢じゃないらしい。
「ここって函館で合ってる？」
「合っているよ」
「じゃあいつ？」
我ながら変な問いだと思ったけれど、どう考えても時代がおかしい。頭でも打ったのかと自分でも心配になる程バカな質問だ。だけど返ってきた答えに思わず笑い声をあげた。
「昭和２０年７月１２日」
「まじで昭和？　令和じゃなくて」
「おしい！　響きは似ているけど昭和」
板を打ち付けただけの建物を眺めながら社会の授業を思い出そうとした。暗記した年表を記憶の海から救い上げる。
昭和２０年って確か第二次世界大戦の真最中ではないだろうか。終戦を迎えた？　まだ？
急に足元から崩れるように真生は腰を下ろした。隣に少年も座る。
「名前はなんていうの？」
「朝倉真生」
「ふうん、綺麗な響きだ。僕は柳栄三（やなぎえいぞう）」
涼やかな顔立ちに似合わない響きに思わず笑ってしまった。うちのひいじいちゃんと同じ名前だ。
「なんかおかしい？」
「いや、なんつーか渋い名前だなって。おれのひいじいちゃんと同じだ」
「ひいじいちゃん……」
栄三はきりっとした眉を落とすと少しだけ考え込み「それは光栄と言うかなんというか」と呟いた。それがおかしくて真生は励ますように背中を叩いた。
「うそ、かっこいい名前だな」
「本当かなあ……でもありがとうって言っておくよ」
笑ったら力が抜けた。
こんな最悪な状況、一人だったら耐えられないだろう。意味が分かんないし不安だし混乱しているけれど、栄三がいるから少し落ち着ける。
「坊ちゃんって呼ばれていたけど偉い人なの？」
さっきのおっかないじいさんたちが栄三を見て慌てたように逃げていった。
栄三は小さく首を振った。
「偉くはないよ。代々この辺の大地主の家ってだけでさ。兄さんたちは戦争にいって素晴らしいご活躍をされているけど、ぼくは三男でただの穀潰しだ」
大地主ってことはこの辺の土地は栄三の家のものってことだ。それってすごいお金持ちってことじゃないのか。
「でもすげえな」
素直に思ったから口にすると栄三は眉を寄せて笑みを浮かべた。

「それより真生の事だよ。いったい君はどこから来たの？君の着ている服や持ち物なんか上等すぎてすぐに目をつけられてしまう」
「上等って全然だよ。千円くらいで買ったやつだし」
「千円？！」
素っ頓狂な声に、そうかお金の価値が違うんだとこれまた授業を思い出す。こんなところで役に立つとは思わなかった。
「あ、いや、話せば長くなるっていうかおれ自体意味が分かってないんだけど、どうやらタイムスリップしたようだ」
「だから敵性語はダメだって！」
栄三は真生の口を押えると誰にも聞こえていないか確認するように辺りを見渡した。
「そんな米兵みたいな言葉を口にしたらしょっ引かれる」
「ご、ごめん」
もしこれが夢じゃなくて現実に戦争中なら、確かにそうだ。野球も全部日本語に直されたって聞いたことがある。不便だ。
「で、何？　どういう意味だったの」
「あ、うーん、時代を飛んだって言えばいいのか？　わかんないけど、おれがいたのは今より八〇年近く未来なんだ。この時代のことは歴史の授業で習ったし、ひいじいちゃんたちの時代の事なんだ」
「それはずいぶんと不思議な話だね」
栄三は目をぱちくりとしながらもばかにしないで真生の話を聞いてくれた。
長い昭和が終わり、平成が来て令和の時代を迎えた。それから数年が経ち真生のいた時代は穏やかで平和な生活を送られている事。数々の困難を乗り越えた先の未来に真生は生まれて生きている。
「そんな未来が来るならやはり日本には神風が吹いて守っていただけたんだね」
いや違うよ、と言いかけてやめた。
そんなこと言っても仕方がない。原爆が落とされボロボロになって負けたよ、なんて。
「それで今日は友達と花火大会で、焼きそばを買って、綿あめを食べて……」
「ああいいね、花火大会。港まつりの賑やかさはぼくも好きだよ」
「知ってんのか？」
「今はお咎めがあって開催されないけど、ぼくがまだ小さい頃はみんなでゴザを持って花火を眺めていたものだよ。とても華やかだった」
「そうか、そんな昔からあったんだな」
そんな楽しい花火大会に行ったはずが何故ひとりはぐれてこんな事になっているのか。あの時見た暗い小道がここに繋がっていたのか。
いくら考えてもわからない。

それに早く帰らないとまた母さんにガミガミ怒られる。「なんでこんなに遅くなったのよ！？」と響く怒鳴り声を想像して真生は顔をしかめた。
好きで遅くなったんじゃないよと文句を言いたい。
「あ、スマホ！」
繋がったら助けてもらえるかもと取り出したけど、どこを触っても動かない。やっぱり無理か。
「それは何？」
未来から来たという話をまるっきり信じたのか、栄三は瞳を輝かせてスマートフォンを見ている。
「これはスマホっていってネットに繋がって色々できるものだよ」
「ごめん意味が分からない」
「うん、わかるはずないよな」
誰かから連絡が来ていないかと見たけれど、くるはずもない。明るくなる画面だけの宝の持ち腐れ。もう一度リュックにしまうと空を見上げた。
高い建物がない今の町並みは空が広く見える。海鳥が優雅に羽を広げ、影を落とした。
「どうやったら帰れんのかな～」
「その方法を一緒に探そう」
栄三がそういうと心強くて、真生はうんと頷いた。
「行くアテはあるの？」
「あるはずないじゃん」
「そうだよね、じゃあぼくの家においでよ。何人か疎開している人を受け入れているから混ざってしまえば大丈夫。でもその服装じゃ目立ちすぎるからぼくのを貸してあげるよ」
「いいのか？」
「困ったときはお互い様。遠慮なんかしなくていいからね」
人の目から隠れるように栄三の家へと向かった。
大地主というだけあってかなり広いお屋敷だった。いくつも部屋が並びたくさんの人が忙しそうに働いていた。ここに来るまで見たくたびれた街並みとは全然違う整えられた空間。戦争中でもあるところには何でもあるのだと驚くほどに。
「こっち」
ふすまをあけて滑り込むと広くもない個室だった。小さな文机には本がのっている。栄三は箪笥からシャツとパンツを取り出すと「はい」と真生に手渡した。
「新しくなくて悪いけど」
「ありがとう、借りるよ」
そでを通すとまあまあサイズは合った。今まで着ていた服はリュックにしまい込む。
「母に顔を見せてこよう」
連れられて居間へと向かうと栄三に似て綺麗な女の人が繕い物をしていた。
「お母さん」

「あら、栄三さんお帰りなさい」
ニコリと笑みを浮かべる栄三のお母さんに母の面影を見た気がして、思わず涙腺が緩んだ。普段は口うるさい母親に腹を立てていたのに、今、会って安心したくなっている。
「お母さん、彼はぼくの友達で行く場所がなくて困っているんだ。うちに置いてあげてもいいだろう？」
「それはお困りでしたね。狭い家ですけど、どうぞ」
すんなりと通ったお願いに栄三も満足そうに笑みを浮かべた。
「じゃあぼくの部屋で一緒に過ごそう」
栄三の部屋に戻ると彼は楽しそうに布団を運んできた。
「ごめんね。他の部屋は使っている人がいるし、君もひとりだと何かと困ると思うからさ。しばらくはここで一緒に過ごそう」
「助かるよ、ありがとう」
あの時栄三が通りかかって助けてくれて本当に良かった。でなければ今頃行く当てもなくあの辺をうろついていただろう。あのジイさんたちにつかまって今頃刑務所にいたかもしれない。そんな自分の姿を想像してゾワリと背中が粟立った。
冗談じゃなく、檻の中で帰してくれと泣き叫んでいたかも。拷問されていたかもしれない！
「本当にありがとう！」
思わず手を握り締めると栄三はびっくりしたように目をパチクリとした。
その日の夜はおかゆに何かがはいっただけの食事をご馳走になった。米にありつけるだけありがたいのだと栄三は味わう様に口をつける。
普段の真生の食卓では真っ白なご飯を茶碗一杯にして食べることが出来るし、お皿いっぱいにおかずも並ぶ。それを食べ終わるとデザートにアイスを食べて風呂上りにはジュースを飲む。いつだって食べたいものにあふれ、口に合わなければ残して捨てることもある。
それがどれだけ贅沢で恵まれているのかなんて考えたこともなかった。
スプーン一杯程度のおかゆでお腹は満たされないけど、与えられた親切に文句も言えない。真生も栄三を真似て何度もよく噛んで味わうようにしておかゆを食べた。
当然風呂もなかった。盥にくんだ水にタオルを浸して体を擦った。汗をかき砂埃に汚れた身体をシャンプーやボディソープで洗い流すことができない。流しっぱなしのシャワーや肩まで浸かれるお湯なんてあるはずもなかった。
夜になると灯火管制という最低限の光で過ごすことになった。ほとんど先が見えないような小さな明かりの下で栄三と布団を並べていろんな話をした。
栄三は未来の話をたくさん聞きたがった。
この戦争が終わり、日本が誇らしく勝ったのちの物語。
正確には敗戦からの復興なのだけれど、それは黙っていた。
平和な世の中では世界中好きなところを旅することが出来る。

いくつもの外国語を子どもの頃から勉強したり、インターネットで世界中の人と繋がることができる。
「今は敵同士だけど、いつか仲良くなれる日がくるんだよ」
「想像できないけど……もしそうなったらすごいな」
栄三はこの時代の人間にしては視野が広く、ドラマなどで見る戦時中の人のようにヒステリックに「鬼畜米英」などと叫ぶことがなかった。それよりいつか来る平和な未来に目を輝かせ、もっと話してくれとせがんだ。
「そうだ」
真生はリュックの中に入っていた物を取り出した。
祭りの出店で買った駄菓子やおもちゃを広げてみせる。栄三の瞳がパアッと輝いた。
「触っても？」
「いいよ」
栄三はビカビカと光るおもちゃや射的で落とした外国の車なんかを珍しそうに眺めていた。その中に紐を引っ張ったらブルブルと震えて動くぬいぐるみもあった。
「わ、動いた」
「ああ、それ紐クジを引いたらついてきたんだ」
「紐クジ？」
「そう、ゲーム機を狙ったんだけど外れた」
「げーむき……？」
聞いたことのない単語のひとつひとつをかみしめるように栄三は呟いた。
戦争ばかりの日々では縁のない華やかさに一滴の希望の水が落ちるように。
「そうだ、これ食べてみなよ。うまいよ」
キラキラ派手なパッケージのうまい棒を差し出すとおそるおそる栄三は口にした。サクリと軽い音を立ててうまい棒が栄三の口の中に消える。
「美味しい！なんだこれは」
口を押えてゴロゴロと布団の上を転がる栄三に笑いながら、真生も一本口に入れた。
「うまい棒っていうお菓子。うまいよな、こんなのいつだって買えると思ってたけど……」
当たり前と思っていた暮らしが当たり前じゃなかった。
今の人は贅沢だって聞くたび、これのどこが贅沢なんだよ普通じゃんかって思っていたけど、そうじゃない。何一つ手に入れることもなく我慢を強いられていた時代があったんだ。
感謝なんてありきたりすぎて思ったこともなかった。
真生は口をつぐんだ。
わかっているようで何にもわかっていなかった真生はまだ子供なのだ。
「真生？」
突然黙った真生に心配そうな瞳をぶつける栄三だって、どれだけの我慢を強いられているのか。真生の時代にいたら好きな

ことをやって、勉強もできそうだし、絶対モテてる。
一緒に部活をやったりテスト週間で文句を言ったり、休みの日には一緒に遊びに行ったり。そういう事ができない時代があったって全然知らなかった。ううん、勉強していたけどわかってなかった。
「早く平和になればいいな」
「そうだね」
その夜はなかなか寝付けなくて、真っ暗な夜をじっと過ごした。
車の音も聞こえない。
街灯も家々の明かりも何もない真っ暗闇の中、栄三の静かな寝息だけが聞こえる。
こうやって誰かのそばで寝る安心は久しぶりの感覚だった。両親に挟まれて寝たのはいつが最後だっただろう。母さんの布団に入り柔らかく抱きしめられながら寝たあの頃のぬくもりを思い出したら涙が出てきた。
もう会えないのだろうか。
このまま帰れなかったらどうしよう。
むかつくこともイライラすることもあるし、テストも勉強も嫌だけど帰りたくて仕方ない。
質の悪い夢を見ていただけだと思いたい。目を覚ましたら元に戻っていてくれと強く願ったけれど、朝になっても現実は変わらなかった。
栄三の整えられた部屋を見まわしながら真生は息を吐いた。隣を見ると栄三の姿はなく布団はきれいに畳まれていた。
部屋を出てウロウロしていると「あら」と優しい声がかかった。栄三のお母さんだった。
「真生さんおはようございます、よく眠れたかしら?」
「あ、はい、おはようございます。すみませんご迷惑をおかけして」
頭を下げるとふふと笑い、食事へと誘われた。
「何もなくて申し訳ないんだけどね。今朝取ってきたばかりの大根があるの」
丸いテーブルの上に茹でた大根がちんまりと乗っている。細く銀杏の形をした大根の上に味噌がほんの少し。それをみんなで分け合った。おなかがグウっと音を立てる。それを誤魔化すように声をかけた。
「栄三は出かけたんですか?」
「ええ、さっきこの大根を持ってきてくれて。その後畑の手伝いに行っているわ。」
「こんな朝早くから?」
いつの間に出てきたのだろう。全然気がつかなかった。
「そう。あの子は戦争に行けないから、せめて何かのお役に立ちたいって」
お世話になりながらぐっすり寝て何の役にもたたない自分が恥ずかしくなった。食事を終えると栄三のいる場所を教えても

らい、手伝いに向かった。
せめて何かをしないと、と思ったのだ。
教えてもらった道を歩いていくと、すれ違う人たちが不審そうに真生を見た。この時代はご近所付き合いが密接で知らない顔があるとどこの何物なのか探らずにはいられないのだろう。
ヒソヒソと噂されるのをしり目に畑につくと、白いシャツを泥で汚した栄三が腰を折って何かをしている。
「栄三！」
声をかけると顔を上げ、こちらに向かって手を振りながら笑った。
「おはよう」
「おはよう」
言いながら畑に足を踏み入れるとどうやらかぼちゃがなっている。
「かぼちゃ？」
「そう、収穫まであと少しかなって。これを食べたらみんな元気になれるだろう」
「お前がやってんの？」
広い畑に栄三の他は誰もいない。これを一人でやるのかと思うと気が遠くなりそうだった。栄三は横に首を振った。
「いつも野菜をくださる方の畑でね。ご家族は戦地に行かれていて。女手だけじゃ大変だろうって手伝わせてもらっているんだ」
「へえ」
見ると他にも細々と育てているらしかった。
泥に汚れた栄三の手に居たたまれなくなる。
いつも忙しそうな母さんに頼まれた手伝いを知らん顔してスルーした。疲れたため息が聞こえても関係ないって。おれだって忙しいんだからと無視をした。
そんな幼い自分が恥ずかしくてたまらない。
ほんの少し手を貸したら喜んでくれるだろうし、家族なんだから手伝って当然なのに。
甘やかされるのが当然って思っていた。
「おれも手伝うよ」
「いいの？　ありがとう」
慣れない畑仕事はすぐに腰を痛くし、ジリジリと身を焦がす太陽の日差しは半端なかった。やってもキリのない作業にお手上げだけど、さぼろうとは思わなかった。
真生と同じ年の栄三が我先にと働いているから。ここで弱音を吐くのはかっこ悪すぎる。
時々栄三は空を見上げて、不思議そうに首を傾げた。腑に落ちないという表情。
「どうした？」
「いや、」と言葉を切って、迷いながら口にする。
「いつもは一日に何度も空襲警報が鳴るのに、今日は静かだなって」

「空襲警報？」
「そう。鳴ると防空壕に避難しなきゃいけないんだけど……昨日から静かすぎるんだ」
歴史の教科書に出るだけの単語に真生はブルリと震えた。
あれは作られた物語じゃなくて、栄三のいるこの時代では当たり前の日常なのだ。本当に戦争中でいつ爆撃されて死ぬかもわからない。そんな危険と隣り合わせの現実。
「このままなんともなきゃいいな」
「……うん」
その日の夜は慣れない畑仕事でぐっすりと眠りについた。夢うつつの中でゴホゴホと苦しそうな声が聞こえる。
「栄三？」
ぼんやりと薄目を開けると布団の上に上体を起こした栄三が苦しそうに胸元を押えていた。
「ごめん起こしちゃった」
「ううん、咳……止まんないのか？」
「ん。ごめん、たいしたことないんだけど」
そう言いかけながらゴホゴホと繰り返す。ヒューヒューと喉から嫌な音がした。
「水でも持ってくるか？　お母さん起こしてくる？」
立ち上がる真生を押えて首を振った。
「なんともないんだ。すぐに収まる……ぼくは喘息もちでね、だから兵隊にも行けなくて、いつも足手まといばかり」
子供のころから体が弱く激しい運動はできないそうだ。だけど自分だけが甘えて休むのは嫌だと言った。
「水持ってくる」
真っ黒い廊下をヒタヒタと進む。全ての窓は黒いカーテンに覆われ外に何も漏れないようになっていた。細く開けて見上げるとキラキラと星が瞬き、キャンプの時に見た星空のようだった。
空は今も昔も変わらないのに人々の生活はこんなにも違う。戦争なんて馬鹿げたことはさっさとやめてしまえばいいのに。
水を汲んで戻ると、栄三の発作はおさまって顔色も戻っていた。
「ありがとう」
水に口をつけると、安堵の息をつく。
「今日は暑かったからかな。やっぱり無理は祟るね」
「あまり無理すんなよ。おれも手伝うし」
一日も早く元の世界に戻りたい。けど、栄三たちを他人とも思えなくなってきていた。
関係のない時代に住む関係のない人たちなのにこんなに真生に優しくしてくれる。ならば少しでも役に立ちたい。
子供だからと言い訳をして甘えてきた自分は卒業する。
その後ウトウトとしたらすぐにけたたましいサイレンに起こされた。
「起きて！　真生逃げるよ！」

空襲警報だった。
身の回りの物を背中に背負った栄三が真生を急かす。
「急いで！」
「う、うん」
まさか本物の空襲？！
教科書の中のモノクロの世界が現実に起きている。わけもわからず言われるままついて走った。
「早く！　こっちよ！」
先に逃げていた栄三のお母さんが石垣を掘ったトンネルから手を振っている。中に飛び込むとそこにはたくさんの人がしゃがみこみ空虚な顔で膝を抱えていた。ムッと饐えた匂いが充満している。
栄三と並んで座っていると次々と人がなだれ込んできた。ぎゅうぎゅうの防空壕の中に戦闘機の爆音が鳴り響いた。あまりの轟音に耳を押える。
遠くで弾丸が撃ち込まれているらしい音も聞こえた。
思わず栄三にしがみつくと大丈夫だというように強く手を握られた。その手だって緊張で汗ばんでいる。誰だってこんな状況で平気なはずがないのだ。怖くて仕方ない。
もう二度と両親に会えないんだろうか。友達とも遊べないんだろうか。このままこうやって知らない人たちと一緒に死んでいくんだろうか。
終わるともない暗黒の時間が過ぎると辺りは静まり返り、いつの間にか空襲も止んでいた。
これで終わったのか、助かったのか？
ホッと胸をなでおろしたけれど、まるでゲームに出てくるゾンビのような姿でみんなが防空壕を出ていった。
「助かったの？」
聞けば栄三は首を振った。
「この繰り返しだよ。やつらは何度もやってきては攻撃を仕掛けていなくなる。ぼくたちのことをあざ笑うかのようにね」
だからといって逃げる場所もない。
この場所に住み、防空壕で祈り、淡々と日々を送るしかないのだ。神風が吹き勝つ日を信じて。
少ししてから他の地域が爆撃の被害を受けたとニュースが飛び込んできた。
「たいした被害は出ていないようだが、今日は気をつけたほうがいいかもしれない」
取引のあるお店の人がヒソリともらしていった情報に一家は顔色を無くした。どこかもっと安全な場所へ逃げようと話はすぐにまとまった。
だけど栄三はこれから畑を見に行くという。
「水をやらなきゃ枯れてしまうからね。みんなと一緒に真生も逃げなよ。ぼくは後から行くから」
そんなことができるはずがない。
いつも助けてもらってばかりなのだ。真生も一緒に行くと言

った。栄三から離れることが不安だったこともある。
「ありがとう……じゃあふたりでさっさと終わらせよう」
病弱にはみえないくらい栄三はよく働いた。バケツに水を汲み何度も往復する背中は汗でびっしょりだった。真生も負けずに水を運ぶ。
雲一つない夏晴れの空が青く透き通って見えた。
「ガリガリくん食べてーな」
こんな暑い日の、力仕事の後のアイスはさぞかし美味しいだろう。
「ガリガリくん？」
「そう。今日の空みたいに青くてスッキリした味で夏になると絶対食べるアイス」
「へ～美味しいんだろうね」
額の汗をぬぐいながら栄三は空を見上げた。
「いいな。真生のいた時代。きっと平和で怖い事なんて何もないんだろうな」
「そんなことないよ。テストの点数で怒られるし、先生も嫌な奴いっぱいいるしさ。それに部活もめっちゃ厳しいの」
「そういうことをできることがうらやましいよ。僕の日常は戦争でしかないからさ」
栄三の言葉の重さに真生は口をつぐんだ。
確かにこんな毎日よりはるかにいい。どんなに怒られたって命の危険はないし、なんたって気楽だ。
「……だよな、いつか来いよ、おれの時代」
「いいね、行ってみたい」
自分が今置かれている状況がなんなのか、これからどうなるのかわからないけど栄三のことはずっと友達だったみたいに大切に思える。
「戦争は嫌だし怖いけど、栄三がいたからよかった」
「うん、ぼくもそう。真生に会えてよかったよ」
二度目の空襲警報が鳴ったのは昼になるころだった。
畑仕事を終え、そろそろみんなと合流しようかとした時だった。急いで避難しようと走り出す。
「こらー！こんな時に目立つ場所を走るんじゃない！」
警防団のオジサンが叫ぶけれど、逃げなければ死んでしまう。
「ごめんなさーい」
謝りながら道路の隅を走り抜けた。
空襲警報が鳴っている時は外に出てはいけないらしかった。銃撃の標的になってしまうからだそうだ。そうはいっても外に野晒しでいるのも危なすぎる。
「こっち！」
軒下をくぐるように走り抜けた。
遠くの空に黒い飛翔物が見える。
日本軍が助けに来たのかと安堵したのも束の間、まるで雨あられのように銃弾が落ちていくのが見えた。
「本物の空襲だ！」

こんな間近で爆撃を見ることはなかった。
真生のいた時代も、そして栄三も。
あっという間にそばまで飛んできた戦闘機は低く飛行しながら銃を撃ちはじめた。戦闘員の顔が見えたと思ったらダダダダと激しい音が降り注ぐ。
恐怖と言うより呆気に取られてしまった。
まさか自分の身にこんな事態が起こるとは。それは栄三も同じようで、呆然と空を見上げている。
キイーンと甲高い音を立てて戦闘機が飛んでいく。炸裂する音はまるで花火のようだ。
「死ぬのかな」
ポツリとこぼした声に真生は我に返った。
「ダメだ。死にたくない。逃げよう、栄三」
空を見上げている栄三は目の前で起きている光景に心を奪われているようだった。
「お母さんが悲しむぞ！」
今頃栄三の無事を祈っているに違いない。なんとかして助けに行かなくてはと飛び出しているかもしれない。
「栄三！！」
叫びながら腕を引っ張ると、栄三は我に返ったように真生を見た。焦点が合う。
「こっちだ」
頷いて後をついて走った。
がむしゃらに、これが体育の１００ｍ走だったら記録を出すに違いない速さで家々の間を走り抜けた。
もうすぐ防空壕につくという一歩手前の事だった。
低く飛んできた戦闘機が狙いを定めたかのように射撃を始めた。耳が壊れそうな爆音と爆風が真生と栄三を吹っ飛ばした。あまりの衝撃に意識が飛ぶ。全身を強打した痛みで呻いた自分の声で目を覚ました。
「えいぞう？」
運よく倒れた建物の間に転がり込んだらしい。全身傷だらけだけれどこれといった大きな負傷はないようだ。見渡すとすぐそばに栄三も転がっていた。
「大丈夫か、栄三、しっかりしろ」
体を揺するとううんと唸り、目を開けた。栄三も大きな怪我はないようだった。
ふたりで支え合う様に体を起こした。
攻撃はまだ続いて恐怖の音が響いている。
このままここで過ごしたほうがいいのか、様子を見ながら逃げたほうがいいのか……絶対に死にたくない。生きたい。その本能ともいえる強さに脳がフルに回転し始める。
「行くぞ」
まっすぐに前を見据えた栄三に真生も頷いた。ひたすら生に向かって走り続ける。
さっきまで頭上を飛んでいた戦闘機はとっくに場所を変え、

遠くで火が燃えているのが見えた。町が焼け始めているのだ。恐ろしい地獄絵図が広がっていく。

「酷すぎる……」

見慣れた場所が木っ端みじんに吹き飛ばされている。もっとひどい被害を受けている場所もあるのだ。戦争は今まであったものを一瞬で壊してしまう。人も物も、全て残酷に奪っていく。

防空壕にたどり着くと、中にいた栄三のお母さんは発狂したように栄三を抱きしめた。

「本当に、よかった。あなたに何かあったらどうしたらいいのか……」

自分の家族をお国にささげるのが美徳とされる中、その言葉は非国民と糾弾される。だけど大切な家族を奪われて喜ぶ人なんていない。そう言うしかないから言うのだ。

誰も聞かなかったふりをして、だけど安心したように顔を綻ばせている人がいるのもわかった。

真生は抱きしめあう栄三とお母さんの姿を見て、自分も家族に会いたくなった。

出かける前、心配する母に酷い言葉を投げてしまった。ただ真生のことを想っている優しさを上手に受け止めきれないだけなのだ。

会いたい。

帰りたい。

生きて大切な人たちに会いたい。

元の世界に戻って両親にありがとうと伝えたい。

その瞬間、防空壕の外がまばゆく光った。

背中に衝撃を受ける。目の前にいた栄三が驚いて目を見開いているのが分かった。まお、と口が動く。細い腕が助けようと伸ばされている。

掴もうとして真生も腕を伸ばしたけれどそれは叶わず、光に包まれた身体はバーンと弾かれた。すぐそばで大きな爆音。

もしかして、このまま死ぬのか。

「生きろ！！！」

遠くで栄三の声が聞こえた気がして、そのまま消えていく。

「真生！」

肩を揺すられて目を覚ますと自分をのぞき込む顔がぼんやりと見えた。どうやら今回も助かったらしい。安心しながら「栄三」と名前を呼んだ。

「は？何言ってんの？」

「おーい大丈夫かあ？」

だけどかけられた声は栄三のものではなく、ずっと聞きなれた友達のものだった。

「え？！」

驚きのあまり慌てて体を動かすと、クラリとめまいがした。徐々に視界が戻ってくるとそこは出店が立ち並ぶグリーンベルトで、友人たちが心配そうに真生を取り囲んでいた。

「よかったー、突然いなくなるし倒れてるしめっちゃビビッたー」
「え、ここって、花火大会の……え、まって、栄三は？」
「映像ってなんかやるっけ？　プロジェクトマッピング？」
「いや、普通の花火だろ。多分」
立ち上がろうとしたら膝が痛んだ。見るとすりむいた傷があちこちにある。やっぱりあれは現実だった？
祭りを楽しむ人々の騒々しさはさっきまでいた地獄の光景とは正反対で光と希望に満ちている。
と、大きな音が弾けた。
爆撃かと体をすくませたけれどそれは花火の上がる音で、わあっというみんなの歓声が広がった。空がカラフルな色に包まれる。
「おー上がった」
花火を見上げるその顔に苦悶はどこにもない。
あの時、この場所で、確かに戦争があって、まるで暗闇に包まれたかのような時間があったのに。まるで忘れ去られた時の狭間に落とされた気分だった。
「真生？大丈夫？」
呆然と立ち尽くす真生に友人たちが心配そうな声をかけてくれる。そうか、帰ってきたのか。平和で穏やかな日常に。生きて戻ってこられた。
「大丈夫」
答えて顔をあげた。さらに光の花が咲き乱れる。
ドンドンと地面に響く音はみんなを熱狂させるための音。
栄三、と心の中で叫んだ。
お前たちが苦しんだ世界はもう終わったよ。
ちゃんと平和に明るい夜を過ごせる時が来たよ。
帰ったらちゃんと「ただいま」って言おう。
ありがとうは照れくさくてまだ言えないけれど、家族がいてくれる幸せを忘れないように。大切な人と暮らしていける感謝を胸に。
まるで鎮魂を願うかのように花火は咲き乱れ夜を照らした。

小説　佳作

街の仕立て屋

埋橋優希

街の外れの古い建物。レンガ造りのアパートの一階に仕立て屋の店があった。アイロンの蒸気で毛織物の香りを充した部屋。その中央には大きな裁断用の机が置かれている。そこで男が一人、爪に無数の針傷をつけながら布を縫い合わせていた。

店といっても、その実態はほとんど作業場だった。さらには、この仕立て屋の住居でもあったから、多少雑然とした空間だったということにも触れておかなければいけない。古びたミシンや革のソファ、びっしり詰まった洋服掛け、家具であふれる店の隅には、何体かのトルソーが置いてあった。

トルソーに着せられた洋服はどれも変わっていた。真ん中で裂いたレースを、そのまま体に巻き付けたようなドレス。ハンモックのように湾曲したポケットが付いた紳士物の上着。ケープのように広がる襟に、ウエストが大きく絞られたゴブラン織のコート。どのトルソーも、あたかも本物の人間を凌ぐような、どこか精神の存在を思わせるような佇まいをしていた。

店にやってくる客も、また、変わった客たちだった。身の飾りに対する拘りが一目でわかる。わかりすぎる程であるので、それを悪趣味と捉える人も少なからずいたかもしれない。

ある婦人は、時と場に応じて着こなしをする完璧な淑女だった。が、また彼女は自分の左肩に異常な自信を持つ女でもあった。ドレスだけでなく、昼間に着るアンサンブルの上着も、ブラウスも、ルダンゴトも、不思議な穴から彼女の左肩だけを覗かせる。彼女の服を作っていたのが、この店の仕立て屋だ。仕立て屋は婦人の右肩と左肩の違いがよくわからなかったが、確かな技術で穴あきの服を作り上げた。

また別の常連に、ある貿易商の男がいた。男は最初、舶来品という分厚いラグを抱えて店にやってきた。それでイブニングコートを作れというのだ。彼の異物趣味は、その後発展を重ね、コーヒー豆を入れる麻袋、妻が使い古したペチコート、極東の地に棲むという幻の爬虫類の革、等々あらゆる珍品が仕立て屋のもとに持ち込まれることとなった。つい先日も店に立ち寄った彼は「次は漁網でズボンを作ってもらえないか」などと相談して、仕立て屋の引きつった笑顔をひきだした。

このように、特別に美を愛する、あるいは妄執する男女の望みを叶えるのが、この仕立て屋の仕事だった。それで昼前の時

刻、黒一色の軍服を着た男二人が店に入ってきたとき、その違和感は異様なものだった。仕立て屋は、近頃なにか、やましいことをしただろうか、と内心で狼狽しながら作業椅子から立ち上がった。

男たちの一人が切り出した。

「この国、随一の腕を持つ仕立て屋というのはあなただな」

彼らの用件が自分の仕事であることを理解した仕立て屋は多少の安心を抱いて、肯定とも否定ともとれない微笑を浮かべた。

よく見ると彼らの制服には軍人の階級を示す腕章がない。代わりに王家の城で仕える臣下であることを表す銀のブートニエールが付けられていた。

彼らは手短に往訪の理由を述べた。

「国王陛下がパレードの際にお召しになる衣裳を、あなたに依頼したい」

仕立て屋は一瞬、呆然となった。

「わたくしどもでよろしければ、喜んで」

驚きとともに思い出す。その年は国王の即位五十周年の記念の年だった。そのパレードで着る衣裳。それは、この国で最も注目を浴びる一着といってもよい。職人として最高の栄誉ではないか。仕立て屋の身体の中心では興奮が発熱した。

「ところで、どうして私が選ばれたのでしょう?」

あくまでも平然とした素振りで尋ねる。

「陛下の親しい友人に、ある貿易商の男がいてな、変わり者で有名な御方だ。彼が言うには『腕のいいテーラーなら国中にごまんといる。彼らに作らせれば、それなりの服は出来上がる。しかし、客の側の趣味が問われるのは、趣向が試されるのは、この店をおいて他にないだろう』と。陛下もはじめは『嘘のような分厚いコートを飄然と着る男だ。冗談にすぎない』と笑っておられた。しかし男の言葉が、どうしても忘れられなかったようで……」

仕立て屋は臣下の話しなど上の空で、これから作る服に想いを馳せていた。貿易商の男など、どうでもよい。重要なのは仕立て屋が王に認められたということである。そう、彼の追求した完璧な技術が、あらゆる奇抜な発想も美しさのうちに完成させる術が、その美意識が、この上ない権威に認められたのだ。仕立て屋は半分夢の世界に浸りながら、国王との接見、また試着の段取りについて臣下たちが説明するのを聞いていた。

「では、三日後に」

話を終えると、臣下たちは衣裳の大まかな指示と陛下の細かな採寸値が書かれた紙をおいて店を出ていった。

さて、それから王の城に向かうまでの三日間、仕立て屋は少しも落ち着くことなく仕事をし続けることになった。というのも、与えられる試着の機会はその一度しかなく、この時までに仮の布で作った服（トワル）を三揃い一組分、完成させなければならなかったのだ。

鋏が布を裂く鋭い音が店に響く。カタカタとミシンを踏む音がする。切っては縫い、折っては縫い、徐々に服の形が姿を現していく工程、その全てが仕立て屋の胸を躍らせた。トワルを縫い終えると、待ちきれずにトルソーに着せつける。はやる気持ちでボタンをとめる。少しも目を逸らさずに後ろに下がる。離れてみたり、近づいてみたり、裾を揺らしてみたりしながら目を凝らす。もちろん最初から狙い通りの形は現れない。しかし、いつもは煩わしい余計な皺も、この時の仕立て屋には、それが名誉の一片として感じられた。不自然な箇所を見つけては縫い目を解き、また縫い直す。疲れにも気づかず繰り返した。

そうして、王と対面する日の朝になった。仕立て屋はほとんど眠っていない体に少しの果物を押し込み、完成したトワルを衣装用鞄に詰めた。鏡に向かって軽く髪を整え、礼服の上にドスキンのコートを羽織る。(むろん彼が作った一張羅だ) 革靴の足音を高らかに店を出ると、通りの先にある停留所から車に乗りこんだ。痩せたコート姿に、乗り合いの客たちの視線はやたらと集中するようだった。聞こえてくるささやきも粒だって肌に刺さるような響きがある。仕立て屋は大げさなほど背筋を伸ばして席に座った。

流れる景色を眺めていると、まもなく、並び立つ建物の上にひょいと城が現れる。仕立て屋の腕には鳥肌が立った。彼は、それをどこか浮遊した、どこか冷静な気分で味わっていた。「まるで、この体が自分のものじゃないみたいだ。であれば、この腕も一つの鑑賞物かしら」—そんな空想に耽っているうちに、やがて車は石畳の上を、ガタガタと揺れながら停車した。城に着いたのは、命じられた時間の一時間ほど前だった。

仕立て屋が車から降りると、彼の視界は一面、石材を組み上げた城壁で覆われた。城は近くで見ると、そのほとんどが巨大な塀に囲まれ、尖塔の先だけが空に浮かんでいる。仕立て屋は、あてもなく城を囲む道を歩き出した。城の門はすぐに見つかった。そこには、数人の屈強そうな体付きの門衛たちが直立していた。彼は一瞬ためらったが、他に逃げ場もないため、恐る恐るそのうちの一人に近づいていった。

「国王陛下の要望で来た者です。わたくしは仕立て屋でして……」

門衛は少しも姿勢を崩すことなく、最後まで仕立て屋の自己紹介を聞いていた。

「しばしお待ちを」

後ろの男たちに合図する。

程なく、門の前で所在なげに立っている仕立て屋のもとに、見覚えのある黒服の男が一人やってきた。

「先日は、どうも」

胸を撫で下ろしつつ、彼は城に迎え入れられた。

巨大なアーチ状の玄関を抜けると、廊下の窓からは冬の荒涼

とした中庭が見渡される。
「不具合なく作れたのだね」
臣下は脇目も振らずに進んでいく。
「最善は尽くしましたがね、実際にお召しいただかないことには」
「何万もの国民が、あなたの衣裳を着た陛下を見るのだよ。完璧にやってもらわねば。絶対に」
早口に言いながら、臣下は重い両開きの戸を開けた。暖かい空気が広がった。
仕立て屋が通されたのは誰もいない大広間だった。それは、三階建てくらいの建物であれば優に収まるほどの広壮な空間だった。部屋の中央には巨大な暖炉がある。暖炉からはパイプオルガンを思わせる煙突が何本も、天井に向かって聳えていた。中では炎が勢いよく燃えている。
「時間が来るまで、ここでお待ちを」
そう言うと、臣下は広間を出ていった。
仕立て屋は城の広さに呆気にとられて立ち尽くしていた。が、ふと我にかえり暖炉の脇に置かれた、年季の入ったベルベット張りのソファに腰掛けることにした。ソファに座りかけて入ってきた方向を振り返る。すると壁の上方に、扉よりも一回りほど大きな額に収められた肖像画が掲げられているのが見えた。そこには、闇の中に煌々と照らし出される国王の姿が描かれていた。その居ずまいは、まさに威風堂々たるものだった。仕立て屋は、自分が虫にでもなったような気持ちで肖像画を眺めていた。眺めているうちに、暖炉の暖かさで緊張が緩み、彼は眠気を感じ始めた。そして、いつしか夢現に幼い頃の記憶を辿っていた。

それは、彼が六歳か七歳の頃のことだった。その年も国王の即位何十周年であったか、あるいは他の記念行事であったか、詳細は定かではないが、国王のパレードがあったのは確かである。彼は隣家の一つ歳下の少年とそれを見に出かけたのだ。パレードが行進する大通りは彼らの家から歩いて四五十分かかる距離にあった。少年二人は川沿いの道をところどころ立ち止まっては、川に石を投げ込んだり、落ちている流木を剣に見立てて、「こっちの方がいい」とか、「そっちは曲がってるじゃないか」とか言ったりしながら進んでいった。そのような調子だから目的地に着いた時は、パレードがやってくるほんの直前で、沿道には人の群れが溢れかえっていた。二人は小さな体をいかして、ひしめく大人たちの間に割り込もうと試みた。しかし、どれほど踏ん張ってみても、進めるのはほんの少しだった。そうしている間に、人々の歓声はだんだんと大きくなっていく。どよめきが起こる。とうとう国王の一行がやってきた。少年たちは、もう前に進むのを諦めた。
「さっさと帰ろう」
なかば、ふてくされながら二人は群衆から離れた。そして、騒

めきを背に歩き出したとき、どちらからともなく突然に閃いた。
「そこに木があるじゃないか、これに登ろう」
路傍には青々と葉の茂る楓の木が植えられていた。仕立て屋は、歳上だった自分が率先して木を登り始めたような覚えがあった。それでも、その目で王を見ることができたかどうか。その光景はどうしても思い出せなかった。登っている間に通り過ぎてしまったのだろうか。曖昧になった記憶を反芻しているうちに仕立て屋は、うとうとと眠り始めた。

「陛下がお待ちだ。急いで」
結局、臣下がやって来たのは、聞かされていた時間の二時間以上後だった。臣下は、ついてくるよう言うと大股で歩き出した。王の肖像画に見下ろされながら大広間を出ると、ダマスク柄の絨毯の長く続く廊下を抜け、その先にある大理石でできた階段を上がっていく。寝起きで重い体の仕立て屋は、どこもかしこも気のめいるような装飾で埋められた景色に、「これは夢だろうか」などと思いながら臣下の後をついていった。階段を過ぎ、吹き抜けに面する廊下を行くと、やがて王の待つ衣装室に辿り着いた。まだ頭が冴えきらない仕立て屋は、目を大きく見開き、強いて自分を奮い立たせた。
しかし、王との対面は味気ないものだった。
金細工が施された鏡の前で、五六人の側近たちに囲まれて王は座っていた。仕立て屋は、国王陛下に対するふさわしい礼儀作法などというものは見当もつかなかったので、王が目に入るとすぐに深々とお辞儀をした。
「頭を上げて良い」
低い声が聞こえたので、彼は王の方に顔を上げた。すると、何かを話す隙もないまま、側近たちが詰め寄り、持ってきたトワルを王に着せつけるよう催促した。仕立て屋は促されるままトワルを取り出すと、王の後ろに回って着替えを手伝いはじめた。
あれほど威厳や尊厳の象徴のように思い描いてきた一国の王も、服を着せようと近づいてみれば、生身の人間の体温や湿気が感じられる。仕立て屋の幻想は、知らぬ間に、どこかへ消えていた。
王の纏うトワルは、試着としては十分な出来だった。鏡を見ながら王は、上着の胴回りやズボンの丈など、いくつか直すよう命じた。それは仕立て屋の想定通りだった。彼は、ただ「はい」とか「かしこまりました」とだけ答えて、トワルに針をつけ、言われた通りの寸に合わせて見せたりした。
想定外だった肩周りの皺については、王や周りの側近たちは何も言わなかった。それで、仕立て屋も敢えて口にはせず、記憶に留めておくことにした。
—瞬く間に終わった試着に関して、これ以上、特筆すべきことはない。肝心の王の反応といえば、彼は終始、満足とも不満足ともつかない顔で、むしろ「衣裳などどうでもいいのだが」とい

った様子だった。
側近たちの手を借りて王が着替えている間、仕立て屋は急いで直しの寸法について覚え書きを済ませた。そうして、王に挨拶しようと気構えていた。しかし王は、着替え終わるやいなや側近たちに取り囲まれ、急かされるまま別の部屋へ行ってしまった。王の背中を見送る仕立て屋は、特に話しかける言葉を用意してもいなかったことに気づき、心ひそかに安堵した。あとは思う存分、技量を発揮するのみである。
鏡の前に脱ぎ捨てられたトワルを拾い上げていると、後ろから声がした。
「万事、順調かね？」
彼を迎え入れた臣下だ。
「それはもう。最善を尽くしましたから」
得意げな顔で皺のついた上着をはたく。言いがたい横風な移り香が、あたりに拡がった。表情ひとつ変えずトワルを鞄に詰める仕立て屋に、臣下は城の門まで見送ることを申し出た。
「陛下のご希望を全て覚えておいででしょうな。少しでも気を抜いてもらっては困る」
帰りがけ臣下は、仕立て屋が今まさに手にしている特権について、のべつ幕なしに語りはじめた。仕立て屋は冴えた目で見る城内に、改めて感心していた。
最後に臣下は衣裳に使う資材のことを彼に説明した。布は後日、仕立て屋の店に届けられるということだった。
「くれぐれも、大役を背負っているということを忘れぬように」
そう言って臣下は彼を送り出した。
それからの数日、仕立て屋は王の衣裳の型紙を調整したり、他の客の服を作ったり、また、溢れ出る優越感を噛み締めたりして過ごした。
王の衣裳に使う布は、臣下が言っていた通りの日に運ばれてきた。紙で何重にも包んでそれを持ってきた織物職人は、やけに小綺麗な男だった。
「こんな生地を作れるのは、この国じゃうちだけさ」
上擦った声で話しだす。彼は、その繊維がどれほど高価であるか、どれほど時間と労力をかけて織り上げたのかについて熱弁しはじめた。
職人が言うには、その布は高山に生息する希少種のラクダと、特別選りすぐられた山羊の毛を使ったものだった。鈍い光沢を持つラクダの毛を基調に、毛先を長くカールさせた山羊の毛をジャガード織にした、特製の織物である。それは一見するとただ濃い黒緑の、単色の布に見える。しかし、光を受けると表面に模様が浮かび上がるのだ。その模様は鷹の羽を象ったもので、この国の国旗に使われるモチーフでもあった。その他にも、上襟に使う黒の起毛した羊革や、王家の紋章が刺繍された裏地用の絹サテンなどが用意されていた。
話を聞きながら、何度か仕立て屋は「失敗したらもう一度作

ってもらえるか」と聞きたい好奇心にかられた。だが、結局それはしなかった。

「美しさっていうのはさ、もう、決まってるんだよな」

織物職人は美学を語り出す。

「わかるか？　こう……何もない地を開拓するのが作るってことだと思われているだろ。だがな、オレたち芸術家にできることっていうのは、もうすでに、どこかにあるさ、心動かす景色を探すために目を凝らすことなんだよな……」

仕立て屋は小刻みに頷きながら、頭の中で縫製の段取りに思いを巡らせていた。

遥かなる長広舌の末、織物職人は満足そうに帰っていった。

どんな布を使うにせよ仕立て屋に求められるのは、それを美しく仕立て上げることだ。彼は何度も型紙を確認してから、一つ深呼吸をした。裁断机の上には厳かに輝く布地が広がる。彼は、その端に静かに鋏を入れた—とはいえ、彼の緊張は意識してこしらえた緊張だった。というのも本当のところ彼の心の奥を占めていたのは、これから作る一着が自分の栄光となるのだという高揚感だった。人々の憧憬の眼差しがありありと想像できた。実際、彼は確かな手つきで、全ての工程において完璧に衣裳を作り上げていった。

最後に残ったのは、上着の襟の縫い付けだった。机の上で仕立て屋は、針を手に目を凝らしていた。指で上襟と下襟を画す線の一番端をつまみ上げる。羊革の上襟にはあらかじめ、縫い付ける線に沿って針穴を施しておいた。穴を目印に針を進めるのだ。しかし、その穴がよく見えない。革の緻密な起毛が穴を隠している。仕立て屋の額に険しい線が入った。彼は俄かに不安が込み上げてくるのを感じていた。穴の開いているように見える部分を、やや強引に針で寄せてみた。すると、少し指が滑った。その瞬間、針先が下襟の表面を擦って、織糸が一本引っかかった。繊細な布の表面に一本の引きつった線が入る。一瞬、仕立て屋の目が眩んだ。口が乾いていく。手のひらに汗がにじみ出す。焦りで震える手を無理やり抑え、細心の注意を払い、とび出た糸を引き戻す。鬼気迫る集中力で織目を元に戻した仕立て屋は、すかさず針を持ち直した。ここで手を止めたら、次に手をつける時には異様な緊張が手元を狂わせるに違いないと、仕立て屋は無意識のうちに感じていた。血走った目を細め、執念のままに穴を見つけ出す。そこに針を通す。数針進むと、今度は滑りが悪く、縫い糸が絡まって捩れた。仕立て屋は焦心から、ほとんど自覚のないまま無理に糸を引っ張っていた。柔らかい生地の織目が綻びかける。仕立て屋の視界は真白になった。体中から汗が噴き出す。仕立て屋は急いでセーターを脱ぎ捨てると、祈る思いでゆっくりと糸を引き直した。黒い糸を見続けているうちに目の焦点が合っているのか、いないのか徐々に判断がつかなくなっていく。呼吸の不足を頭痛が訴える。それでも、針を止

めることはできない。彼の指を動かしているのが、意思なのか反射なのか、もう判別つかない。誤って針が指に突き刺さる。気にも留めず針を進める。指からは赤い血が滲み出す。流れる血を頬で拭って、次の縫い目に針を刺す。繊維の一つさえ見逃すまいと体中の神経が激動する。万が一、布を解れさせでもすれば、一着が丸ごと彼の失敗の糾弾者となるのだ。頭の片隅に浮かんでいた栄光の夢はとうに消え、拭われない不名誉の影がそこに浮かぶ。この瞬間、仕立て屋にとっては一針が自分の肢体よりも重要なものに感じられた。この一着が失敗作にならないのであれば、手の一本、脚の一本、捨てるとしても少しも惜しくない。やり直しが効かなくなった、ぼろ布の姿を頭にちらつかせながら、彼はただ必死で縫っていた。

冬の日の夕方、シャツ姿の背中を汗で濡らした仕立て屋は、最後の縫い目から出た糸を玉止めした。

大きく息を吐く。張り詰めた緊張が解けていく。身体に忘れられていた平和が戻ってくる。体温は瞬時に冷めていった。込み上げる解放感に顔を綻ばせながら、仕立て屋は自分の指が痛むことに気が付いた。彼は椅子から立ち上がると、戸棚に向かった。出血した指を手当てするため、棚から柔らかい綿の布巾を取り出す。それを持ってソファに腰掛けた。指に合わせて、布巾を細く裂く。そうして、布切れを指に巻いていると、ふいに過去の記憶が蘇ってきた。

あの国王のパレードの日、少年は急いで木に駆け寄った。真っ直ぐ伸びた幹にしがみつきながら這いあがり、最初の枝に手をかけたとき、小さな喜びがあった。そして次の瞬間、彼は手を滑らせ落下したのだ。

「おい、大丈夫か」

彼を取り囲む大人たちの声があった。そこからどのようにして家まで帰ったのかは思い出せなかった。それでも、その右腕に包帯が巻かれ、ある期間、字を書くことも食事することも、ままならなかったのは確かだった。

布きれを指先に結び終えると、彼はシャツの右袖をまくり上げた。腕を捻りながら目を近づける。確かにそこに傷を負ったはずだった。しかし、隈なく探してみても、その跡はどこにも見当たらなかった。仕立て屋は、しばらく自分の右腕を眺めていた。

小説　佳作

「きんま」道と「きんま」橋

水関　清

「今度の日曜日には、お母さんの里に行こうか。」

母のふるさとは、今住んでいるA町を流れる川の源流近くのB村にあり、四方を山に囲まれた谷筋の奥深くにあった。古くは、川筋を遡る細道をたどる、半日がかりの行程が必要であったが、数年前に県道が尾根筋に開削されたことで、A町からB村行きのバスに一時間乗ったあと、尾根筋に設けられたバス停から谷に下る小道を二〇分ほど歩くことで、到着できるようになった。しかしながら道幅は狭く、見通しも悪く、しばしば警笛のお世話になる、羊腸の道であった。

二〇人も乗れば満員になる小さなバスに、車掌が乗務していたのは、ときにこの狭い道で、山林仕事に向かうトラックとはち合わせするためであった。そのような場合には、車掌の誘導のもとで、バスはすれ違い可能な場所にまで下がり、トラックの大きさによっては、どちらかの後輪が路肩すれすれになるまで後退していた。後部座席に座っていると、ハラハラドキドキのし通しで、窓外に見えていた路肩の樹木が何時しか消え去り、中腰になって窓から谷筋の方向に視線を落とすと、はるか下の谷底で、岩を噛む白濁した流れが見えて、そのまま動けなくなったこともあった。

当時は、自家用車の普及はごく狭い範囲に限られており、一日三便のバス路線が、住民たちの主たる交通手段であった。一日三便のうち、朝夕の上り便は、A町の高校に通う生徒で、また下り便はB村に物売りにくる商人や役場の職員さんたちで満員になっていた。みんな大きな風呂敷包みを携帯するために、下り便は上り便より、一層窮屈であった。

自然、母や私が乗るのは、昼の一便に集中することになった。昼の便で里に着いたのでは、夜の折り返し便までの間が二時間ほどしかない。乗り物酔いに悩む母にとっては、往復二時間のバス旅は相当な負担になっていたようで、一泊するほうが身体が楽なのは確かだが、かといって、祖父母から代替わりした甥が当主を務める大家族世帯での、小さな私を連れての一泊は気づまりでもあった。

それやこれやで母が里に行く機会はのびのびになっていたが、当時健在であった母の姉の妹、つまり、大叔母が米寿を迎えるこの秋の訪問は延期できず、重い腰を上げたのだった。

いつもの午後のバス便に乗るつもりで準備を始めた私に、母

は意外なことを告げた。朝早く出発するのだという。
これまでと異なる旅程への疑問で頭がいっぱいになった私に、母はにこやかにこう答えた。
今度乗車するバスは、B村行きではなく、隣のC村行きの便だという。B村より人口の多いC村へのバスは、一日七便も運行されている。母が選んだのは、早朝にA町を出てC村に向かう便で、C村到着後には、A町へ通う高校生を乗せてすぐに発車するという。いわば、C村からの通学生のお迎え便という位置づけで、これなら、B村への便のような混雑は避けられる可能性が高い。
でも、C村からB村へは、どのようにして行くのだろうか。母の答えは意外なものであった。
A町とB村の間を結ぶ道路と、A町とC村の間を結ぶ道路とは、途中まで並行して走っているのである。双方の道が離れるのは、B村とC村との間にある分水嶺への登り坂の中腹付近である。B村への道路が、羊腸の道をたどって尾根の上を目指すのに対して、C村への道路は、踵を返すようにして、尾根の中腹を連ねる短い橋を渡り、C村を目指す。母が目を付けたのは、この短い橋のたもとに設けられたバス停である。
当日、このバス停に降り立ってみてわかったのだが、B村を見下ろす尾根筋はよく見えるが、肝腎のそこへの道のりの見当がつかない。
「ここから尾根越えをして、B村へ降りる、いつもの道に入るのよ。」
「尾根越え?」「B村へ降りる、いつもの道?」
不安がる私の手を引いて、母はさっさと歩きだした。
薄暗い杉林の中で、木漏れ日が遊んでいる。木漏れ日は、小さく丸く、先を行く母親の背中に駆け上がったと思ったら、目の前の地面に降りてきた。
やがて、茅の原があらわれた。近くには、杉皮で葺かれた、囲いのない小屋が建っていた。茅の原は平坦で、所々には段が組まれているところをみると、以前は耕されていたのかもしれない。茅の原と谷が接するあたりには、日当たりがよいためか、立派な虎杖が生えている。
誰も採らないせいか、虎杖の親木は大人の背ほどに伸びているが、中は虫に食われて空洞ができて枯木のような色合いになっている。あきらめることはない。食用になる虎杖は、親木の根元から何本も伸び出していることが多い。赤みを帯びた若い芽を残したまま、一〇㎝ほどの節で隔てられた、緑の中に褐色の斑点が美しい虎杖は、皮をむいてシャキシャキした食感を、ほのかな酸味とともに味わうのがいちばんだが、独特のえぐみが難点となって、そうたくさんは食べられず、水にさらしてから煮物にされて、食膳にのぼることが多かった。
其処で虎杖をとって少し行くと、細い道に出た。それまで、道のないところを歩いていたので、どんな細い道であっても、素直にうれしい。その道端の一方は少し高まって小さな土手にな

り、やがて緩やかに下って、細い渓流につながっている。
「疲れたろう。少し休もうか。」
母はそう言って、土手の上に腰かけた。手提げから取り出したのは、海苔巻きだ。今朝、手ぬぐいを姉さまかぶりにして竈の前にしゃがみ、長い火箸で薪の燃え残りを、火消し壺の中に入れていた母に頼んで、お釜の内側に残っていた、アツアツのお焦げで握ってもらった俵結びは、小さいながらも、実に美味しかった。そのご飯の上に卵焼と干瓢を並べて三つ葉を散らし、二枚重ねて丹念に火取った黒光りする海苔で巻き上げた、海苔巻きなのだ。美味しいに決まっている。
夢中でかぶりついてひと息いれる私のそばで、母は先ほど収穫した虎杖の一本を抜いて、ナイフで何やらやっている。箸の長さより短く切った虎杖の両端から、竹を割るようにして、細かな切れ目を入れている。
切れ目を入れ終えた虎杖を、渓流の中に浸すと、生き物みたいに動き始め、やがて両端が反り返っていく。そのようにして丸まった虎杖の茎の真ん中に通した小枝を軸にして、川の流れの中で顔を出している二つの石の間に置くと、流れを受けとめて、くるくると回り始める。虎杖の水車の出来上がりだ。私が水車で遊んでいる間に、母は手早く虎杖の皮をむいてしまって、手提げのどこかにしまい込んだ。
休んで元気が出たふたりは、細い道を進んでいった。進んでいくにつれて、不思議なところに出た。道の中央に、丸太が敷かれているのだ。道の進む方向に対して直角に、一本ずつ平行に並べられた丸太は、まるで鉄道の枕木のようだ。道端の所々には、丸めたワイヤーロープを縛り付けた、鉄の棒も埋められている。
「「きんま」の通る道よ。」と、母がぽつりとつぶやいた。当時の私は、並べられた丸太の上を、ジャンプしながら移動するのが面白く、生返事をしてそのままになっていたが、大人になって「きんま」を調べると、当時としても大変な労働の場であることが分かった。
「きんま」を漢字で書くと、「木馬」。山奥の道のない所では、まず、固い木や割った大きな竹を並べて、急造の道らしいものを作り、その上を木馬（きんま）という、橇（そり）のような運搬具を走らせるのである。橇を滑りやすくするために、油などを木にしみ込ませておく。そうした下準備をした上で、木材を載せた木馬を曳くのである。命と荷物を守る大切なブレーキは、太い一本の木。これ一本を地面にこすりつけて速度を調節することで、橇を制動するのである。
想像するだけでも恐ろしく危険な仕事で、特に下り坂で木馬の先棒を担う人夫の緊張はいか程のものだったろう。勾配を下るときは木馬に押されるので早く歩行せねばならない。途中の川に渡された橋があっても、架橋された床面に、「さな木」と呼ばれた横の木だけを渡した簡易なものである。いわば、有名な祖谷のかずら橋から手すりを取り払った、橋の原型のようなも

のに過ぎず、そこから足を踏み外すことのないように、横の木だけを踏んで進むことは、至難のわざであったろう。

長い距離を運搬する場合には、このように、山の尾根や谷を登り下りすることが求められる一方で、短い距離の運搬にも苦労が多い。短距離の場合には、帰りは木馬を担いで戻らねばならず、一日何回かの往復を求められる。

このような重労働の報酬は出来高制だったと伝えられ、山の仕事は腕の立つ者が多く運んで、多く稼いだという。また、当時の山奥の家々には電気が通じていないところも多く、照明はランプの灯りで採り、煮炊きや風呂の燃料として、薪は生活必需品であった。薪と炭に焼く木を、橋上を渡す木馬で運んでいる、夫婦と思われるふたりの姿が残されている写真を見ると、先棒の男性は喧嘩被りの手ぬぐいを頭に巻き付けて、制動のための木の棒を橇の下に差し込んでいる。姉さん被りの後棒の女性は、橇の後方にとりついて、懸命に身を後ろにそらしている。

そんな、「きんま」道が尽きると、今度は「きんま」橋であった。流れの上に架けられた「きんま」橋は、橋というよりも梯子に近い外観で、両岸を結んでいる。橋から水面までの距離は3mほどだが、いざ橋の上に立つと両足がすくむ。母は、「さな木」と呼ばれる、橋床に横に渡された材木の上を、リズムよく歩いていくが、子どもの私の歩幅では、そう上手くは渡れない。つい立ちどまると、視線は「さな木」の間に見え隠れする、水面に吸いつけられる。次の「さな木」だけをじっと見て、その下の水面を見ないようにして、踏み出した足をそっと下ろす。

幾度か慎重にこの動作を繰り返していくと、向こう岸が見えてくる。向こう岸を見たのがいけなかったのか、次の「さな木」を捕らえようとした視線が、下の川の流れの方向に泳いでしまう。慌ててしゃがみ込んで、「さな木」をつかむ。足の裏やお尻のまわりが、むずむずしてくる。

もと来たところまで戻ろうとしたが、向こう岸のほうが近い。みっともない恰好にはなるが、四つん這いなら何とかたどり着けそうだ。まず、今、手でつかんでいる「さな木」の上に、同じ側の足を乗せ、次に、反対側の手で一本先の「さな木」をつかむ。そこに反対側の足を乗せてから、ゆっくりと、今つかんでいる「さな木」を放す。これを何度か繰り返すうちに、向こう岸に着いた。この間、向こう岸にいるはずの母の姿は目に入らず、短い距離の移動だったが、汗だくになった。

母は何も言わずに、どこからか採ってきたサルナシの実を、橋を渡り切った私の前に置いた。小振りのキウィフルーツのような形をした、ジューシィで美味しい実である。たちまちのうちに食べてしまった。冷汗が多分に混じっていた汗が、川風に吹かれて乾いた頃、母は出発を促した。

「きんま」橋を渡る前には頭上遠くに見えていた尾根筋が、橋を渡り切ってみると、不思議なことにすぐそこである。振り返ると、渓流が右から左へと流れ下り、「きんま」橋が流れの上で、ゆっくり揺れていた。これもあとで分かったことだが、サル

ナシの木のツルは、ときに直径５㎝にもなり、非常に丈夫で腐りにくいことから、橋の材料として好まれるとのこと。母が、何とか自力で「きんま」橋を渡りきった私を労ってくれた、その実は、「きんま」橋とともに、付近の山に自生するサルナシの大木の恵みだったのだ。

よくよく考えてみれば、たしかに川は交通路の母である。川の流れが、気の遠くなるような歳月を費やして山肌に刻み込んだ空間があるからこそ、人々はそこを丹念にたどることで、移動できるのである。そのありさまは、今まで通ってきた、「きんま」道と「きんま」橋が、雄弁に物語っている。

尾根筋に登って少し歩くと、見覚えのあるバス停のところに着く。早起きと、見知らぬ道をたどる尾根越えの効果は絶大で、時刻は、まだ一〇時前である。いつも乗っていた、Ａ町からＢ村行きのバスは、まだ着いていない。ここまでくれば、あとは勝手知ったる道を二〇分ほど下ればよいのだ。

それにしても、母はここまでのルートをどのようにして選んだのだろうか。最初は、見通しはよくないものの、林間を縫うようにして進む平坦なルート。やがて渓流のほとりに出て、小休止。尾根に向かう急坂には、昔、「きんま」を通した道が残り、迂回すれば大回りになるところには、渓流を跨いで、「きんま」橋が架けられている。怖いのを我慢してそこを渡りさえすれば、尾根筋を走るバス道路までの間に、さしたる難所はない。母が昔暮らしていた頃は、このルートが、女・子ども向きの、比較的安全な経路だったのだろうか。

そんなことを考えながら、ところどころに椎茸の榾木が並ぶ、通い慣れた山道を下って行く。

大叔母の家に着いてみると驚いたことに、「にあんちゃん」が待っていた。大叔母の何人目かの孫で、もうすぐ社会人になるらしい。本当の名前もよく知らないが、親戚の子どもたちに人気があり、みんながこう呼んでいた。年長の子どもたちの姿が見えない今の時間は、何よりのチャンスで、母の用事が住むまでの間を待ちきれず、さっそく遊びの約束を取りつけた。

「にあんちゃん」をひとり占めできるかと思うと、気が急いた。先ほど土手の上でかぶりついた海苔巻きの残りを食べて、二人だけで出発した。

ぶらぶら歩く「にあんちゃん」に、どんな遊びをするのか聞いても、はっきりしない。やがて瀬音が聞こえ始め、川のほとりにやってきた。川面のあちこちで光の粒が躍り、岸辺で咲く草花の柔らかな香りが漂っている。

「にあんちゃん」は畑の方をふり返って、その縁に立つ梶の木の枝を切り始めた。一本の枝を二つに分けて、それぞれを箸よりは長めの大きさにする。そして、枝先に近いほうの細めの枝の皮に切れ目を入れて、残った幹に近いほうの太めの枝で、皮を擦る。擦られた方の枝の皮は少しずつ光沢を帯び始め、やがてテカテカと光りはじめる。それをクルリと回して擦り残しがないことを確かめてからも、さらに念を入れて擦る。擦り続

けて木肌が黒ずんできたところで、切れ目の両端をつかんで力を込めると、するすると皮がむけて、梶の木の白い地肌が姿を現す。こうしておくと、白い地肌のほうを、剝いた黒い皮の中に収めることが出来るのだという。白い地肌のほうは、水で洗えば箸にもなるし、山仕事での用途は多彩なのだという。

「ミミズ掘るぞ！」と言われて、思わず立ち竦んだ。あの「によろによろ」が苦手なのである。

「ミミズが掘れたら、ウナギを捕まえるぞ！」と続いた言葉に、躊躇いはどこかに吹っ飛んでいった。

畑の隅に積まれた石を起こすと、ミミズがさっと穴の奥のほうに消えるのが見えた。小さな穴が、あちこちに開いている。ミミズが穴から顔を出した瞬間に、頭をつまんで引っ張ってみた。ミミズも穴の中に戻ろうとして、引っ張りごっこになる。ミミズがちぎれそうになって、手が汚れるのを恐れる気持ちがにわかに湧き上がってきて、思わず手を放す。そばで見ていた「にあんちゃん」が笑う。

「ミミズを掘る時は、こうやればええぞ！」と言いながら、ミミズの穴の近くにしゃがみ込む。そして、さっき作ったばかりの、真っ白できれいな梶の棒を、ミミズの穴に差しこむ。ツンツンとつつくと、別の穴からミミズが顔を出す。そこをすかさずつまんで、穴から引っ張り出して、空き缶の中に放り込む。不思議そうな顔の私に向かって、「にあんちゃん」は、次のように説明する。

「ミミズの一番の苦手は、モグラじゃ。穴の一方を突っついたら、モグラが来たかと思って、ミミズは穴の反対側から一目散に逃げるんじゃ。ミミズの穴の出入り口は、二つあるけんの。」

それを教えてもらってからは、面白いようにミミズが捕れた。石を裏返しては、ミミズの穴を見つけてそこに棒を突っ込み、反対側の出口から出てくるものを、次々に捕まえて、しばしの間、時の経つのを忘れた。

空き缶から這い出そうとするミミズを、缶の中へと戻しながら、先ほどの「ミミズが掘れたら、ウナギを捕まえるぞ！」という「にあんちゃん」の言葉を、反芻する。どうしても、ミミズとウナギとをつなぐ、漁の仕掛けに結びつかないのだ。

その疑問を見透かしてか、「ちょっと待っちょれ！道具を持ってくるけんの！」と言い残した「にあんちゃん」は、どこかに行ってしまった。

ミミズの脱走防止に懸命になっている子どもの姿は、大人から見ると微笑ましいものらしく、行き来する人のすべてが声を掛けてくれる。しかしながら、どうしてここにいるのかを、言葉で伝えられない私は、そのもどかしさのために、だんだんいら立ってきた。そして、切なくなってきた。

涙腺がゆるみかけた頃になって、やっと「にあんちゃん」が戻ってきた。ひもの付いた竹筒のようなものを、何本も抱えている。「コロバシ」という仕掛けだそうで、餌となるミミズを入れて川の流れの中に沈ませておくと、ウナギが中に入りこむ。外

から筒の中には入れるが、筒の外には出られない仕組みのために、頃合いをみて「コロバシ」を引き上げて、ウナギを捕獲するのだという。ウナギを誘う餌には、川の小魚であるハヤゴや、川エビもあるが、一番いいのは、畑を掘って捕まえたミミズだという。

さっそく、先ほどからのミミズ獲りで黒ずんでしまった梶の棒を使って、空き缶の中のミミズを「コロバシ」の中に移す。「にあんちゃん」は、それを川の中のあちこちに置き、流されないようにその上に石を慎重に重ねていくが、その都度川端の私に向かって、「そこに立っちょれ！ええというまで動くな」のお達しである。

「コロバシ」を川に中に沈ませるたびに私の方にやってきた「にあんちゃん」は、河原に石を積み上げ始める。ウナギが獲れるお祈りかと思って、その脇で同じようなものを積み上げ始めると、慌てて止められた。「コロバシ」を沈めた場所を、河原から突き止めるための目印として積み上げたもので、目印があちこちにあると紛らわしいそうである。

小さなケルンが、河原のあちこちに積み上げられた頃、日が傾いてきた。日没までの間に、沈めておいた「コロバシ」を引き上げるのかと思いきや、今夜ひと晩はこのままにしておいて、川から引き上げるのは明朝になるのだという。

涙が込み上げてきた。今日はこれから、尾根筋のバス停にまで山道を歩いて、いつも乗っていたバスの後の便、すなわちB村からA町に向かう最終便に乗る予定だと、母に聞かされていたからである。身体がさほど丈夫でない母が、貴重な、週一回だけの休日である日曜日を、ほぼまるまる使っての里帰りなのである。早起きをして二人分のお弁当を作り、苦手なバスに乗り、幼い私を連れて尾根越えの道をたどってやってきた里では大叔母の米寿を祝い、またバスに乗って、いつもの里帰りより大幅に遅い時間に家に戻るのである。明日からは再び、家族を養うための仕事に励む、母の多忙な一週間が始まるのだ。

母が、もう一日の休みをとれさえすれば、里の家に泊まることが出来れば、「コロバシ」漁で獲れた、ウナギが食べられるのに……。

そんな思いを呑みこんで乗ったバスの中で、一日の疲れがどっと出たのか、母は、たちまち眠り込んでしまった。

暮れてゆく窓外に反比例して、車内の明るさは増してゆく。窓ガラスに映りこむ自分の顔を相手に、今朝からのいろいろを反芻していく。

寝ぼけ眼で着替えを済ませて、お焦げで作った俵結びを頬張ったときの香ばしさ。いつもと違うバス路線を利用して、初めて下車したバス停から見上げた尾根の遠さと心細さ。踏み入れた薄暗い杉林の中で遊んでいた木漏れ日の軽快さ。虎杖採りと、渓流の中に浸された虎杖で作られた水車の回転とその緑色の残像。丸太が敷かれた「きんま」道。その先にあった「きんま」橋を渡渉する際の心細さと、最後は四つん這いになりながらも

渡り終えた時の達成感。その緊張感による疲れを癒してくれたサルナシの実の、何とも言えない深みのある甘さ。「にあんちゃん」との思わぬ再会。擦って皮を剝いた梶の木の肌の白さ。ミミズ採りの面白さと、その後で「にあんちゃん」を待った時間の長さと心細さ。初めて見た「コロバシ」という漁具の新鮮さ。川の中に、「コロバシ」をひとつひとつ置いて行った「にあんちゃん」の手際の確かさ。石積みをすべき場所の確認という役割ながら、漁の手伝いをさせてもらったという満足感。そして、それやこれやで徐々に高まっていった、ウナギ漁で捕穫されるであろう、ウナギへの期待感。

いつもなら、乗った途端に、母より先に寝てしまうバスの中で、長い一日をふり返っているうちに、バスはA町に入った。結局、最寄りのバス停が近づくまでの間、母は一度も起きなかった。

翌日の月曜日。早番勤務の母は、朝の暗いうちに会社に出かけてしまった。母の出勤時には蒲団の中でうつらうつらしていた私は、登校前に、お皿に載せられた朝食をとった。そこには、母からのメモが貼りつけられていた。

「ごめん。かあさん、今日は寝坊してしまった。昨日の残りで悪いけど、これを食べて学校に行ってください。」

海苔巻きの端っこが、六つ並べられていた。私は、海苔巻きの端っこが嫌いではなく、むしろ好物である。昨日、虎杖を採った川端で食べた海苔巻きは、両端がきちんと切り揃えられていたから、これは昨日から自宅の台所に保管されていたものだろう。海苔もさほど柔らかくなっておらず、食べる分には申し分ない。

海苔巻きの端っこは、ご飯と比べて、干瓢や卵焼の割合が相対的に高く、ちょっぴりではあるが、具だくさんの海苔巻きを味わえるところである。五つまで食べたところで、ハッとした。六つの端っこがあるということは、どういうことになるのだろうか。もとの海苔巻きは三本。親子ふたりで食べるには、十分である。今ここに全部の端っこがあるのなら、今朝、出勤前の母は、何を食べて出かけたのだろう。

暗然とした思いで登校し、その日の授業を受けて下校してくると、家の中が妙に騒がしい。不審に思った私が中に入ろうとすると、「にあんちゃん」の顔がぬっと出てきた。双方がびっくりして後ずさりした後、「にあんちゃん」は笑い出した。その横には、母の笑顔が見える。目を丸くしている私の顔を見て、ふたりが揃って笑い出した。

この日の夕食は、鰻丼だった。初めて食べた御馳走だった。

後日聞いた、事の顛末はこうである。「コロバシ」漁に後ろ髪をひかれるようにして、母親に手を引かれてバス停に向かう私の姿を、大叔母の米寿祝で一泊した親戚数人が見ていた。その数人は、大叔母宅に着くや「にあんちゃん」に連れられて、喜々として川に向かった私の姿も見ており、その落差が、酒席の話題になったそうである。いつもは深夜まで酒を飲む「にあんちゃん」が早々に切り上げる姿を見て、「コロバシ」の回収が翌朝

あることを知り、さらに「コロバシ」漁の手伝いらしいことをした私の存在に思い至り、あのやんちゃ坊主があれだけしおれているのは、ウナギの姿を見られない悔しさのせいだと喝破してくれたのが、大叔母の息子さんだったという。ならば、明朝収穫されたウナギの中から、大叔母の米寿祝いに供した残りを持っていったらどうだということになり、一人前も三人前も作る手間は同じ、という勢いで拵えられたのが、目の前の丼の中で、暖かな湯気を上げているウナギなのだ。

運び屋の指名を受けた「にあんちゃん」が、昼のバス便でA町に着いて、まっすぐに向かった我が家の前で、偶然にも、朝ご飯もそこそこに早番勤務を勤め上げて、重い足を引きずるようにして戻ってきた母に出くわし、事の顛末を聞きながら、下校する私を待っていたのだ。

何年間も忘れていたことを、どうして今、この瞬間に思い出したのか、不思議に思うことがある。その回想は、足もとで爆ぜるねずみ花火のように、しばしば思いもかけないところにまで飛んで行って、驚かされる。

私の場合、鰻丼に添えられた柳箸を見るたびに、連想は唐突に、梶の木で作った箸の木肌の白さに及ぶ。そして、帰りのバスの中で眠りこけていた母の姿と、そのうなじで、ちら見え隠れしていた白髪を照らし出していた、バスのほの暗い車内灯の色が浮かんでくる。わざわざ自宅までウナギを運んできてくれた、「にあんちゃん」の笑顔と、日焼けして真っ黒だった肩の逞しい筋肉が、それに続く。さらに、あの日の夕餉の席を頭上から照らしていた裸電球のつつましい明るさの中で、黒光りしていた鰻と白米の白さが、重なってくる。

これらの記憶のすべてが、その後の自分を支えてくれたことを、満腔の感謝とともに思い出すのである。

小説　佳作

揮発する感情とその道程

渡邉　陸王

第一話　悔獣

ふと顔を上げると反対側の席に男が座っていた。男の顔は車窓から刺し込む西日によって深い影を落としており、表情は読めない。

両手を祈るように組み、肘を膝の上に乗せていた。背広の裾は座席の上に袴の様に広がっていた。

「どこまで行かれるのですか」

私は列車が枕木を越える音に掻き消されない位の声で問いかけた。男は肩をひくりと震わせたが返答がない。私はもう一度、ゆっくりと問いかけた。

男はまた肩を震わせると

「まだ　分からないのです」

男は囁く様な、か細い声であったが、何故かはっきりと聞き取れた。男の声は何処かで聞いたことのある声ではあるが、先程から頭に霞がかかったかの様に思考がまとまらない。故に誰の声なのかは思い出せなかった。

男は質問に答えた後も、まだ暫く肩を震わせていた。

違う車両から車掌が入って来た。車掌はおもむろに私の前に止まると、切符を拝見、と言った。私は背広の胸ポケットから切符を取り出し、車掌に渡した。

車掌は私に切符を返すと、どちらまで行かれますか、と聞いた。私はその時、確かにどこまで行くのだろうと思った。電車に乗っているからには何か目的があるのだろうが、私はその目的が思い出せなかった。いつから乗っているかも分からない。

その時、ごうっと言う音と共に左の方から暗闇が迫って来た。数秒の間ではあるが視界が失われ、また左の方から赤い光が迫って来た。目が順応し見慣れた車内を映した時、車掌は居なくなっていた。

反対側の席の男は窓の外を見ているのか反対側を向いていた。座席の背もたれに寄りかかる様にして窓の外を眺めていた。

その仕草はまるで子供の様で、なまじ格好が会社員であるからか、私は何か醜悪な物を見ている感覚に陥った。

しかし、それと共に男がそこまでして何を見たがっているのかが気になり、立ち上がろうとした。

「今、林の中に何か獣がいたんです。」
男は私が立ち上がるのを察したのか、先程よりは大きな声でそう言った。
私はばつが悪くなり、立上がるために入れた足の力を緩めて深く座席に腰を埋めた。
男はさらに身を乗り出すようにしながら窓の外を指差してこう言った。
「ほら、あそこをご覧なさい。あの一番背の高い杉の陰に見えるでしょう。」
男は興奮しているのか肩を震わせていた。
私はその男に対して嫌悪の感情をどの様にしてぶつけようか、ただそれのみを考えていた。男の年甲斐もないその行動に苛立ちを抑え切れなかった。
私は再度足に力を込めて立ち上がり、男の肩に手をかけ、こちらを向かせて席に着かせるつもりだった。しかし、肩に手を掛けた時男は、
「何の獣だったんだろう。分からず、行ってしまった。」
声色はまさに菓子を泥水に落とした子供であった。
男は落胆したのか先程の様に手を組み、こちらを向いて座ってしまった。
私もそれ以上、なにをするわけでもないので、席へ戻った。
それから男は動く事もなく、座っているだけであった。
列車は忘れていたかの様にガタンゴトンと一定のリズムをまた刻み始め、社内の空気は静かになった。
一刻程たった後、隣の車両から1人の女が入ってきた。女は男の隣に座ると男の顔を覗き込み、こう言った。
「もう、行ってしまわれたのですね。」
「そうですか。」
私はその男がもう死んでいる事に気づいていたのかもしれないと、その時に気づいた。
何故あの時に慰めの言葉や、胸を貸す事をしてやらなかったのか。悔いる気持ちが心の中に雫を落とした。
しかし、不思議な事に涙は出なかった。
女は男を座席に寝かせると懐からハンケチを取り出して顔に掛けた。
「私、此処で降ります。」
女がそう言った事で、駅に着いていることが分かった。既に辺りは暗く、駅舎の蛍光灯がチラチラと点滅していた。窓の外の向こうには先程の車掌がここの駅員と何やら話をしていた。
「では、また何処かで。」
そう言い残し、女は扉を開けた。
一迅の風が車両に入り込み、ハンケチを足元まで連れて来た。
ハンケチは少し湿っており、私はくしゃりと胸ポケットに入れ、立ち上がり女の後を追った。
去り際に照らされた男の顔は、私の顔とそっくりだった。

蛍光灯はまた、チラチラと光り、車両は男を乗せて一定のリズムを刻みながら駅を出発した。

第二話　火蛾

カーンカーンという音で目を覚ました。眼下には水が流れており、潮の香りが鼻をついた。目の前の手摺りは赤茶けており、錆びて毛羽立っていた。

音は私の頭の上から聞こえており、そちらに顔を向けると、一瞬視力が失われ、目の奥に強い痛みを感じた。音の正体は蛾だった。

ジリジリと燃えるガス灯の傘に体をぶつけていた。蛾は極彩色の体を大きく揺らしながら羽ばたき、飛んでいた。何度もぶつかっているからか、羽の一部が欠けており歪になっている。

私は蛾から目を離し、遠くに見える陸の灯りに目を移した。もうそれは丸い光にしか見えず、その距離を物語っていた。今何処の辺りを進んでいるのか、見当も付かなかったが着けばわかるだろうという事は分かった。

着けば何か変化はあるし、それによって私は何か変われるかもしれないとも思った。

私は変化を望んでいたのではないが、それが良くなるとも悪くなるとも、変化というのは大事な事であり、越えなければならないというのも分かっていた。

手摺りから伸びる屋根を支える柱に、黒ずんだ塊が張り付いていた。先端が尖ったそれは、よく見ると何かの蛹であった。正確には蛹であったものである。おそらく背中と呼べる部分は刃物で裂かれた様にぱっくりと口を開いており、中はテラテラとした粘液が覗いていた。

恐らくは、飛んでいる蛾の蛹であると思う。

周りには、その他の虫は見当たらない。陸地に停泊している間に蛹になり、羽化したのだろう。虫は灯りに集まる習性があるのは知っていたが、船の灯りに惹かれてしまった蛾は憐れだな、と思った。

周りは海であり、光源といえば水面を照らす月の光、それだけである。

私はこの蛾と共に、海を渡り、見知らぬ土地で生きていくのだと思うと、何か愛情の様な心が熱くなる気持ちを感じた。それこそ長年連れ添った伴侶の様に慈しみをもって、改めて蛾を見た。

「お前も独りなのは分かった。」

言葉が通じるとは思ってはいないが、何故か言わなければならないと思い、そうぽつりと口にした。

蛾は暫く私の頭の上を旋回し、またカーンカーンと音をさせながら突撃を繰り返した。

私はまた椅子に座り、テーブルの上にあった硝子のコップに酒を注ぎ、口に含んだ。

口の中は琥珀色の香りで充満し、喉を通り過ぎる際は焼ける様な熱さを感じた。それは食道を通り胃に到達するまで消えず、徐々に薄れていった。酒の味などは感じず、鼻に抜ける香りは、私の意識を加速させて、遂に意識は途絶えた。

金属同士が擦れる、寒気を感じさせる音で私は再度現実世界に戻って来た。寝ている間は夢など見ずに、フイルムが飛んだ様に時間が抜け落ちていた。

どうやら陸地に接岸したのであろう。辺りからは先程まで波の音しか聞こえなかった船内が様々な言語で溢れていた。しかし、人の姿は見えず、音だけが聞こえるのみであった。

私は道連れの蛾を探したが、頭の上にはそれらしいものは居なかった。先に陸地の方に着いたのであろう。新天地では同族に会えるであろうか。そんな心配を他所に、私は下船の準備をする為に、椅子の下に置いた荷物をテーブルの上に置いた。

ふと、黒い塊が荷物の横に落ちているのを見つけた。その塊は微かではあるが、もぞもぞと動いている。目を凝らして見ると、例の蛾であった。

無残にも羽はボロボロになり、体の彼方此方に煤がついており、焦げついた臭いもしていた。

蛾は羽がなくなっている為、飛べないのだが、自分は飛べると思っているのか、もがいている。

それを見て私は、手摺りの柱に着いていた蛹を背広の胸ポケットに入れた。しかしポケットの中には皺だらけのハンケチが入っておりうまく入らなかった。私はハンケチを取り出して、蛹を入れたポケットを右手で摩った。

そしてハンケチを蛾の上に被せた。蛾はハンケチの重さで動けなくなったのか、まるで存在していないかの様だった。

「さようなら。」

私は蛾が私と共にあったのを確認するために、足を一歩踏み出しハンケチを踏みつけた。

そして、そのままギシギシと軋むタラップを降りて、歩き始めた。

風が吹き、ハンケチはひらひらと風に乗りそして海面に落ち着きゆっくりと沈んでいった。ハンケチがあった場所には煤一つも付いておらず、ただ少し湿っているだけであった。

第三話　飢禽

焼かれる様な暑さの中で、砂に埋もれていた。服の中には熱砂が入り込み、皮膚が痛みを訴えていた。

周りを見渡しても砂の海が広がるばかりで在るのはぽつりぽつりと赤褐色の岩場のみであった。

ふと視界の一部に影が写り、空を見上げた。

太陽を背にして、一羽の鳥が遥か上空を飛んでいた。飛行する様は優雅であり、この熱波をものともしない圧倒されるものがあった。

鳥の大きさは分からないが、かなり大きいのだろう。地に落ちる影がその大きさを物語っていた。
何故こんな何もない砂漠にいるのかは、見当もつかないが、優雅に飛ぶ姿に、どうしようも無い苛立ちが私の心に生まれた。
私が熱くて歩きにくいこの砂地を進むのを鳥は上から見下ろしている。このことは私が鳥に向かって叫んでも変わらないし、何を出来るわけでもない。
しかし、この極限の環境の中でのどうしようもない格差が、私の一歩一歩踏み出す足を重くしている。
そうこうしているうちに、私は視界の端に捉えていた岩場に辿り着いた。
岩場は砂岩で出来ているのか、触れると砂に変わり地面と同化する。上に登り周囲を確認したいと思ったが、登っている途中で崩れでもしたら、それこそ目も当てられない。見ているのは鳥だけであったが、これ以上醜態を晒すことは許されなかった。
仕方がないので、岩場を周り、日の当たらない場所を探した。
岩場の裏側には岩が張り出していて、丁度庇の様になっている。
暑さは多少和らいだものの、喉が渇いてしょうがない。私は自分の持ち物に水缶等がないかを確認することにした。
私は木綿のシャツに木綿のズボン、それに編み上げの半長靴を履いていた。既に服は砂だらけでお世辞にも綺麗とは言えない。出た汗は日差しに当たるとすぐに蒸発してしまい襟には茶色く変色したシミが残っていた。
持ち物は特殊な形をした鞘がついている小刀だけであった。
小刀の刀身は錆び付いており、この後もし何か獣を捕まえられたとしても、捌いた肉は食べる事が出来ないだろう。しかし刀身の先は錆を免れたのか、鈍く光っており鋭さを残していた。
私は小刀を再び懐にいれ、勢いをつけて立ち上がった。日は斜めになり、沈みつつある。
昔、舶来の本に砂漠では昼は暑く、夜は寒いと書いてあったのを思い出した。何か燃やせる物があれば焚き木を起こせるが、近くには岩と砂しかない。生き残る為には何か見つけなければ。そう思い、私は岩場から離れた。
暑さと喉の渇きで朦朧とした頃、別の岩場に古びた飛行機が埋もれていた。搭乗席には誰もおらず、ぽっくりと口を開けていた。
中に入ると鉄とカビの臭いが充満しており陰気な空気で満たされていた。かの大戦の残りなのだろうか。先人の残した遺物に感謝しながら、私は夜を乗り切る為に必要な物を探すことにした。搭乗席の布地、残っていた燃料、それと少ないながらの缶詰。
手に入れた資材で火を起こし、腐りかけの缶詰で腹を満たした時には、既に月が真上に輝いていた。
生き残るのに必死だった。その為、近くに昼間に遥か上空を

飛んでいた鳥が近くにいる事に気が付かなかった。鳥は大きく、私が腕を広げてやっとの大きさだった。

あれだけどうしようもない格差を生んでいた「高さ」という概念は、今はもう既になくなっていた。私は鳥に対して、ある種の親愛の様な感情を持っていた。

鳥と私は一定の距離を保ちつつも、しかしお互いに気持ちの面では支え合っていたと思う。この砂漠に一人と一羽、それしか存在していないのだから。勿論、言葉が通じている訳でもなし、はっきりした事は分からないが、私には根拠のない自信が確かにあった。

鳥はしばらくすると目を瞑り、羽をたたみ目を閉じた。

私も腹を満たしたからか、睡魔が全身を包み、意識が失われていった。

足を誰かに小突かれて目を覚ました。

私は一瞬、ここが何処か分からなかったが猛烈な暑さにより意識は覚醒し思い出した。

嗚呼、夢ではなかったのか。

足元を見ると昨日の鳥が近くにおり、此方を見ていた。感情は読み取れないが、昨日と違うのは、なんとなく分かった。

私は猛烈な腹の痛みを訴え、嘔吐した。おそらく、昨日の缶詰にやられたのだろう。覚醒した意識は濃霧がかかり、目が霞んできた。

私は昨日の燃えさしの隣に横になり、天を仰いだ。私は何の為に生きているのか。それすらも分からず、目的ではなく手段として生きるという道を進んでいたに過ぎない事に目頭が熱くなった。喉が渇き、視界の隅が少し滲んだ。

死の間際でも涙は出るのだなと思った。

どうせ死ぬのならば誰かの役に立ちたい。それは誰しもが考える事ではあるが、私の近くには鳥しかいない。私はこの逃れられぬ死を享受し、鳥に命を託そうと思った。

薄れゆく景色の中、視界に黒い影が写りいよいよだなと感じた。鳥は私の目玉に嘴を突き刺し、生き残る為に食し始めた。痛みなどはもう無く、ただ食べられる立場というのはこの様な気持ちなのかという、純粋な好奇心だけが残った。

鳥が私の体を啄み始めてから半刻程、私の胸にはある疑問が生まれた。鳥は何故、私の上空で飛んでいたのか。この砂漠で餌など無いのは知っていただろうし、もしなければその羽を使って遠くへ行けただろう。

私は一つの仮説にたどり着き、一度鎮火したと思えた心の燻りを再燃させた。

まだ動かせる方の手で懐を探り小刀を取り出し、鞘から刀身を引き出した。そして、その切先を鳥の首目掛けて突き刺した。

鳥は一声だけくっと鳴き、動きを止めた。

後に残ったのは砂を赤黒く染める鳥と私と鈍く光る刀身、それと鞘だけであった。

その鞘の模様は血で濡れて生物めいていた。
赤黒く尖ったそれはまるで蛹の様であった。

第四話　蟲虻

重く伸し掛かる圧迫感と、四方から迫る声によって目が覚めた。視界はというと魚眼の様に端が酷く歪んでおり、距離感が掴みにくくなっている。その中でも真ん中に映るのは堅い木の節目とそれを囲む木目、そして色鮮やかな花々であった。私の意識は徐々に覚醒していき、やがて私の今を認識した。
私の身体は木箱の中に納められており、周りには芳香を放つ花々が隙間を埋めていた。
私はこの狭苦しい空間から抜け出そうとしたが腕が動かない。腕ばかりでは無く身体を動かそうとしても身体が動かない。感覚は動かそうとしているのは分かるが、それが現実に動作として伴っていない。
ふと、箱の外から聞こえてくる声が大きくなり、厚みが増した様に感じた。
複数のその声の渦は、感覚の無い私の身体を囲み、やがて蝕んでいった。動かぬ身体を何か悍ましいもの、数多の蟲が這い回る様に。
箱の中ではカーンカーンと硬いものが当たる音と、虫の羽音が聞こえてきた。金属で出来た細波が岩肌に当たる様な、耳障りな音であった。
視界を頭の上に送ると一輪の牡丹から、一匹の虻が花弁の内から顔を覗かせていた。それは足を擦り合わせ、こちら側を伺っていた。
複眼で構成された虻と目があったというと語弊があるが、私と虻は確かにお互いを認識した。
虻は擦り合わせるのをやめて、また出口の無い箱の中を彷徨い、体当たりを繰り返した。
すると、外から声がして箱の上面を触り出したのを感じた。
五秒ほどすると、顔の上に外からの光が差し込み、その隙間から虻が飛び出した。
私の視界も虻と共に箱の外に飛び出し、周りを見渡す事が出来た。
箱は棺桶であった。染み一つない白布に覆われ、恭しく祭壇の上に置かれていた。
箱の前にはパイプ椅子が並んでおり、その椅子一つ一つに人形が座っており、葬式の悲しみを示す様に頭は項垂れていた。
普段であれば坊主が座っているであろう場所に古いラジオカセットが置かれており、そこから延々とテープを回しながらぶつぶつと念仏の様な物を唱えている。それは日本語でも無く、かといって外国の言葉でもなかった。
ただ、意味のない羅列を繰り返し繰り返し唱えていた。
私は今や虻の動き一つ一つに視界の移動を頼らざるを得なか

った。
虻は正方形のモルタルで出来た部屋を幾度もぐるぐると廻っていた。が、そのうちに疲れたのか一体の人形の肩に留まり羽を休めた。
髪の長いその人形はおそらく女性を模しており、顔は項垂れている為、どんな造形なのかは分からなかった。
その時、視界が一瞬にして暗転し、次の瞬間には床に打ち付けられていた。
何が起こったのかは分からなかったが、視界を上に移すと人形がゆらりと立ち上がり、こちらを向いた。嗚呼、人形が手で虻をはたき落としたのか、とその時思った。
あれは人形ではなく、本当に生きた人間だったのだ。そう私は自覚すると、周りの人形も息を吹き返したかの様に顔を上げ、話し始めた。
「……。」
「……。」
「……。」
私には聞き取れなかったが、何やら葬式とは関係のない、世間話をしている様であった。
私は私を叩いた女を見上げると、女は私に向かってこう言った。
「また会いましたね。」
まるで独り言の様に言うと、足を上げて私を踏み潰そうとしていた。
嗚呼、もう潰されるのか、と私は動かない手足を身体に引きつけた。
私の人生に意味はあったのか。走馬灯の様に今までの出来事を振り返りはしたが、後悔は無かった。
物事の全ては取り返しのつかない事でありまた選択肢に際限はない。
この様な結果に成ったのも、一つの選択の結果であり、それによって紡がれた物語も収束する。
私は、そう思った。
次の瞬間、かしゃりと音がして、視界が暗闇に落ちた。
そうして、私の意識、感情は揮発した。

文芸評論　入選

病床詠から考える『一握の砂』以後の啄木のからだとこころ

水関　清

第一章　はじめに

明治という時代に急速にすすんだ近代化は、短歌が対象とする領域の変化をも促して、短歌革新運動が起こった。すなわち、共通の美意識や手順に従って詠むことに重点が置かれた旧来の短歌作法を離れて、「写生」や「リアリズム」などを表現手法に掲げて、対象を冷徹な視線で深く掘り下げて捕らえようとすることで、物事の本質に迫ろうとした「アララギ」派と、自我を開放して恋や憧れなどの高揚感を高らかに詠いあげた「明星」派、というふたつの流れがそれである。近代短歌がまず意識したのは、「若さ」であり「青春」であり、その次に浮かびあがった「病気」と「貧困」の背後には、否応なく変化することを余儀なくされた、人々の暮らしの姿があった。その結果として、「都市生活」「孤独」「望郷」「社会」「家族」などの新しい主題が生まれることになった。

それらを短歌に取り入れることの社会的重要性に、誰よりも早く目覚めたのが石川啄木であり、処女歌集の題名を『仕事の後（のち）』と名付けようとしたことは、その認識を裏付ける事実の一端である。この歌集は、その後の曲折を経て、『一握の砂』と名を変えて出版され、近代短歌史の金字塔となったことはよく知られている。

『一握の砂』の発刊に平行するようにして上梓された歌論『一利己主義者と友人との対話』によると、啄木短歌のもうひとつの特徴は、自らの歌論に沿って忠実に詠いあげた、「孤独」や「望郷」などという新しい主題のウラに、自分自身の心に浮かんだ詠草時の「感じ」をしっかりと貼りつけたことにある。

その手順は、こうである。まず、近代日本の生活者である「われ（啄木）」の心の中に浮んでは消えてゆく「刹那々々の感じ」を、「われ」の「いのち」のありようが、「われ」の意識の中に投影されたものとして扱うのである。換言すれば、その時々の「感じ」の奥に息づく、自らの「いのち」のありようを「われ」の「意識」が覗き込んで、しっかりと「認識」するのである。そして、そのありさまを言葉に変えて定着させるのである。「われ」が、一刹那心の中を過ぎゆく「感じ」を通して自らの「いのち」のありようを「認識」することとは、すなわち「自己を対象とする認

識作用」そのものを意味し、哲学の教える「自我」の概念とも一致するため、啄木の詠草方針で生まれた歌は、「自我の歌」ということになる。

この方針には、もう一つの優れた特徴がある。すなわち、誰の心の中にもあるものの、通常は意識することのなかった、人それぞれが抱える潜在的な感情すら、歌の形で表現することを通して自他で共有可能になるという、価値ある社会的側面を持つことになったのである。すなわち、啄木が歌作の対象とした、「日常生活を送る中で、こころの中に浮かんでは消えてゆく、刹那々々の感じ」の来由するところとは、「生活」そのものであることに注目すれば、啄木の捕らえた「感じ」の背景には、啄木自身の「生活」とともに、彼と生きる時代を共有した人々の「生活」までもが控えていることになる。このことは、啄木が捕らえた「感じ」の源泉としての「生活」、そして啄木と同時代を生きた人々の「生活」の集合体としての「国民生活」は、啄木が掘り当てた広大多様な「歌の鉱脈」であることを意味するのである。

「生活」の中から生まれ出て、言葉という衣を着せられた「刹那々々の感じ」や「断片的な想い」は、他者との間で共有することも可能な、「歌」という形になって一旦定着し、次いで、それらの「感じ」を「愛惜する（ゆえに詠んだのだ）」という感情の錘がつけられて、詠出の源泉となった「生活」という名の海に浮かぶことになる。かずかずの「歌」が浮かぶ「生活」の海は、その有機的な集合体としての「国民生活」という大洋にもつながっているのである。この観点に立てば、詠出動機となった「想い」を、「生活」ひいては「国民生活」という広くて深い視野の中に位置づけることも可能となる。また、それらの「想い」を抱いた「われ」の姿を歌の中に詠み込んでおくと、そのような「想い」を歌に残そうとする「われ」の姿をもうひとりの「われ」が捉えるという、複眼的な歌の構築も可能となって、表現の幅は飛躍的に広がる。

五章七節からなる『一握の砂』冒頭の章が「我を愛する歌」であるということは、この歌集がまさに、自身の歌論に基づいた実践形であることを明示している。しかも、啄木自身の意識や行動は、ときとして外界の事物の奥に潜んでいて姿を見せず、歌集収載歌の立体的かつ複層的な歌意形成にも効果的である。さらに驚異的なのは、自らが健康を害した後の時期にあっても、その歌論に揺るぎがないことである。次章では、『一握の砂』以後の啄木の作歌姿勢について考えてみたい。

第二章　「いのちの一秒」を歌に定着させることの意味

啄木の作歌姿勢の真髄とは、日常生活の中で、みずからの心の中を去来し、直ぐに忘れ去られるような「数限りなき感じ」を、自分の「一生（の中で）、二度とは帰って来ないいのちの一秒」として捕らえることにある。さらに、その一秒のいとしさと、それらを逃がしたくない、という一途な想いを抱く中で編み出した手法が、日常語を駆使して詠まれた短歌という短詩型

の活用なのである（「利己主義者と友人との対話」）。

ここには、「感じ」を、みずからの「いのち」の発露として捕らえ、それを愛惜しつつ歌として残すという行為の総体こそが、「おれ自身の「いのち」への愛の表明」なのだという啄木の考え方が明瞭に示されている。しかしながら、日々の暮らしの中で、一秒もゆるがせにせず、こころの中を去来する「感じ」を捕らえるアンテナを張り続け、凝視することは容易なことではない。冷徹な自己分析は、時に己を傷つけ、自己嫌悪に苛まれることにもなると思われるが、啄木は、それらの「想い」を抱いた「われ」の姿をも、歌の対象として残すことを選んだのである。すなわち、表裏両面から「自我」に迫って、これを歌の形にして定着させようとした「われ」の姿を、後日、詠まれた「歌」を媒介として、もうひとりの「われ」が捕らえ直すことをも想定した、重層的な短歌観なのである。

これほどまでに厳密な、啄木の自己認識は、啄木の性格を抜きにしては語れないところがある。寺の坊ちゃん育ちという、ものの考え方の「幼弱性」に加え、十代後半に編み出した、独特の天才意識のために、自己の暮らしの経済的な基盤を、他者に依存することを躊躇しないという「依存性」や、そうした他者の自らへの貢献が、しばしば他者の自己犠牲の結果であることに思いが至らない「自己中心性」など、啄木の性格には、「神経質者」としての濃厚な特徴がうかがわれる。

上京以来のたび重なる文学的挫折の結果、作家としての前途に暗雲が立ちこめ、襲い来る深刻な不安の根源を見つめることが恐ろしい啄木が過ごした、七〇日間余の「ローマ字日記」の時代、神経質者に顕著とされる「こだわり思考」と「行動の悪循環」が繰返された結果、現実生活への適応性が著しく減弱して、日常生活が困難になるという状態に陥っていたと考えられる。「ローマ字日記」の記載の随所から、「感覚」や「思考」が渋滞して「行動」が抑制されていたことは確実と思われ、この時期の症状が「神経質症」の水準にあったことは、濃厚である。

啄木が「神経質症」の症状に呻吟した明治四二年の一〇年後の大正八年に創始された「森田療法」によれば、こうした悪循環から逃れる方法は、神経質性格の正の側面に則った行動を促すことを通して、観念にとらわれて身動きできなくなった神経質者の生活を立て直すことであり、啄木の場合にも、家族の強引な上京と同居が、偶然にも森田治療理論に沿った形となっていたために、啄木を苦悩の底から引き上げる上で有効に働いて、からくもその危機を脱することにつながったことが知られている。その後の家族との同居、節子の家出という衝撃を経て、啄木は自堕落な生活を卒業し、評論の価値を小説と同等なものと考えた、プラグマティスト・田中王堂の教える「心身両面の生活の統一と徹底」の実践に励んだ。それはまさに、森田治療理論における社会復帰期の活動としても合目的なものであった。こうした啄木流の「生活の統一」の徹底を経て、ついに家族の扶養義務と自らの文学活動のバランスをとるべく作歌活動を再開した。

その頃創刊された歌誌「創作」に刺激を受けて確立された「啄木調」短歌の質の高さが、職場の上司・渋川柳次郎の目に留まり、紆余曲折はあったものの、その後の歌集『一握の砂』出版につながったのである。

森田治療理論によると、気分や観念本位の生活から、目前の課題を事実本位に解決するという日常的な実践を積み重ねていくことによって、観念と行動との間の悪循環が打破されて神経質症症状が軽快していくと、性格の陶冶が起こって、素直な感情が涵養されるようになる。森田はこれを「純な心」と表現して、それまで庇護を受けてきた他者に対する自然な感謝の念として表出されるという。『一握の砂』の半ばを占める章である「秋風のこころよさに」や「忘れがたき人人（一）」に見られる表現は、その好例である。

さらに「我を愛する歌」と「手套を脱ぐ時」の章には、ものごとをありのままに見る啄木の姿勢が濃厚に反映されており、この事実本意のものの見方は、自身の神経質症からの回復にも有用であったはずである。また、「手套を脱ぐ時」にみられる詠唱姿勢には、先に述べた「重層的な短歌観」が濃厚にうかがえる。すなわち、他者の目にも見え、その把握も容易である「行動」の深層にある、他者は見ることのできない「感覚」や「思考」を、言葉として表現する際に、その背後に潜む「われ」の姿をしっかりと裏打ちすることで、奥行きと広がりのある「自我の歌」とすることにも成功しているのである。

念願であった第一歌集『一握の砂』の刊行後、啄木は第二歌集を構想し、『一握の砂以後（明治四十三年十一月末より）』と題した「中判ノート」をあつらえた。日本近代文学館所蔵のノート原本は一八四葉の分厚いもので、見開き左側の頁には三行書きの歌が四首ずつ記入されている。歌の記入がある五二葉までの方式が、最終葉まで継続されると仮定すれば、ざっと七〇〇首の記載が可能な厚さである。ここには、啄木が第二歌集にかけた意気込みがありありと感じとれる。

周知のように、その後の体調の悪化のために、第二歌集の出版は啄木自らの手で果たすことは出来ず、啄木晩年最大の理解者である土岐哀果が、その遺志を受けて東雲堂から出版したのが、『悲しき玩具』である。筆者は、前作「復元・『悲しき玩具』～啄木の編集意図からの考察～」（『函館市民文芸』第五九集、二〇二〇）において、啄木が加えた推敲の跡を検証することを手掛かりにして、啄木が意図した第二歌集収載歌の復元を試みた。

そこには、病気による自らの身体の変調はもちろんのこと、病気入院によってさまざまな社会活動が抑制された結果としての生活上の苦悩、さらには病を養う家族間の齟齬に至るまでの、多様な苦闘の様態を、ありのままに歌として定着させるという、究極の「自我の歌」が浮かび上がってくるのである。このように、思うに任せない自らの文学的活動の苦衷とともに、自らの歌論に忠実に従って、「心に浮んでは消えてゆく」刹那の思いで象られる、病む「われ」の姿をも、歌の対象として詠みこもうと

した根底にあるのは、神経質者ならではの、啄木の「執着性」「強い欲求」「自己内省性」という性格傾向があると考えられる。しかしながら、啄木の精神のベクトルは、「ローマ字日記」の時代とは明らかに異なる方向を向いている。すなわち、「ローマ字日記」の時代には、自らの主義・主張がかなえられない理由を考えることが、自らがそれまで信奉してきた「天才性」の否定につながりかねないという恐怖からの逃避という、負の側面が前景に立っていた性格傾向が、日常生活の中で浮かび上がる、刹那の「感じ」を言葉にして、ありのままに残すという短歌観を確立して以降の「中判ノート」の時代には、思うに任せない自分の健康状態すら、ときには周辺の事物をおりまぜて、あるがままに捕らえようとする正の側面が顕著となっている。

次章では、「復元・『悲しき玩具』～啄木の編集意図からの考察～」の姉妹編である「復元・『悲しき玩具』収載歌一覧」（文芸誌「視線」第一〇号、視線の会、二〇二〇）に収載された歌群を題材として、啄木の日記・書簡・評論等を参考にしつつ、当時の身体状況と詠草時の所感を再現してみたい。

第三章　復元・『悲しき玩具』からみた、『一握の砂』以後の啄木の健康状態

前作「復元・『悲しき玩具』～啄木の編集意図からの考察～」において筆者は、「中判ノート」収載歌と関連諸雑誌掲載歌を、その改変パターンを相互比較することで、両者のうちのどちらが啄木推敲後の決定稿であるかを推定し、次いでその結果に基づいて、啄木の編集意図が反映された『悲しき玩具』の復元を試みた。その成果をまとめたものが、「復元・『悲しき玩具』収載歌一覧」（前掲）である。

その復元過程の詳細を以下に示す。まず、検討対象としたテキストは、現在閲覧可能な「中判ノート」原本からの復刻ノートのひとつである『悲しき玩具　直筆ノート』（盛岡啄木会、一九七四年）とした（以下、この『悲しき玩具　直筆ノート』についても、「中判ノート」と略す）。さらに、藤沢全による形成論的分析によって想定された、第一段階（3～68番歌）・第二段階前期（69～98番歌）・第二段階後期（99～114番歌）・第三段階（115～130番歌）・第四段階（131～177番歌）・第五段階（178～194番歌）の五段階からなる「中判ノート」記入説に基づいた分類については、先行研究との比較の便をはかるために、藤沢説と同じ、〇〇段階という用語を引用した（「啄木哀果とその時代」、桜楓社、一九八三年）。なお、上記の文章中の〇〇番歌という番号表示は、便宜的に、土岐哀果・編『悲しき玩具』収載歌の掲載順に沿ったものとした。

次に、以下の手順によって、啄木による推敲の跡づけを行った。大室精一の研究（「『一握の砂』『悲しき玩具』―編集による表現―」、おうふう、二〇一六年）によれば、『一握の砂』における啄木の推敲は、㈠助詞の付加や訓読みへの変換などによる、定型から「字余り」への改変、㈡「五七五七七」を構成する定型句

を自在に切断して次の句につなげるなどの、「句」から「行」への改変、そして、㈢各首の配列を自在に構成していくことによる歌意の集約、の三点に要約される。さらに『悲しき玩具』では、前記三点に加えて、㈣句読点は推敲のたびに「なし→読点・句点の付加→諸符号の付加の順に改変」が加わるという。大室説に従って、「中判ノート」収載歌と関連諸雑誌掲載歌における表記上の特徴を比較検討することで、各歌ごとに啄木推敲後の歌を推定し、これを決定稿とした。

以上のような方針でまとめたものが、「復元・『悲しき玩具』収載歌一覧」である。これらを、当時の啄木の健康状態を念頭に置きながら、藤沢全による分類と比較してみたい。

啄木の推敲が、歌群の配列構成の完成にまで及んでいたと考えられる第一段階を別にすれば、部分的に異なるのは第二段階前期、および第二段階後期である。「中判ノート」初出歌が八首もあり、相互の収載歌を一～二首程度移動させる、小規模の推敲を行った跡があるのみで、本格的な推敲は後日行う予定であったと思われる。それもそのはず、第二段階前期は明治四四年一月二二日から二九日まで、および同年二月一日から一二日までの作で、啄木が体調不良を自覚した、入院前夜から入院直後の時期なのである。次いで第二段階後期は同年二月一九日の作、入院後の比較的状態の安定した時期の詠草である。

なお、第二段階の中ほどの時期にあたる二月七日、啄木は下腹部にゴム管を挿入して、腹水を体外に導く処置を受けているが、一度に二七〇〇mlもの腹水を除去したことで急激な血圧低下と思われる症状をきたして、急遽処置は中止となって、啄木は横に寝かされてゴム管を抜去されている。この一連の処置が、次の第三段階の期間における啄木の症状と密接にかかわる可能性が高いことを指摘しておきたい。その医学的考察については、前作「啄木の診断書」（「函館市民文芸」第五三号、二〇一四）の中で詳述した。

第三段階、および第四段階の推敲は複雑で、改変は多岐にわたる。第三段階は同年二月二〇日から同年三月一八日までの作である。腹水の穿刺排液の処置後、しばらくは安定していた啄木の症状に異変が見られたのは、二月二五日のことである。啄木は、四〇度以上の高熱を発して病床に伏せることになった。高熱は、この日から三月五日までの九日間も続く。三月二日の朝、啄木は以下のように述懐している。「俄に來た熱が予の體内の元氣を燃した。醫者は予の一切の自由を取りあげた。「寝て居て動くな」「新聞を讀んぢやあいけない」と云ふ。もう彼是一週間になるが、まだ熱が下らない。（中略）彼は平生多くの人と多くの事物とを輕蔑して居た。同時に自分自身をも少しも尊重しなかつた。隨つてその病氣をもあまり大事にしなかつた。さうして俄かに熱が出たあとで、彼は初めて病氣を尊重する心を起した馬鹿ではないか。丸谷君が來てくれて筆をとつてやるから言へ、と言ふのでちよつとこれ丈け熱臭い口からしやべつた。（「郁雨に与ふ」石川啄木全集④、三三一頁）」こうした闘病体

験を経た後の同年三月一五日、啄木は、医者の制止を振り切って退院を強行してしまった。

第四段階は同年六月七日から下旬までの間の作であるが、退院後の経過について啄木は、同年七月一日付の加藤四郎宛の書簡の中で、以下のようにふり返っている（大意要約）。「病気は五月ひと月は誠に具合がよう御座いました。入院中に起った右肋膜炎のあとも、自分では殆んど異状を感じない程度にまでよくなり、身体も多少肥って来ました。ただ医者から肺の衰弱を恢復し、発熱のなくなるまでは休めという話でした。（中略）六月の初めになって左の胸が痛み出して、大きい呼吸をしたり身体を動かしたりすると叫びたいほど痛みました。（中略）乾性肋膜炎の起った為ですが、もう直りかけてゐるということでした（石川啄木全集⑦、三五七頁）。」この第四段階は作歌時期によって三分され、131～152番歌は同年六月七日から一二日までの間の作であることから、「左の胸が痛み出し」た時期に詠んだものと思われる。残る153～162番歌は同年六月一二日から一五日の作、題材は病に苦しむ自らの側で、愛らしく成長している娘・京子の姿である。同年六月下旬の作である163～177番歌には、妻や母親の家庭における姿が詠われている。第四段階は、同じ六月に詠まれた作であっても、胸痛に苛まれた上旬には病気を中心にして揺れ動く心が、病院の記憶やふるさとの思い出をおりまぜながら、切実に表現されているのに対して、病状がやや和らいだ中旬以降の時期には、病を養う己の近くで暮らす家族の姿を優しいまなざしで捕らえており、好対照をなしている。

第五段階は同年八月二一日の作、この時期の啄木の体調は思わしくない。七月一日に加藤四郎宛の書簡を出した後、七月四日から三週間弱の間は断続的に発熱し、日記の記載も「予は今も猶寝てゐる也」などと、短い。その後の八月七日に、西日の強い理髪店の二階から、日記にも「門構へ、玄関の三畳、八畳、六畳、外に勝手。庭あり、附近に木多し。夜は立木の上にまともに月出でたり」と書き記す環境に転居したことが効を奏したのか、「予の病状やうやくよし」と日記に記すようになった段階での詠草である。そのような体調の下での推敲は、歌群構成を意識した歌順の入れ替えが主の、小規模なものである。

第四章　啄木の病床詠について考える

復元・『悲しき玩具』収載歌を通覧すると、啄木が東大病院に入院していた明治四四年二月四日から同年三月一五日までの時期におおむね該当する作である88～130番歌は、一応の病床詠と考えてよいと思われる。では啄木は、当時の自らの病状について、どう考えていたのだろうか。この時期を含んだやや広い期間に詠まれた歌（69～177番歌）を対象として、啄木が加えた推敲の跡を手掛かりに、この問題について考えてみたい。テキストは、「中判ノート」と「復元・『悲しき玩具』収載歌一覧」である。

この時期の詠草は、「中判ノート」に記入された歌を推敲して

諸雑誌に寄稿するのが基本的な流れであるが、一部に例外もある。それは、115～130番歌の中の「精神修養」明治四四年四月号寄稿歌である「病中十首」で、その推敲の流れは、「精神修養」→「中判ノート」である。さらに複雑なことに、このうちの三首は、さらに推敲されて、「新日本」明治四四年七月号に、「やまひの後」の総題を付して再寄稿されている。したがって、この三首における推敲の流れは、「精神修養」→「中判ノート」→「新日本」となる。以上のことを念頭に置いたうえで、69番歌から順に見ていきたい。

69～87番歌：「早稲田文学」明治四四年三月号「机の位置」（「コスモス」明治四四年三月号「二三行なれど」に収載の八首は、すべて「早稲田文学」と重複）

88～98番歌：「文章世界」明治四四年三月号「病院の窓」

99～114番歌：「創作」明治四四年三月号「寝台の上より」

115～130番歌：「精神修養」明治四四年四月号「病中十首」

131～152番歌：「新日本」明治四四年七月号「やまひの後」（119、120、115番の各歌は、「精神修養」四月号「病中十首」と重出。）

153～162番歌：「文章世界」明治四四年七月号「五歳の子」

163～177番歌：「層雲」明治四四年七月号「或る日の歌」

目を引くのは、「精神修養」と「新日本」における、啄木の推敲である。

入院中の、それも高熱に苦しんでいた時期にあたる明治四四年二月二〇日から同年三月一八日までの作である115～130番歌の中から、とくに119、120、115番の三首を選んで、それなりに病状が安定していた時期を経て、再び病勢に変化が見られるようになった同年六月七日から一二日までの間の作である131～152番歌と組み合わせるという、この特異な推敲意図について、あらためて考えてみたい。腹部膨満以外の症状が乏しかった病初期のあと、腹水穿刺を契機に病状の増悪に見舞われてからの体調の混乱、退院後の家庭生活の不如意とその中のわずかな希望、などを感じ取った啄木のこころと身体の軌跡を題材として、新たに一体的な歌意をもたせるべく、啄木渾身の編集が加えられたのが、「新日本」明治四四年七月号に掲載された「やまひの後」二六首なのである。

その詳細は、次章において考察したい。

第五章　病床詠から見た、啄木のこころとからだ

以上のように考えられるため、69～177番歌を「広義の病床詠」として捕らえることとした。その内訳は、69～87番歌を入院前夜、88～98番歌を病状安定期㈠、99～114番歌を病状安定期㈡、115～130番歌を病勢増悪期、131～152番歌を退院後病状安定期、153～177番歌を退院後病状再増悪期、の各段階である。このうち、啄木の入院期間に直接かかわる88～130番歌を、「狭義の病床詠」とした。テキストは、啄木推敲後の作品を集めた「復元・『悲しき玩具』収載歌一覧」であるため、土岐哀果編『悲しき玩具』と

は表記が異なる部分がある。

まず、以下の歌からはじめたい。これは、「広義の病床詠」の期間のさらに前の時期にあたる、明治四四年一月一七日の作であり、先のテキストの第一段階（3～68番歌）に属する歌である。

55　神様と議論して泣きし―／あの夢よ！／四日ばかりも前の朝なりし。

まずこの歌をとり上げたのは、詠草からさほど時間を置かない時期に、その所感が、友人・宮崎郁雨への便りの形で、残されているからである（「郁雨に与ふ」石川啄木全集④、三二九頁）。そこには、入院前のある夜にみた夢の中で、官憲が自分を引き立てて神様の前に連れて行ったこと、その神様と長い間議論したこと、その内容を要約すれば「私の求むるものは合理的生活であります。たゞ理性のみひとり命令權を有する所の生活であります。」という言葉に尽きること、議論の後で神様は自分の頭を撫でて慰めてくれたこと、が縷々述べられている。さらに、この夢を見たのは「自分の腹の漸く膨れ出して以來、その壓迫を蒙る内臓の不平が夜毎々々に釀した」ためであろうか、とまとめている。

ここで注目したいのは、啄木が求めるのは「合理的生活」であること、そして、日ごとに強くなる腹部膨満は、その目標到達への妨げとなる可能性を、暗黙のうちに告げていること、である。

「中判ノート」にある第一段階の歌群は、啄木の推敲を経たものと考えられるため、四首単位での歌意についても、これを探っておく必要がある。四首単位の配置を意識するために、頁の冒頭歌にあたる55の前後の歌をふくめて見ておきたい。

54　いつしかに正月も過ぎて、／わが生活が／またもとの道にはまり来たれり。

55　神様と議論して泣きし―／あの夢よ！／四日ばかりも前の朝なりし。

56　家にかへる時間となるを、／ただ一つの待つことにして、／今日も働けり。

57　いろいろの人の思はく／はかりかねて、／今日もおとなしく暮らしたるかな。

58　おれが若もしこの新聞の主筆ならば、／やらむ―と思ひし／いろいろの事！

神様と議論した55の歌の前後には、不如意をかこつ日常の生活を嘆く歌が配置される一方で、その歌群の末尾には58の歌が置かれ、啄木の隠された願いが詠われていることから考えて、この歌群の主題は、日頃の不如意が、神様との話し合いによって改善の方向に向かってほしい、という啄木の願望であり、その重大な修飾因子としての自らの健康を歌意の底に重層的に潜

ませたものと考えられる。

つぎに、「狭義の病床詠」について考えてみたい。病状安定期㈠にあたる88～98番歌には、病院風景点描といった趣があるのに対して、病状安定期㈡にあたる99～114番歌では、啄木の意識は自らの身体の状態の描写に集中することになる。

99　ふくれたる腹を撫でつつ、／病院の寝台に、ひとり、／かなしめるかな。

101　びっしょりと盗汗出でてゐる／あけがたの／まだ覚めやらぬ重きかなしみ！

102　ぼんやりとした悲しみが、／夜となれば、／寝台の上にそっと来て乗る。

105　思ふこと盗み聞かるる如くにて、／つと胸を引きぬ―／聴診器より。

これが、病勢増悪期にあたる115～130番歌になると一変する。しかも、「精神修養」、「中判ノート」、「新日本」の間で複雑な推敲が行われた結果、大室のいう「推敲の法則」㈠～㈣に加えて、「精神修養」の段階ではなかった行頭の一字下げ表記が、「中判ノート」と「新日本」掲載歌では、新たに始められた。そればかりか、㈣句読点は推敲を加えるたびに「なし→読点・句点の付加→諸符号の付加」という、それまでの推敲の法則に反して、この第三段階にのみ「読点の削除」という逆方向の改変までが見られる。大室はこれを、啄木が新たに試みた「行頭の一字下げ表記」による混乱の結果と推定している。

病勢増悪期の各歌から、いくつかを抜粋する。なお、以下の表記のうち■は、行頭一字下げの部分を示す。

116　氷嚢の下より／まなこ光らせて、／■寝られぬ夜は人をにくめる。

117　春の雪みだれて降るを／■熱のある目に／■かなしくも眺め入いりたる。

118　人間のその最大のかなしみが／■これかと／ふっと目をばつぶれる。

121　■病みてあれば心も弱るらむ！／さまざまの／泣きたきことが胸にあつまる。

128　運命の来て乗れるかと／■うたがひぬ―／蒲団の重き夜半の寐覚めに。

130　氷嚢のとけて温めば、／おのづから目がさめ来たり、／■からだ痛める。

入院当初の腹部膨満は、二月七日に受けた腹水穿刺の結果落ち着いて、当時、東大を代表する医師であった青山博士に余病のないことを告げられたのが二月一五日のこと。病室も結核患者用の一八号室から一般患者用の五号室に移され、院内の散歩も

許されて、啄木のこころは退院後の生活に翔んでいたことであろう。そんな気持ちでいた二月二五日に突如として熱が上がり、三月五日まで九日間も続いたのである。

当時の医師は、患者にどう説明していたのか判らないが、啄木の知り得たのは、穿刺で得られた腹水の色が「濃黄色」であり、「一升五合」を抜かれた段階で気を遠くしたという直接的体験のほかは、青山博士からの「余病はない」宣言、そして結核患者用の一八号室から一般の五号室に病室を移されたこと、だろうか。後二者は、事実上、当時の大家である青山博士からの、結核ではないとの診たて、と啄木は受取ったことであろう。

これらを念頭に上記五首をよむと、高熱によって苦しんでいるのは、啄木のからだのみではないことが行間からにじみ出してくる。そこにあるのは、「何故、どこが原因でこの熱が出るのか?」「このままこれが続くと、自分は、そして自分の家族はどうなっていくのだろうか?」という焦燥感に彩られた問いであろう。こうした、深刻な状況とそれにともなう切実な不安とを、冒頭と末尾に配された、二つの「氷嚢」という、熱とは切っても切れない関係物を織り込んだ歌で挟み込んでいる啄木の編集力には、驚嘆するほかない。

この編集方針は、退院後病状安定期に詠まれた131～152番歌の推敲においても、冴えわたる。すなわち、「狭義の病床詠」である病勢増悪期の中から、とくに119、120、115番の三首を選んで、131～152番歌とともに一体的に歌意をもたせて、「新日本」明治四四年七月号に「やまひの後」として寄稿しているのである。その結果、120、115には二度の推敲が加えられて読点の追加や行頭一字下げが組み合わされたものとなり、119に至っては、歌意の大きな変更などのために、当初の「精神修養」掲載歌と最終の「新日本」掲載歌は別歌ではないかという大室の説すらある(『一握の砂』『悲しき玩具』—編集による表現—、前掲書)。

以下、啄木渾身の推敲と編集の跡を「やまひの後」から探ってみたい。なお、本来なら第三段階に属する125、127、122、126番歌の推敲の流れは「中判ノート」→「新日本」であり、「精神修養」明治四四年四月号「病中十首」には含まれていない。

125　胸いたみ、／春の霙の降る日なり。／■薬に噎せて、伏して眼をとづ。

119　回診の医者の遅さよ！／■痛みある胸に手をおきて、／■かたく眼を閉づ。

120　医者の顔色をぢつと見し外に、／何も見ざりき—、／■胸の痛み募る日。

115　ぢつとして寝ていらつしやいと、／■子供にでも言ふがごとくに、／医者の言ふ日かな。

135　脈をとる手のふるひこそ／かなしけれ—／■医者に叱られし若き看護婦！

136　いつとなく記憶に残りぬ—／■F—といふ看護婦の手の／■冷たさなども。

137　はづれまで一度行きたしと／■思ひゐし、／かの病院の長廊下かな。

138　起きてみて、／また直ぐ寝たくなる時の／■力なき眼に愛でしチュリップ！

127　子を叱る、あはれ、この心よ、／■熱高き日の癖とのみ、／■妻よ、思ふな。

122　寝つつ読む本の重さに／■つかれたる、／手を休めては、物を思へり。

139　堅く握るだけの力も無くなりし、痩せし我が手の／■いとほしさかな。

140　わが病の／■その因る所深く且つ遠きを思ふ。／■目を閉ぢて思ふ。

141　かなしくも、／■病癒ゆるを願はざる心我に在り。／何の心ぞ。

142　新らしき身体を欲しと思ひけり、／■手術の傷の／■痕を撫でつつ。

143　薬のむことを忘るるを、／■それとなく、／たのしみに思ふ長病かな。

126　あたらしきサラドの色の／■うれしさに、／箸とりあげて見は見つれども—

145　いつとなく我に歩み寄り、／■手を握り、／またいつとなく去りゆく人々！

146　友も、妻も、かなしと思ふらし—／■病みても猶、／■革命のこと口に絶たねば。

147　やや遠きものに思ひし、／テロリストの悲しき心も—／■近づく日あり。

148　かかる目に、／■すでに幾度会へることぞ！／成るがままに成れと今は思ふなり。

131　いま、夢に閑古鳥を聞けり。／■閑古鳥を忘れざりしが／■かなしくあるかな。

134　ふるさとの寺の畔の／■檜葉の木の／いただきに来て啼きし閑古鳥！

132　ふるさとを出でて五年、／■病を得て、／かの閑古鳥を夢に聞けるかな。

150　今日もまた胸に痛みあり。／■死ぬならば、／■ふるさとに行きて死なむと思ふ。

151　いつしかに夏となれりけり—／■病みあがりの眼にこころよき／■雨の明るさ！

152　病やみて四月—／■そのときどきに変りたる／■薬の味もなつかしきかな。

「胸の痛み」の巻頭歌に始まり、以下の七首には病院での暮らしを詠みこみ、医者や看護婦との関わりに連想が及ぶ。続く二首では、自らの体力の低下を、本の重みに難渋する握力の衰えに代表させて表現する。その後にくる140番歌で、自分の屈託の源をズバリ表現した後は、折れがちになる心を励ましつつ、

病を養う日々を詠う歌が続く。そして、ふるさとを離れてから、さまざまな活動をして五年を経た現在、夢の中でふるさとの森に鳴く閑古鳥の声を聞いて望郷の思いを募らせ、胸の痛みと付き合いつつ、わずかに季節の移ろいを感じる自らの姿に触れる。圧巻の末尾歌は、退院後の病勢が定まらない療養の日々を、その時々の薬の味という、治療者と患者とを結ぶ紐帯のような存在に仮託して、短くまとめる。『一握の砂』で冴えわたった啄木の技は、なお健在と思わせる編集ぶりなのである。

退院後病状再増悪期にあたる、153～177番歌についてみていきたい。まず、「文章世界」明治四四年七月号「五歳の子」に収載された153～162番歌からはじめる。

153　病みて四月―／■その間にも、猶、目に見えて、／■わが子の背丈のびしかなしみ。

155　まくら辺に子を坐らせて、／まじまじとその顔を見れば、／■逃げてゆきしかな。

158　かなしきは、／■（われもしかりき）／■叱れども、打てども泣かぬ児の心なる。

160　時として、／■あらん限りの声を出し、／唱歌をうたふ子をほめてみる。

161　■何思ひけむ―／玩具をすてゝ、おとなしく、／わが側に来て子の坐りたる。

162　お菓子貰ふ時も忘れて、／■二階より、／■町の往来を眺むる子かな。

「やまひの後」収載の末尾歌である152番歌冒頭の「病みて四月―」と同じ句を、153番歌の冒頭にも持ってきて、その歌意の連続性を暗示するが、152番歌での啄木の視線は過去を向いているのに対して、153番歌でのそれは、子の成長に託して、未来を向いていることに大きな差異がある。以降の歌群では、その時々の子の仕草について詠んだ歌をパッチワークのように配置することで、「五歳の子」全体の歌意を、冒頭の153番歌に向けて集約しているのである。

では「層雲」明治四四年七月号「或る日の歌」に収載の163～177番歌はどうだろうか。

167　枕辺の障子開けさせて、／空を見る癖もつけるかな―／■長き病に。

168　おとなしき家畜のごとき／■心となる、／■熱やや高き日のたよりなさ。

169　何か、かう、書いてみたくなりて、／■ペンを取りぬ―／■花活の花あたらしき朝。

163　あたらしきインクの匂ひ、／目に沁むもかなしや―／■夏の雨の明るさ。

164　ひと処、畳を見つめてありし間の／その思ひを、／■妻よ、語れといふや。

この時期の啄木の健康状態は、前掲の加藤史郎宛書簡にあるとおり、「乾性肋膜炎の起った為」に、五月には一旦安定した病状が、高湿炎暑の気候の影響を受けてか、再び不安定となったものの、何とか持ちこたえていた時期である。体調に直結しかねない気候の変化をうかがおうとする167番歌、気を奮い立たせて描こうとしても思うに任せない163番歌、それを気遣う妻への想いを詠った169、164番の両歌など、『一握の砂』の最終章「手套を脱ぐ時」に通ずる編集意図を思わせる。

以上、病床詠の通覧から明らかになるのは、自らの歌論に従って、病を養う己の姿の奥底に息づく「いのち」の姿を、神経質者ならではの「ありのまま」の視点で見つめ、これまた神経質者ならではの「完全主義的な」観点から、徹底的かつ要素的に捉え直したうえで再構築して、歌の中にしっかりと詠み込み、他者の追随を許さない啄木調短歌の第二歌集として世に出すための準備を重ねていた、『一握の砂』以降の啄木の姿なのである。

第六章　まとめ～啄木は、自分の病気をどう考えていたのか～

筆者は、前掲「啄木の診断書」において、啄木の入院理由となった腹部膨満は、結核性腹膜炎で、その初感染時期は明治三五年冬の東京滞在時と推定した。さらに、入院後の腹水穿刺時の急速な排液の結果、啄木は一時、失神状態となって、穿刺手技の中断を招いたこと。その際に行われた穿刺用ゴム管の抜去時に、僅かながら空気が腹腔内に侵入したことで、腹腔内の結核菌の増殖を招き、後の発熱につながったこと。併せて結核菌が腹腔内から胸腔内に侵入することで結核性胸膜炎の状態を併発したこと。これらの病態とともに、啄木の置かれた経済的苦境などのために低栄養状態がすすみ、全身衰弱が進行して死に至ったことが、現代の医学的知識を加味した観点からは合理的に推測され、従来からその死因とされてきた肺結核は再検討が求められること、の諸点を指摘した。

以上のような医学的観点からの推測とは別に、啄木自身は、自分の病状をどのように理解していたのだろうか。明治四五年一月二四日付けの佐藤真一宛の書簡の中で、啄木は以下のように記している。「老母の病気、診察医二人の一致した意見で肺結核であり、左肺は機能しておらず、たび重なる喀血がみられるために余命は幾許もないこと。（大意要約）」のあと、「私がかうして一年も直りかねてゐたのも、つまりは結核性の体質だったからでせう。尤も私の病気はまだ肺結核になってゐず、肋膜の患部に近い部分にラッセルが聞こえるだけの程度だと、昨日の二人の医者たちは言って行きました。さうして現在のんでいる薬を見せると「これで可い。これ以上の方法はツベルクリン注射と転地だ。」と言ひました。」「肋膜の患部に近い部分にラッセルが聞こえるだけの程度で、まだ肺結核になってゐず」という、医者の診たては、ラッセルという所見を認める以上肺炎ではあるが、範囲がごく狭いために、（母・カツのような広範囲の）肺

結核ではないという意味だろうか。

では、前年の入院とその後の療養生活時の病状については、どう考えていたのだろう。前掲の明治四四年七月一日付けの加藤四郎宛と、同年八月一五日付けの高田治作宛ての書簡から大意引用してみる。「不甲斐なきは僕のからだである。初めて医者の診察を受けて慢性腹膜炎と決定したのは二月一日のことで、三月中旬には退院。その頃は熱もあったが、四月の半から快方に向かひ、五月には散歩も許された。その後の湿気と炎暑とがこたえたか、熱が出始め、胸の痛みもあったので病院に行ったところ乾性肋膜炎といわれたが、もう治りかけているとのことで、熱も次第に下がってきた。」

これらの記載から明らかになるのは、逝去の約三ケ月前という、ぎりぎりの時期にあっても、啄木自身の病識は、「肺結核になっていない」という、往診医師の言葉そのままの認識である。当時の医師は、患者に病名をどう説明していたのかは判然としないが、東大病院入院時に啄木が告げられた「慢性腹膜炎」という病名は、腹水穿刺で排除された腹水を実見した医師の経験をもってしても、「結核」という疾患に続発しておこる病態という認識の埒外にあったことは確かなようである。

ロベルト・コッホによる「結核菌」の発見は、明治一五年三月二四日のことで、結核菌精製物「ツベルクリン」による治療応用の試みは、その八年後の明治二三年のことであった。しかしながら、ツベルクリンは副作用も強く、また結核菌自体を弱らせるものではなく、治療薬としては失敗に終わったため、患者を隔離して大気・安静・栄養と称される対症療法が主な対策とされた。このことから当時は、結核菌の発見と、実際の結核患者の病態とを一体的に理解する病因論はまだ確立されていなかったと思われ、明治四四年に啄木を診察した医師が、「これ以上の方法はツベルクリン注射と転地だ。」と言ったことは、当時の医師としてのスタンダードを、概ね踏まえたものと思われる。なお、結核に有効な最初の治療法であるストレプトマイシンの発見は昭和一九年のことであった。

明治四五年一月の段階で、啄木の患う結核症に対する治療の基本は、大気・安静・栄養であったが、稼ぎ手である啄木が十分には働けず、家事の切り盛りを担うべき妻も母も肺結核に冒された状態では、安静・栄養の確保は容易ではない。その苦境を救うべく、啄木の上司である佐藤真一は、啄木に医療施設への入院療養を勧めた。明治四五年一月二一日の啄木日記にはこうある。

「佐藤さんからは、築地の海軍大学構内にある市立施療院へ入らないか、入るとすれば社の太田昇三郎氏が手続をしてくれる筈だと親切に知らして下すつたのだつた。それについて考へる私の頭は、明くなり暗くなりした。妻の顔はひどく明るかつた。」

そのせっかくの申し出を、二二日と二四日付けの手紙で辞退しているが、その理由はこうである（大意要約）。「私一人を力に

している母の事ですから、ゐなくなつたらそれひとつで衰弱を増すに違ひありません。」「母は、気分ははっきりしてゐるようですけれど、寝たつきりです。この儘別れて入院する事は出来ません。出来るだけは慰めて薬や滋養をとらせたいと思ってゐます。（中略）母の事がどうかなっても私のからだが直りさうが（ママ）なかったらお願ひします。」母・カツのために、家に留まり、看取ろうというのである。

184　茶まで断ちて、／わが平復を祈りたまふ／■母の今日また何か怒れる。

「広義の病床詠」の後に続く、明治四四年八月二一日の作で、「詩歌」明治四四年九月号に「猫を飼はば」の総題で掲載された一七首のうちで九首目の歌である。息子・啄木の病気の平癒を祈願して、唯一のささやかな贅沢である濃い喫茶を断つ親心と、嫁・節子との確執のもたらす焦燥とが、カツの心に併存するさまを詠んだとされるが、歌の深部には、母親と息子との間で、切ない交情が伏流水のように流れていることも確かである。

ここにも、啄木が見た母の姿から浮かび上がる「感じ」を、その背後に広がる家庭「生活」の中に位置づけることで、「われ」と母との関係を相対化して、そのような「認識」をする「自我」を言葉にして残す、という啄木の作歌姿勢の核心が明瞭にみてとれる。

このような「こころの不思議」への開眼こそ、啄木調短歌の真骨頂なのである。

文芸評論　入選

『歴史小説の功罪～「坂の上の雲」他』

髙橋　剛治

序　「坂の上の雲」を巡る個人的事柄

清掃された小さめの鳥居を潜る。

コロナウイルスの感染流行により、令和三年の初詣は人の密を避けようと思い、一月の終わりにずらした。

さすがに時季外れの平日の神社には、人の出は無く、コロナ流行と規制はまだまだ続くのだろうか、夏までには終息して、オリンピックとパラリンピックの開催は大丈夫なのだろうか、等と考えながら進む。境内は意外と新しい。

ここは昔は独立社であったのが、戦後、昭和三十九年からは、東京の乃木神社の分社になっていた、と聞いていたが、入り口の掲示板の説明を見ると、御鎮座百年を契機に、平成二十八年に再独立した、と書かれていた。

実は、この函館の乃木神社を訪れるのは初めての事だった。中学の時に引っ越して、ここから遠くない所に住んでいたので、神社の存在は知ってはいたのだが、高校生の頃に、司馬遼太郎の「坂の上の雲」や「殉死」を読んだFと言う友人から、

「本を読み終わってから、家の近所にある乃木神社まで、石を投げに行こうかと思った」

と、小説に記述された乃木将軍の、日露戦争における迷走した指揮に憤激したあまり、そう語られたのを聞いたからだった。昭和五十年頃の事だ。

その頃の私たちにとって、司馬遼太郎作品は愛読され、歴史そのものの様に読まれていた。当時の私自身は、「関ケ原」や「城塞」等、司馬の描く戦国時代物に熱中していて、Fの語る、それらの本は読んでいなかったのだが、乃木希典（まれすけ）は無能の将軍だったんだ、と淡く思い、単純な尊敬を口にするのが不穏な気がした。その為、函館にいる間、そこを訪れる事が無かった。進学で東京に出た後に、遅ればせながら私もそれらの作品を読んだ。そしてやはり、その記述から乃木将軍を敬遠する思いで、都内の神社散策を、割と趣味としていたのだったが、比較的近くにあった港区の乃木神社を訪れる事もなかった。

全国に乃木神社は六社ある。その死（明治天皇への殉死）から戦前までの乃木将軍は、軍神、偉大な英雄として大衆の崇敬と

人気を集めていた。
戦後、軍人の人気は相対的に全てが失墜しているが、司馬遼太郎の「坂の上の雲」等での乃木叩きによって、その評価が変わり、より大きく人気を貶(おとし)めた、とは言われている。
実際同世代で、「坂の上の雲」の熱烈な愛読者である従弟の細君のA子さんも、その小説でのヒーローである児玉源太郎参謀次長のファンになり、江の島にある児玉神社に参拝までしにいった、と聞いたが、乃木神社は訪れてはいない、と言う。
そんなこんなの後で、最近になり、コロナの流行による引き籠り生活から、たまたま日露戦争や乃木将軍と旅順要塞攻略戦についての史実や、後述する様に他の作家による乃木希典の周辺の小説の幾つかを読む機会を持った。それで「坂の上の雲」「殉死」における乃木希典の物語との比較、更には史実との検証をしてみたい、と思いたったのが、本文作成の動機です。
参考にした本の書名は、都度本文で記載しましたが、旅順要塞攻略戦における史実は次の二つを参考としました。
一、「旅順攻防戦」　別宮暖朗(べつみやだんろう)　著作
二、「坂の上の雲　五つの疑問」
　　ゲームジャーナル編集部　編著
合わせてこれまで歴史物語によって、史上の事実とは違い、貶められている幾つかの人物の例から、歴史上の人物に対し、歴史小説が与える影響と功罪について考えてみたい、と思い、付記しました。

1　乃木将軍と「坂の上の雲」について

司馬遼太郎は、その代表作である「龍馬がゆく」等で、今日(こんにち)、言わずもがなの国民的作家である。序で述べた様に、「坂の上の雲」における乃木希典への評価に対し、多くの批判はあるものの、その巨大な人気の前で、それらの声は小さい、との感は否(いな)めません。
司馬とは違う視点によって乃木の周辺を書いた作品は幾つかあります。私が読んだ物でも、芥川龍之介の「将軍」、直木賞作家渡辺淳一が乃木夫妻の生涯を合わせて書いた「静寂(しじま)の声」、同じく直木賞作家である古川薫が乃木を書いた「軍神」、児玉源太郎を扱った「天辺の椅子」、二人を対比した作品「斜陽に立つ」があります。
このうちの芥川の短編「将軍」については後述します。
まず古川作品ですが、乃木、児玉ともに好意的に描かれていますが、人間的欠点や短所も赤裸々に描写されていて、単なる英雄譚になってはいない優れた作品です。ただ評伝的で、少し物語的な面白さには欠けている様に思われます。又、渡辺の作品は、家族や夫婦の関係等がテーマで、これもやや評伝的で、明治と言う時代の重さが、強く読者にのしかかって来る様に感じられます。比べると、司馬の作品は、俯瞰された位置からの視点で描く群像劇が、重く悲惨な日露戦争について、語り口の平明

さもあり、ある種の解放された明るさで、紡ぎ出されています。その記述方法は他の作品群でも見られる司馬の特徴ですが、そこから生じる透明感が読みやすさに繋がり、小説的な面白さを横溢させて来る、のだと思わせます。

確かに最新の歴史研究から見れば、「国盗り物語」における斉藤道三の活躍が、親子二代によるとの新しい史実や、「箱根の坂」での北条早雲の前半生の出自の解明等、その後の大きな歴史事実の変更による設定違いは生じていますが、小説としての秀逸さは損なわれていない、と言えます。又、司馬が取り上げる事によって、それまで歴史的には埋もれていた坂本龍馬が、その作品の登場以降、日本史上における一番人気の英傑として蘇り、「燃えよ剣」の土方歳三や「坂の上の雲」での秋山好古（よしふる）、真之（さねゆき）兄弟、児玉源太郎等が、それ以前より名を上げ、一般的な評価を高くした、と言えます。

では、「坂の上の雲」の何が問題なのか？

まず、この作品が小説としてよりも、歴史そのものとして読まれ、理解されている点なのかもしれません。この作品はあまりにも歴史的事実に基くかの様に流布され、評価されているような気がします。そしてそれは多分に司馬自身による論述にもあり、歴史随筆等で、そう述べています。

実際、司馬作品に影響された様な歴史刊行物も多数見られます。例えば、平成十六年に書かれた福田和也の乃木希典の評伝においても、司馬の説に否定的に、乃木を英雄視しての著作であるにもかかわらず、司馬の乃木愚将論には反論せず、乃木の人間的高潔さ、誠実、清廉さ、と言う面を主に描いています。

私たちは司馬作品を読んで育ちました。その巧みな切り口、合理的史実解釈と構成、司馬作品が歴史そのものの様に錯覚してきました。しかしこの壮大な物語に、小説的誇張や演出がある事を知らねばならない、と思います。それはけして作品の評価を落とすものではありません。

例えばトルストイの「戦争と平和」に描かれたナポレオンが、ロシア側のトルストイから矮小化されて描かれていたとしても、そう言うとらえ方もあるのだろう、と思われ、作品もナポレオンの存在も、歴史的評価が大きく左右される訳ではありません。又、個人的に好きな横光利一の描く短編「ナポレオンと田虫」の、田虫に感染し、矮小化されたナポレオンの物語が作品として面白い、と思いますが、やはりそれによって歴史上のナポレオンの意義に変化は少ないでしょう。

ただ「坂の上の雲」においては、史実の様に語られる乃木希典及び、その参謀長であった伊地知（いじち）幸介に対する旅順要塞攻略戦の記述が、何らかの史実解釈上の錯誤でもあったのではないか、と疑問を抱かせる部分がある事は確かです。かつそれらの人物の歴史的評価に大きな影響を与えており、その辺りは指摘したいと思うのです。

では、「坂の上の雲」の描く日露戦争において、乃木希典及びその配下の陸軍第三軍による旅順要塞攻略戦の、どこが史実で

はないのでしょうか。

それを検証する為もあり、今回三度目の全巻再読を行いました。これは明治における、小国日本の形成期を開明しよう、と試みた雄大な構想の物語です。冒頭の正岡子規、秋山好古、真之兄弟らを軸に、四国の松山から始まる物語は、中盤以降明治日本の直面する日清、日露の戦いに進みます。その中で、日露戦争の旅順要塞攻略戦については、中盤の山場として、「坂の上の雲」全七巻の中で四、五巻に記述されています。この悲惨な戦いで多くの犠牲を出した事は事実ですし、概ねの戦闘記述にも史実に反する部分は大きくはありません。では、「坂の上の雲」の記述の、どこが問題なのか？

その部分を、次章で検討してゆきますが、そもそも旅順要塞の攻略戦とは何か、を概略します。

日露戦争において日本軍は、中国の北東部（日本の慣用語で満州）、特に遼東半島から奉天（現在の遼寧省瀋陽）にかけての間で、その地に進出していたロシア帝国と戦ったのですが、この地域のロシアの最大の拠点は旅順で、守備兵力とともに太平洋（旅順）艦隊の根拠地にもなっていました。

当初、日本軍はここを軽視していたのですが、満州内陸部での決戦の背後に、敵三万の旅順要塞を放置して進むことができない為、ここの攻略に、満州軍の第三軍を創設して、乃木希典を司令官としたのです。大本営も満州司令部も、この攻略を軽視していました。

更に、ヨーロッパからロシアのバルチック艦隊が、ここを目指して曳航してきていて、ここに残存する太平洋（旅順）艦隊と合流された場合の脅威を、海軍が払う為にも、要塞の攻略が重要になった。第三軍はこの要塞を速やかに攻略して、北へ進む満州軍に合流しなければならなくなりました。

2　旅順攻略戦の史実と「坂の上の雲」

「坂の上の雲」で描かれた旅順要塞の攻略戦を次に要約してみます。

A．旅順要塞への最初の総攻撃前から二〇三高地の攻撃を、海軍や一部陸軍軍人は主張していたが、これは頑迷な乃木第三軍参謀長、伊地知幸介によって取上げられず、もっとも防備の堅い東北正面に主力攻撃を行った為、第一回攻撃は多くの犠牲を出し悲惨な失敗をまねいた。

B．一回目の総攻撃の失敗後、二〇三高地への主攻撃説が高まり、この意見を無視できなくなった乃木第三軍司令部は、第二回の総攻撃時に、まだ防御の弱体だった二〇三高地を攻撃したが、東北正面攻撃を主としたため、攻撃を失敗させ、敵のロシア側に二〇三高地の重要性を気づかせ、逆に二〇三高地要塞を強化させ、その後の攻撃を困難にさせた。又、第二回総攻撃も失敗に終わった。

C．乃木第三軍は第三回の総攻撃において、大本営、海軍、満州

軍司令部等、周囲の全ての反対を無視して、東北正面総攻撃を続けたが、白襷隊による奇襲攻撃失敗後、ようやく二〇三高地に主攻撃を向けた。しかし、その戦術の稚拙さで、山頂の占領を奪回される等、作戦の失敗が続いた。

D．ここに及び、満州軍司令部から第三軍に乗り込んだ児玉源太郎総参謀長による重砲配置転換等の大胆な戦術により、旅順要塞の弱点である二〇三高地を攻略した。

このストーリィ展開によって、私たちは、二〇三高地と言う旅順要塞の弱点を明示されます。最初から二〇三高地を攻めていれば、容易に要塞は陥落させる事ができた。あるいは、児玉源太郎が旅順戦の指揮をとっていれば、半年の時間を要して、六万弱もの人的死傷者を出さずに済んだ。つまる所、旅順攻略戦の悲惨な犠牲は乃木第三軍の無能さにあった、との思いに至るのです。乃木を凡将、児玉源太郎をスーパーヒーローにしたこの明快な構成に、読者は熱狂します。

これは、著者の随筆集である「歴史の中の日本」の中の（「旅順」から考える）においても、より明快に主張されています。

それを要約すると、

A．人間の作る要塞には、どこか一カ所必ず弱点がある。旅順におけるその弱点は二〇三高地である事が、海軍より指摘されていたが、乃木第三軍参謀長の伊地知幸介によって、その意見は蹴られた。

B．そのあげく、三度にわたる凄惨な攻撃～ほとんどモノマニヤックな、としかいいようのない攻撃を仕掛け、その都度大敗北を喫し、兵を犠牲にした。

しかし、実際の旅順攻略戦の史実は、次の通り、それとは違っています。

a．旅順戦開始時、二〇三高地主攻論者は誰もいなかった。児玉源太郎及び満州軍司令部も二〇三高地主攻に反対していた。

確かに旅順攻略以前に「西正面主攻説」と言う作戦があった事は事実ですが、これは後に主張された旅順港内攻撃の観測点を確保する為の二〇三高地攻略作戦では無く、地図上より考えられた、平坦な地形の二〇三高地の更に西方面からの奇襲攻撃案でした。後にすり替えられますが、元々の「西正面主攻説」はこれでした。もしこれを実施していたならば、より大きな被害と実際より大幅な攻略遅延になっていた可能性が大きいのです。この辺の作戦検討は、司馬が書く様に第三軍は無視していません。その方面の岩石質の断崖が起立した地形、ロシア側前進基地の存在と、長大な迂回中のロシア側からの反撃による攻撃側の分断から、西方面からの攻撃を不可とする報告を出しています。その上で、旅順市内への最短攻略路である東北正面への攻撃を決しているのです。

b．では、これとは別に司馬の言う様に、最初から二〇三高地を全力で攻めていたら、旅順要塞は速やかに陥落したで

しょうか。

答えはそれも否です。前記した様に司馬は第二回の半端な攻撃で、防御弱体だった二〇三高地の重要性をロシア側に気づかせ、要塞を強化させた、と記述していますが、ロシア側の記録によれば、二〇三高地要塞を含む西方正面の強化は、日露開戦時から始められています。従って最初から、ここを攻めていても、戦い初期段階における活発なロシア側要塞守備隊の砲火と、健在な予備隊の投入によって、攻撃は、東北正面への攻撃以上の失敗であった、と思われます。二〇三高地は旅順要塞の弱点ではなく、それ故に、たとえ最初から、児玉源太郎がそこを主攻撃していたとしても同様であった、と考えられますし、児玉もその様な考えを持っていませんでした。

では、何故、東北正面への攻撃は失敗を続け、結果的に、最後の二〇三高地への攻撃が成功したのか？

結論から言えば、この戦闘は近代塹壕戦と呼ばれるもので、史上初めて人類が経験する戦いだった、と言う事です。

古典的な塹壕戦に限ればこれ以前にも、アメリカの南北戦争やクリミヤ戦争で戦われています。塹壕戦攻略の何が、攻撃側にとって大変か、と言うと塹壕と塹壕の間にある中立地帯空間の突破が困難だからです。

小銃だけで、銃砲の未発達なクリミヤ戦争の時期でさえ、その突破は容易ではなく、ドナウ河岸プレブナ塹壕要塞戦では、攻撃側のロシア軍の強襲失敗が続き、五カ月以上陥落できず。守備側トルコ軍に救援の見通しが無くなった後の要塞出撃で決着しました。その後の機関銃の登場、手榴弾、銃砲の攻撃力の向上、塹壕ネットワークの構築により、旅順要塞攻略戦での攻撃は、それ以前より遥かに困難になっています。

又、後の第一次大戦では、攻撃側に、より発達した大砲が登場したにも関わらず、独仏間によるベルダンの要塞戦で、四年の間も膠着した戦いは続き、要塞は陥落しませんでした。その負傷者は両軍合わせて七十五万、死者は四十二万と言われています。

ここでの塹壕戦とは、その地点を取り合う戦いですが、一カ所を突破しても攻略にはなりません。防御側塹壕は孤立した塹壕ではなく、複数で補完された塹壕でした。ですから奪われた地点への、周囲の塹壕からの集中砲火、奪回する為の予備隊を再攻撃させる、と言う消耗戦でした。つまり最初から一定の人的犠牲を強いる非人道的戦いだったのです。これは現代の眼からは非難される事ですが、攻撃を命じられた乃木第三軍だけが非難される事ではないのです。この時代もこの後のどの国の、どの軍隊も同様の戦いを実施しています。むしろ多くの犠牲を出しながらも、それらに比べれば少ない犠牲と、半年の時間で旅順要塞を陥落させた乃木第三軍は、けっして無能ではなかったのです。

確かに第一回の総攻撃は失敗でしたが、前記の通り、近代塹壕戦への対応の薄い、旧来の奇襲戦法ではそれが必然であり、

誰が指揮を執っていても同じで、第一次大戦におけるドイツ軍の戦闘ですら、同様のものでした。ましてやこの攻撃を担当した第三軍は、東京の大本営や満州司令部の事前の作戦計画による、早期攻撃の強要と強襲と言う作戦指示の通り動いた結果でしたから、すべての責任を負わせるのは酷な話です。

これで現地要塞の堅固さを知り、第三軍は第二回の総攻撃では正攻法と呼ばれる攻撃に変えていますが、これは敵塹壕にむけてこちらからも塹壕を掘り進むものです。つまり中間地帯を狭めようとする物で、当時としては斬新な作戦でしたが、簡単な成功にはなりませんでした。しかし、この方法は後世から見ても塹壕戦における最良の攻撃セオリーなのですが、攻略に至るまでは、第一次大戦の例を見るまでもなく、簡単な事ではありませんでした。この辺りも司馬は、ひとくくりに無能な作戦と失敗、と記述していますが、そうではなかった事は後述します。

この前後に海軍からの要請で、二〇三高地への主攻撃説が高まります。ヨーロッパから曳航して来るロシアのバルチック艦隊が、旅順港に入り、ここに残存する太平洋（旅順）艦隊と合流する事が懸念されました。合流された場合、その艦隊数が日本側を、大きく超えるからです。日本海軍は二つの艦隊に対して、各個、別々に戦いたかったのですが、それまでの海戦で、太平洋（旅順）艦隊へは損害こそ与えてはいましたが、幾つかの艦船隊が旅順港内に逃げ込み、全滅できていませんでした。

港内深い場所を海側から攻撃する事ができなかった為、その後も海軍は、広瀬大佐による旅順港封鎖作戦等を実施しましたが、失敗に終わりました。この為、陸側から二〇三高地を攻撃し、奪取後、ここに設けた観測所から、旅順湾内のロシア艦隊を砲撃殲滅する事が必要になったのです。

しかし、これは元々の満州軍司令部並びに第三軍の計画には無かった事です。第三軍の攻略目的はあくまでも要塞の陥落でした。それなしには、敵兵力を後方に残しての、この後に予定されている満州内陸での、日露開戦への準備、更にこれへの第三軍の参加ができなかったからです。しかし、ここにきて、

一、旅順要塞を攻略する事

二、二〇三高地を占拠する事

の二つの課題、指令を第三軍は持つ事になります。当初は、それでも一、の旅順要塞の攻略が成功するなら、ロシア艦隊捕獲も合わせて遂げられ、二、の目的も達成できる。と考えられていました。

「坂の上の雲」では、旅順要塞のウィークポイントの二〇三高地攻めこそが、物語のハイライトとして描かれていますが、これがこの小説のキーポイントです。後述する通り、結果的には、ここが山場にはなりましたが、旅順要塞の陥落、降服には、最終的には東北正面からの攻撃が必要で、史実的には二〇三高地攻略から、更に一カ月の激しい戦闘の時間が旅順要塞の攻略にはかかっています。二〇三高地は旅順要塞の弱点ではありま

せんでした。

3　二〇三高地の真実

さて、第三軍は第三回の総攻撃でも、東北正面総攻撃を継続しますが、その攻略の難航や、周りの圧力により二〇三高地に主攻撃を向けます。ここでも消耗戦は続きます。

その最終段階で、満州軍本部から第三軍に乗り込んだ児玉源太郎総参謀長の活躍が描かれるわけですが、その際の、乃木から児玉への指揮権の委譲があったのか、なかったのかは論争が多いです。「坂の上の雲」と後記の「機密日露戦史」は、委譲があった、と主張しますが、児玉による助言はあったが、指揮権の委譲はなかった、との見方が強いです。

児玉源太郎は、「坂の上の雲」の最大のヒーローです。日露戦争の陸戦での最大の功労者である事は間違いなく、この戦争の僅か一年後、精力を消耗した様に、五十五歳で病没する事から、悲劇の英雄と言えます。生きていれば間違いなく、次期首相としても活躍していたはずでした。

しかし実際の所は、旅順要塞攻略の現場に児玉が来ても、来なくても、旅順要塞はこの時、攻略されていました。すでに消耗戦の末に二〇三高地は攻略されていましたし。児玉が来る前に、奪回されこそしましたが、第三軍による山頂の占領は一度は成功し、この後の塹壕地点の取り合いにより、ロシア側の人的消耗の方が逆転して多くなっていました。いずれは攻略となる段階になっていたのです。司馬の書く様に、第三軍の作戦の失敗ではありません。塹壕を巡る消耗戦とは、そういう戦いなのです。この段階の塹壕戦において重要な事は、どこを攻める、ではなく、どれだけ敵を消耗させるかなのです。

その観点からも、司馬の書いたように、乃木第三軍による、第一回から第三回までの攻撃は、単なる失敗ではなく、その消耗戦の積み上げの後に、ロシア側の消耗が限界に来たと言えます。この辺りの、近代戦における消耗戦と言う認識は、乃木も理解していたはずですが、日本側の人的消耗の大きさに、精神が耐えられなくなってきていたのです。人間的な優しさかもしれません。この時、児玉が登場します。しかしそれは司馬の書く、児玉による重砲配置転換などの大胆な戦術転換を命じた事による二〇三高地の攻略、ではないのです。あるとすれば、児玉の現地登場による所の、第三軍と乃木の精神的救済です。断固たる児玉の意志により、攻略はやや早まったかもしれません。

又、良く言われる二〇三高地観測所からの砲撃による旅順艦隊の撃沈壊滅、と言うのも史実ではありません。

この説は「公刊戦史」「機密日露戦史」において二〇三高地攻略後に、そこからの二十八インチ砲による撃沈と記していますが、事実ではありえないのです。二十八インチ砲はじめ当時の砲撃によって艦を貫通させる打撃は不可能な事でした。軍艦を沈めえるものは魚雷しかなく、砲弾により上部構造を破壊され

て艦の機能は失わせても、砲弾によって、それは沈む物ではありません。旅順艦隊の多くは、既にその前の海戦で湾内に逃げ込んできた段階で戦闘不能でしたし、二〇三高地以外の場所からの、第三軍の、旅順市内、港内への砲弾によって多くは破損されていました。そして最終的には、旅順要塞が降服する直前に自沈、自爆したのです。

しかしこれについては要塞陥落時まで不明だったので、バルチック艦隊来襲前に、自軍の艦隊を整備したかった海軍の意向としてはしかたがないのかもしれません。ただ、結果から言うと、乃木第三軍の当初計画の通り、二〇三高地攻めでなく東北正面の攻略を継続していれば、消耗戦のキーポイントの場所は二〇三高地ではなくても、旅順要塞は攻略され、それは史実より早かった可能性さえあるのです。しかし、いずれにしても人的損害は同様のものだったでしょう。

前出の作家古川薫は、司馬遼太郎に描かれた乃木像が、司馬さんの長州嫌いの傾向が露骨に出ていて、あまりに過酷だ、と述べています。司馬の「坂の上の雲」では、旅順以後の奉天会戦でも、その役割を過少に描いていますが、それについては、論が長くなるのでここでは言及しません。

「坂の上の雲」以外では、乃木第三軍を非難したものとしては、先に書いた「機密日露戦史」があります。この本は、戦前の陸軍大学の教則として書かれた、と言われ、戦後の昭和四十五年頃復刻され、世に出た物です。これに沿った日露戦が歴史書などでも、多く取り上げられています。しかし、今日指摘されている様に、この本の著者である、後の陸軍中将で陸代教官の谷寿夫は、執筆当時陸大生でした。その時の陸大校長は、日露戦における満州司令部の参謀副長であった井口省吾でした。井口は児玉の部下であり、「坂の上の雲」においては、もう一人の参謀副長松川敏胤と共に児玉の両腕、二枚看板と言われていますが、日露戦においては、まずい作戦指揮が多くみられます。第三軍の参謀長である伊地知幸介とは同期のライバルであり、犬猿の仲で、対立していました。又、戦前の乃木の名声は、多分にバブル的であり、むしろ陸軍での反感の声は裏では高かった様です。それら諸々が、軍神乃木と、その参謀長伊地知は、旅順では無能だったのだと強調し、児玉が差配し、見事に攻略したと記述させた様です。この本に対しては、客観事実に乏しい、との批判が多いのですが、前記（「旅順」から考える）で、司馬は執筆以後にそれを読んで、谷の考えが自分に近いと感じた、と書いています。

又、そこで第三軍参謀の伊地知幸介に対しては、おどろくべき愚かさとしか言いようがない、と書いています。

そう言えば、今思い出したのですが、以前勤めていた会社に、伊秩さん、と言う方が居て（いじち）と読むので、伊地知と同音の為に「坂の上の雲」の愛読者から、いつも一言言われる、とおっしゃっていました。確かに「坂の上の雲」の登場全般で、頑固、無能と叩かれ続けています。

これは闇雲に乃木将軍の肩を持つ、と言う文章ではありません。ですから司馬以外の作家の記している、武士的な佇まいや詩的な内面の偉大さを賛美するものではありません。

又、殉死については詳論しません。ここでは手に負い兼ねる、と言うのが実情です。司馬の「殉死」はⅠでは旅順攻略を主に、Ⅱで殉死に至るメンタル部分に立ち入っていますが、概ね批判的な書きよう、だと言えます。前出した芥川の短編「将軍」も、乃木の性格の一部を偏執的と表現したり、物語全体に乃木嫌いの感じが出ています。同様に志賀直哉他の白樺派の文学世代が、乃木の殉死も批判的な感情で向えています。司馬を含め同じ感覚だと言えます。それに対し、殉死に感動と複雑な思いからインスパイアーした作品を紡いだ森鴎外と夏目漱石がそれぞれ、

鴎外～「興津弥五右衛門の遺書」
「阿部一族」

漱石～「こころ」

の文学作品を残しています。二人が明治期の文豪で、芥川、志賀、司馬らが大正、昭和の作家と言う所に、江戸末期に生まれ、明治で育った世代と明治、大正に生まれ大正以降に育った人間の精神の断層を感じなくもありません。私たちも、そして後者に属します。

乃木は旅順やその後の奉天会戦で、多くの人命を犠牲にしています。それに対する苦しみや、近代的消耗戦の惨禍に忸怩たる思いと無能感を持ったと思います。

しかし乃木自らが、自分を愚将と思うのは分りますが、客観的事実からの乃木愚将論はここまで述べた様に、違う、と思います。

4　歴史小説の功罪について

歴史物語によって、大きなダメージを与えられた人物は思い浮かぶだけでも何人かいます。

例えば、徳川家康は、明治末から大正にかけて（立川文庫）の「真田十勇士」等の真田物の講談調の活劇物語によって敵役とされたり、豊臣側を主役にしたものでは、常に敵役として描かれます。明治以降の政府の時代では前時代の英雄である家康は貶められる、と言うのが歴史のパターンですが、家康に関しては、先のナポレオン同様にこれを主人公として戦後、山岡荘八の「徳川家康」他、多数あるので評価は、多様になります。

昔、子供の頃でだから、昭和四十年頃でしたか、親戚の飲み会で、大人たちが、大河ドラマの原作小説の話で、書く人によって、家康なんか善悪が全然違うんだよなぁ、と話していたのを思いだしました。

家康は、英雄で、多様です。

しかし物語上、常に悪役とされる人物がいます。まず「忠臣

蔵、赤穂浪士討入り」における吉良上野介でしょうか。江戸期に著された「仮手本忠臣蔵」や、その前に発表された「碁盤太平記」等、初めから悪役として描かれてきました。史実的には人傷の原因から不明です。小説的には「横恋慕」「賄賂」「塩田の経営秘術」「浅野内匠頭の内面的な問題（ヒステリーやノイローゼ等）」他、種々ある訳ですが、決定打はありません。

むしろ近年の「赤穂浪士」作品、池宮彰一郎の「四十七人目の浪士」や宮部みゆき「震える岩」等を見ると、原因は不明のまま、それを動機としない討入りやその後の物語が語られています。

しかし、人間的に悪い奴だった、の点は置かれたとしても、物語上は、吉良上野介は敵役とされ続けます。江戸後期米沢藩の名君、上杉鷹山なども上野介の女系の玄孫にあたりますが、その血縁、子孫にあたる人物も、その伝記者も、その名を避けざるをえなかったと思われます。

次に宮本武蔵の好敵手として描かれる吉岡清十郎、伝十郎らの吉岡一門。吉川英治の大作「宮本武蔵」以来、世に定着したようなイメージに反し、史実的には武蔵と吉岡一門との死闘そのものが虚構でしかありません。この辺は、司馬遼太郎がその著「真説・宮本武蔵」でも書いていますが、武蔵との対決があったとされた以降も、吉岡の一門は健在でした。

これに関連した小説で、個人的に好きな物には犬飼六岐の「吉岡清三郎腕貸帳」があります。これは武蔵を思わせる二刀流の剣客によって、詐欺師的に先祖に汚名を着せられたと憤激する江戸時代中期の吉岡家の末裔で、剣豪の活躍を描く物語ですが、先祖の汚名を晴らす術のない、主人公の鬱屈がテーマになっています。とても面白いのですが、今日吉川英治の創作された作品を元にした、武蔵の活躍物語はあまりに拡大、流布しています。

さらにその面での最大の被害者は「三国志」で有名な曹操ではないかと思います。一般に三国志と言われる小説は、中国の三世紀三国時代にあらわされた史書「三国志」（あの倭人伝が記載されている歴史書）を元に、宋代に書かれたフィクションである「三国志演義」なのですが、一般的には三国志として呼ばれ、現在まで千年以上の人気を博しています（最近も、これを扱った「レッドクリフ」と言う映画がヒットしていました）。

曹操は歴史上では文人、軍事政治家として評価されていますが、一般的には一千年に渡り、ずっと物語の悪辣な敵役です。

私達は歴史小説を愛読します。それが悪い事であるはずはありません。むしろ学校における歴史教育が、出来事の羅列でしかない現状においては、血の通った歴史と言う物をここでしか知りえません。歴史小説の読了は必要な事だと思います。そこから始まり、それに関連した別の小説や史実評論にも目を通す

事が重要だと思います。何故なら歴史を知らなければ、ねじ曲げられたそれを根拠にした不当な言及に、怯(ひる)んでしまうからです。

先日、九月（令和三年）初めでしたか次のような報道がありました。

「中国からアイドルグループ乃木坂４６の、乃木坂は乃木将軍からの由来で、悪名高い日本旧陸軍の軍人からの命名は非難される」

と、言うようでした。靖国神社からの飛び火した報道の様でした。

さすがにその後の日本側から、乃木坂４６のオーディションが（ＳＭＥ乃木坂ビル）であった事からの命名で、乃木将軍と無関係との反論報道がありましたが、そもそも同じ軍人と言われてしまえばそれまでですが、明らかに太平洋戦争時の軍人との歴史上に位置する立場の違いを無視している、と言わざるをえません。「悪名高い日本旧陸軍の軍人」は無いと思います。

私たちは歴史小説を愛読しなければなりません。そこから興味を抱き、様々な事実と多様な意見を知り、歴史を知らねばなりません。肯定的な事ばかりでは無いでしょう、けれど歴史を知らねば、正しい反省も持てず、様々に曲解された一方的な歴史を突き付けられ、私たちはそこでただ怯みます。それこそ、最も避けたい事です。

歴史小説に功罪はありますが、興味あるものは読み進めたいものです。

「坂の上の雲」も又、読み継がれるべき物語でしょう。

（了）

選評

安東　璋二

小説は応募十二篇（同一作者四篇を含む）と一応の数を揃えたが、今年は特に異色の作品が多く、ふとコロナ禍の世情とのかかわりを考えたりした。中で一定の創意と筆力のある作品の評価が一長一短、簡単ではなかったが、**大西弘子「遠い夏」**が作品の仕上げのよさなどで一歩抜けている印象があった。

「函館の夏は花火大会とともに始まる」という書き出しで恒例の花火大会の祭りを目指して友達と出かけた中学生になりたての主人公が、夕暮れが迫るにぎやかな通りの一角で突然現れた小道に気をとられた瞬間、昭和の時代にタイムスリップする話を描く。この一日を昭和二十年七月十二日とした設定がよく考えられて、話の骨子を効果的につくりあげている。そのほぼ一ヶ月後八月十五日に第二次世界大戦終戦の詔書が放送された。つまり令和の中学生は出店が並ぶにぎやかな通りの一角から突然戦時下最末期の函館の殺風景な野原にタイムスリップして、粗末な服装の大人に囲まれ困惑しているところを地主の家の少年に助けられてその家ですごす二日余りの時間が主に描かれる。戦況悪化で生活もどんどん劣化し、粗衣粗食を余儀なくされている戦争末期の現実が、当時の少年と生活に恵まれた令和の中学生の対比的な目を通してよく映し出されている。本土空襲の状況下でも昭和の少年は神風の吹く日本の勝利を信じているが、令和の中学生は間もなく原爆投下の日本が敗戦し、その苦難を乗り越えて復興した先に未来の平和があることを知っているが、その平和な未来を語れても敗戦の事実だけは、昭和の少年に語れない。その心理の対照が印象的に書かれている。二日後の函館空襲の場面も、少年時代実体験した評者にも肯けるような臨場感で書かれている。令和の中学生の現実の一日のタイムスリップが昭和の三日間に及ぶという時間の不一致など気になるが、タイムスリップという非現実を、七月十四日の函館空襲という歴史的事実に添ってリアルに話を組み立てた創意と工夫に、心誘われるものがあった。入選作として評価したい。

埋橋優希「街の仕立て屋」。その国随一の腕を持つといわれる街の仕立て屋が、国王の衣服の仕立てを命じられ仕上げるまでを書いたファンタジー風な一篇。どんな風変わりな美を求める客の望みも叶える仕立て屋の美を追求する完璧な仕事ぶりを描く筆の運びに興味を誘われる。その腕を買われて即位五〇周年のパレードの衣服を国王から依頼され高揚してその仕立てに熱中してゆく工程が話の中心だが、その合い間に蘇る少年時代のパレード見物の記憶が、衣服の仕立て上りにつながる作品のオチの面白さを、効果的にするプロットの工夫が、全体的にもう少しほしかった。

水関清『「きんま」道と「きんま」橋』。少年の頃、山に囲まれた谷筋の奥深い母のふるさとを、母に同行し訪れた一日の記憶を描く。歩けば半日がかりの行程をバスの便で一時間歩いて二〇分で行けるが、その二〇分の行程が尾根越えの難路。きんまは

その難路を渡るための木具で、それを用いながら必死に難路を上り下りする情景が、周囲の奥深い自然とともに活写される。後半は母の里で年上の従兄とうなぎ捕りなどで心を残しながら帰る一日までが描かれる。遠い日の記憶が眼前の情景のようにリアルに描かれて読ませるが、その奥深い母の里が日本のどの辺りで、いつの時代の何才ごろの記憶なのか、その肝心なところにもう少し具体的な情報があれば、こまやかになつかしく語られる人と自然が、読者の想像力にもっと親しく立ち上って来ただろうと惜しまれる。

渡辺陸王「揮発する感情とその道程」。

四話で構成されるが因果のあるリアリズムの作品ではない。それぞれ作中の私の夢の断片のような話で合理的な要約などできないが、その夢の形象に一貫した生のイメージがあるようだ。たとえば第一話の私は列車の乗客で乗り合わせた男女や車掌が描かれるが、言葉を交わした男が実は死んでいてその顔は私にそっくりだったということなどからこれが生の暗喩としての夢の情景のように読めてくる。列車の私は何のためにどこへ行くのか、目的を見失って乗っており、第二話では変化を求めて船に乗るが三話ではただ生き延びるために熱砂の砂漠を歩き、第四話では棺桶の中にいて、自分の生に意味はあったのか、後悔はないがそれは無制限な生の選択肢の一つの結果にすぎなかったのではないかと考えたところで意識感情が揮発する。その生と死の同伴者として蛾や鳥、虻などの生物が等価に描かれる映像的な形象に、断片的ながらリアルな感触があり、本来無目的な生の世界を彷徨する心の姿が若々しい筆力で印象的に描かれている。

上記三作はそれぞれ対照的な作柄の作品だが佳作として評価した。他に**「生きる」**は胃検査の結果で動揺する高齢者の心情を首尾よく描いているが、作者のほぼ同じ趣向内容の作品が数年前に入賞しており、テーマへのこだわりか、若干の改善点はあるが新作として評価するまでには至らなかった。筆力ある作者の創意ある別作を期待したい。**「ウソではな～い！」**は、宇宙のどこかの惑星の探検者が発見した地球の話を語るという奇抜な着想に期待したが、コンパクトにまとめた地球文明の内容がごく一般常識的で、作者の日常的な社会批評のエッセイのように読めてくるのが残念だった。**「ベストフレンズベストラヴァーズ」**は成人になった男女のデートのなりゆきを丁寧に書いて初々しいが、それだけの話で終わっている。**「切り札はラストのラストそして雨」**などの四篇はいずれも同一作者の四、五枚以下の短篇。筋だけの印象でそれも唐突に話が飛んでいる。発想を集約して地に足をつけた作品を書いてみたい。**「ロック・バンビ」**の着想は面白いが話としてまとめきれなかった。あらためて今年はフィクションらしい異色の作品が上位に並び、平均年齢も若返って二十代の作者が複数入賞した。健筆を期待したい、

評論は二篇。**水関清「病床詠から見える『一握の砂』以後の啄木のからだとこころ」**。

前年にも書いたが作者は連年啄木についての論考を寄せており、他誌などにも論考を書いている。作者の専門分野である精

神医学の視点を導入した啄木研究に特徴があり、本稿もタイトルに「啄木のからだとこころ」という主題が示されている。その意味でどの論考にも連続性があり、その積み重ねという印象がある。論考が重なれば論旨の重複やくり返しが多くなり作者の手間もかかるが読者にも応分の理解が必要になる。本稿もいい意味でその積み重ねを感じさせる論考になっている。本稿の前半は刹那刹那に心に浮んだ感じ、「いのちの一秒」を歌う短歌形式に目ざめた啄木の歌境の深化の過程を、神経質者の性格と精神医学の森田療法を対比しながら述べるのは前稿と重なるが、「一握の砂」で結実する重層的な自我の歌がさらに奥行きを広める究極の自我の歌として構想されたのが「悲しき玩具」であるとして、「その復元過程の詳細や推考の後づけを啄木の健康状態と対比させながら考える第三章以後の後半は読みごたえがある。とくに第四章と五章の啄木の「病床詠」と「こころとからだ」の考察では、啄木の入退院時の詠草がその前後の歌も含め啄木の病勢の安定期と増悪期と対照して具体的に考察され、その中で啄木がいかに第二歌集の歌群の効果的統一を考えて編集したか。それは病床の啄木にとって渾身の編集であったと作者は表現し、病床詠の通覧で明らかになるのは「一握の砂」以後の啄木の姿であると結んでいる。第六章のまとめで、啄木が自分の病気をどう考えていたのかというのも作者の専門的立場を活かした興味のある考察となっている。

高橋剛治「歴史小説の功罪『坂の上の雲』」

肩に力の入らない文体がよく面白く興味深く読んだ。戦前の軍神乃木希典として神社でも祭られる乃木の評価を一変させたのが司馬遼太郎の「坂の上の雲」の乃木愚将観であったということから、その愚将論の根拠となった日露戦争のヤマ場旅順要塞攻略戦の史実を「坂の上の雲」の描写の要所と対比しながら語るところが作品の読みどころ。「坂の上の雲」は今も愛読者の多い当代の人気作家の代表作としても評価されたが、それだけに旅順戦の司令官であった乃木の無能を描いた作品の印象は作者もいうように大きかった。しかし小説はあくまでもフィクション。史実を検証して司馬の観点に問題を見出す作者の筆は明快でしかし断言的でないのがよい。付して近代戦争が塹壕戦の消耗戦だったという説明は、当然の認識としても現代では対比的な意義を持つ。ただ歴史小説の功罪というなら乃木殉死は避けて通れない。歴史小説が近代文学の表舞台に登場するのが作者もあげた「興津弥五右衛門の遺書」であり森鴎外にそれを書かせたのが乃木殉死だったのだから。ただこれに触れれば本格的な歴史小説論の入り口になる。手に追い兼ねるというのは尤もなことだろう。歴史小説好きの作者の他日を期したい。

評論二篇いずれも入選作として評価した。

ノンフィクション　入選

「松前家前史」―五代戦いの記録―

木村　裕俊

【初代、武田信広の野望】

永正九年（一五一二）、卯鶴丸（うつるまる）は六歳になっていた。このところ家中は何やらざわついていた。普段は遊んでくれるはずの大人たちは忙しそうに動き回り、卯鶴丸は全く無視されていた。卯鶴丸の守役である古谷藤左衛門は年配で、もはや城内の実務から離れていたため、守役は適役であった。その藤左衛門でさえ、卯鶴丸を放っておくことが多くなっている。「やはり何かあったのだ。」子供心にも卯鶴丸は、城内のこの動きに何となく異常な雰囲気を感じていたのであった。

あとで藤左衛門から聞いた話では、下ノ国（木古内より東側の地域）の方でアイヌたちが蜂起して、志濃里（しのり）館と宇須岸（うすけし・「箱館」の旧称）館が攻められ、館主が殺され、下ノ国守護の茂別（もべつ）館は松前に避難したという話であった。そして宇須岸館から幼い姫君が姥に抱かれて脱出したという話も聞いたが、その後の消息は分からないらしい。「次にアイヌたちは、松前を目指して攻め上がるだろう、そして…」卯鶴丸たちがいる上ノ国にもいずれやって来るだろう。まだ少しは間がありそうだが、それでも漠然とした恐怖感とも緊張感ともつかないような気持がいりまじり張り詰めていた。

ある時、藤左衛門は卯鶴丸にこんな話を聞かせていた。「同じようなことが、五十年ほど前にもありました。ワシがまだ十歳ばかりの子供の時分でした…」藤左衛門は独り言のように語り始めた。

「初代様（武田信広）が若狭の国から陸奥国に流れ来て、南部の手から安東の御屋形様（安東政季）を守ってエゾ地に渡って来ました。初代様は御屋形様の命で上ノ国の花沢館に入ったのです。」

この時も騒ぎは下ノ国から始まり、上ノ国にはまだ大きな波乱には至っていなかった。そもそもの原因は、下ノ国の志濃里や宇須岸で、和人がアイヌたちを迫害し蔑んだ態度でアイヌたちに不利益な交易を強要していたため、アイヌたちの反発も強くいつか爆発するのではないか、と心配されていたのだという。

「そんな時にこの事件が起こったのです。アイヌの青年が志濃里の鍛冶屋にマキリという小刀を注文したのですが、出来が

ひどい上に値段も高かった。アイヌの青年がこれに怒って抗議すると、鍛冶屋は青年からマキリを取り上げて、『これでも十分に切れるんだぜ…』と言って、アイヌの青年を刺し殺してしまったのです。この、人を人とも思わぬような態度に村中のアイヌたちはみな怒り、一斉に抗議して暴動を起こしたのです。それで、関係ない村々の和人たちも松前や上ノ国に逃げ込み、随分と被害を受けました。」

「そしてその次の年の事でした。今度は、アイヌの首長コシャマインが軍を仕立てて攻め上がって来ました。アイヌに不利な交易を改めろということでした。聞く耳を持たない館主たちは、コシャマインと戦いましたが、志濃里館が、宇須岸館が、中野館が、次々と陥落させられ、道南に十二あった館群のうち、十の館が陥落させられてしまいました。何とか残ったのは、茂別館と初代様のいる花沢館だけでした。初代様は、もともとの原因は和人側にあり、放っておいてもよいと思っていたようですが、どうも上ノ国迄攻め上がって来そうな雰囲気であり、花沢館の館主であった蠣崎季繁（かきざきすえしげ）様にも頼まれたため、初代様は上ノ国に逃げ込んで来たほかの館の兵を集めて新たな軍を再編成して、上ノ国を目指すコシャマインに戦いを挑んだのです。さすがに初代様は強かった。若狭の国（現・福井県）で乱暴が過ぎ、勘当された腕前でした。十二館の館主たちからは大いに称賛されたものでした。」

藤左衛門の話はさらに続いた。「そのような事情があって、初代様はすっかり有名になってしまいました。茂別館の館主は、御屋形様の弟君・安東家政様で、その方の勧めで、蠣崎季繁様の養女殿と結婚され、上ノ国の蠣崎家を継ぐこととなったのです。初代様は、戦いも強かったが、交易や街づくりも得意だったようで、たちまちのうちに街を大きく整備し、交易も全国の港とつながり、順調に伸びてきたのです。」と語った。

卯鶴丸には話の内容が分かる所も分からない所もあったが、いつもの事である。それより、藤左衛門の話によく出てくる、初代様という「ジジ様」は本当に強い方なのだと尊敬している。卯鶴丸には、敵を倒して国を治め、交易も成功させた、憧れの人なのである。

藤左衛門が働き盛りの頃であった。ついに十二館の中で最も大きな館「勝山館」が完成した。たしか、二十五・六歳だったので、文明五年（一四七三）の頃の事だと思われる。その館では毎晩のように大勢の客人が招かれ、藤左衛門も接待に忙しかった。広間では政治の話、交易の話、文化の話など、夜を撤して話題が弾んでいた。先代の季繁様はもうとうに亡くなられ、この頃には初代様が自由に取り仕切っておられたが、ある時藤左衛門はうわさで、初代様が「エゾ地の交易や政治をすべて自分の思い通りに動かしてみたいものだと、話していた。」と、実しやかに流れていたのを聞いたことがある。その時は「実力のある初代様だ、そう思われるのも無理のないことか」と思っていた。

藤左衛門は、卯鶴丸様の守役の前には、近習衆の一人で三代

目・義広様の世話係であった。そういえば、初代様が亡くなられる少し前に聞いた話であるが、ある時初代様と二代目様が人払いをして長いこと話し合われていた。初代様は既に病で伏せておられたが、それを押して何日か長い話し合いが続けられていたというのであった。ほかの近習衆仲間から聞いた話では、断片的に「エゾ地の守護職は一人で良い…」とか「松前の安東山城守殿の狼藉は御屋形に知らせて、成敗させる…」、「場合によってはアイヌ軍を利用する…」などの言葉が聞こえていたが、全体に話が結びついていなかった。それからさらに月日が経って初代様が亡くなられた。明応三年（一四九四）の事で、享年は六十四歳であった。

【第二代、蠣崎光広のエゾ地統一への策略】

藤左衛門は、初代様がこのような野望を持っていたという話はすっかり忘れていたが、思い出したのは二年ほど経ってからの事であった。明応五年（一五九六）のある日、勝山館にいつも来ていた親藩の厚谷殿と南條殿がほかの館主たちを説得して「松前・山城守恒季殿を弾劾する文書を作成した。御屋形様に差し出したいので、蠣崎殿が代表になって欲しい。」と頼み込んできた。話は最初から出来上がっていたようで、二代目様は二つ返事でこれを了承した。御両人が秋田の御屋形様の許に旅立ってから一月ほど経った頃に、数人の隠密がこのエゾ地に入り込み、事実を確認の上、山城守殿を切腹に処したという。罪状は、山城守殿の行跡が極めて荒く、無実の者を数多く誅伐したからだと、巷のうわさに上った。山城守殿は切腹の際、「無実だ、誰かの罠だ。」とわめきながら抵抗したが、家中でも誰も援護する者はなかったという。

この頃から、世の中がまた少しずつ荒れ始めて来たようだと藤左衛門は思っていた。そして、今回の下ノ国襲撃事件に続いて松前に迫っているアイヌ軍蜂起の危機であるが、かつて仲間から聞いた断片的な言葉が、今繋がり始めているのだと思った。アイヌたちの不平・不満を利用して下ノ国・松前を攻め滅ぼさせ、上ノ国だけが残るという筋書きである。なんという策略であろうか、初代様が考え、二代目様がいま実行に移そうとしている。「この度の合戦には、そんな仕掛けがあったのか。」と、さすがの藤左衛門も舌を巻いた。

今回のアイヌたちの蜂起は、東部アイヌの兄弟首長、ショヤとコウジが起こしたものであった。松前を攻めたアイヌ軍は、松前大館を陥落させ守護を滅亡させた。アイヌ軍はここで目的を達したのか、一旦兵を引いた。この時目立たなかったが、蠣崎軍の一部が松前大館の外側を遠巻きに囲んでいた。これではまるで、蠣崎軍が松前軍を逃がさないように囲い込んでいるようであったという。事実、松前安東氏の家記には

「蠣崎氏に攻められた」と記述しているそうだ。アイヌ軍と光広軍に密約があったかどうか、誰も知らない。

この時アイヌ軍の撤退に乗じて、光広と義広の蠣崎軍は上ノ

国から松前に船一八〇艘を連ねて移住してきたのであった。これだけの船数を一朝一夕には準備できない。「いつの間に…」この早業にも藤左衛門は驚きを隠せなかった。そして藤左衛門は、秋田・檜山の御屋形様への使者の一人となった、友人の吉田清右衛門からは「この度の使者役は大変であった。冷や汗の連続であったよ…」と聞かされた。

二代目様は、秋田・檜山の御屋形様にすべてが済んでから、この度の顛末を報告書にしたためて、内容の許可を求める書状として提出したのであった。内容は「今年に入ってアイヌの蜂起がありました。これにより、下ノ国と松前は陥落し、殺された館主もありました。上ノ国は何とか持ち応え、私、蠣崎光広がアイヌの蜂起を抑え、沈静化させました。今、エゾ地の三人の守護職は「蠣崎光広」ただ一人になってしまいました。この上はこの「光広」をエゾ地全体の守護職にご指名下さい。また、エゾ地の和人を守り、アイヌたちを管理するためには、松前を本拠地とすることが望ましいので、松前に移りました。この件に関しても、合わせてご認可下さるよう御願い致します。」とのことであったという。

当時の秋田・檜山の御屋形は三代目の安東尋季（ひろすえ）様になっていたが、エゾ地の状況など全く理解出来ていなかった。これまでもエゾ地からの献納物は受け取るが、エゾ地の施政には口出しせずに任せきりであった。だが今回は違う。「そもそもエゾヶ島の領主権は秋田・檜山屋形の安東家が掌握している権限である。エゾ地での三地区の守護職は、安東家から一定の支配権を委任されているだけのもので、領主権まで主張出来るものではないのだ。」と尋季は思っていたようである。

尋季は書状を握った手を震わせ、使いの者をにらみつけて烈火の如く怒り「こんなことが許されるわけがないだろう。エゾの蜂起があったことも報告せず、終わった後で自分勝手にエゾ地を独り占めにして、何食わぬ顔で報告してすべてを済ませようとしている。その態度が許せないのだ。」と大声で感情を表していた。尋季は、大体において光広が嫌いなようであった。自分より下位であるにもかかわらず、あの自信にあふれた対応が気に入らないのだと日頃から言っている。その上光広には、何をしても陰謀の影が付きまとう事もであった。吉田清右衛門ら使者たちは、報告が遅れたことを丁寧に詫び、何度目かの交渉で、「今後、蝦夷地に来た交易船に税を掛け、その税金の半分を檜山屋形に収める用意があります」との条件を示すと、檜山屋形の重鎮たちは現金収入となるこの話に乗り、御屋形様を説得してくれた。これでようやく尋季も首を縦に振ったのであった。それでも「守護職」の許可は光広様にではなく、これから三代目となるべく義広様に出したのであった。まだ家督も継いでいない義広様にである。後に吉田清右衛門からこの報告を聞いた二代目様は、苦笑して「よほど嫌われたものだのう…」と言って了解したという。

さて、「ショヤ・コウジ軍」であるが、蠣崎軍が松前に移って

来たことを知り、上ノ国から松前に出てきて、軍事的に東部アイヌとの間合いを詰めてきたのだと思い込んだようであった。昨年松前を攻めた時、光広軍に外側から応援してもらったが、松前に出てくる話は聞いていなかった。一度ここらで叩いておいた方がよいだろう、と考えたアイヌ軍は攻撃準備に入ったようだと斥候隊から報告が入った。

今アイヌ軍に攻められるのは「まずい」と、二代目様は思っていたようだ。松前大館は「徳山館」と名前を改め、館内外の防御施設を補修中であった。あと一年、半年でもいい、時間があればまだしも今は不利であった。そこで二代目様は一計を案じて、彼らに戦う意思のないことを示し、徳山館に招いた。そして、日の高いうちから酒宴を催して彼らをすっかり酔わせてしまった。珍しい宝物を出して見せ、それを手に取らせて眺めさせ、油断させて隙を伺っていた。外では女どもに砧を打たせた。砧の音はどんどん大きくなり周りの音をかき消した。隣の部屋では武装した兵が控えていたが、合図と共に突然襲いかかって、アイヌ軍を一人残らず切り殺してしまった。こうして第二代・光広様は、初代様以来の悲願であったエゾ地全体の支配権をようやく手に入れることが出来たのであった。

六十年以上続いたエゾ地での十二館による歴史であったが、近年になって多くの館がアイヌ軍に次々と襲われて陥落していくのである。実はアイヌ軍を利用した第二代目様の陰謀ではないかとの噂もあるが、蠣崎軍の動向を見ていると、蠣崎軍に与しない館主は抹殺されたのだとする説も、全くの夢想だとは言えないような気がするのである。

第二代目様が亡くなったのは、永正十五年（一五一八）で、卯鶴丸は九歳になっていた。家督は父・義広が三十九歳で継いだ。

【第三代、義広と夷狄との戦い】

エゾ地の特に道南地区では、蠣崎光広・義広父子が勝山館から松前に出てきた永正十二年（一五一五）からおよそ三十数年の間、戦いの連続であった。いわばアイヌ軍の「蠣崎政権に対する抵抗」といえるものであった。父・義広の生涯は、死ぬまでアイヌとの闘いの連続であった。

そんな中で、永正十七年（一五二〇）に卯鶴丸の元服式が行われた。十一歳でまだ少し早かったようであったが、父の家督相続も遅かったし急ぎたかったのであろう。守役の藤左衛門は、この日を待ちわびたと言っては涙に暮れ、周りの者を呆れさせていた。烏帽子親は厚谷殿が務め、元服式は滞りなく済んだ。この日からは一人前の大人となり、名前も幼名から成人名に変わった。新しく頂いた名前は「彦太郎若狭守季広（すえひろ）」であった。守役の藤左衛門は年齢の事もあって隠居することとなり、新たな世話役に近習衆の中から、若い青山左門が就くこととなった。

ある時、三代目様は松前の近くにある根待理（ねまつり）村に、高貴な姫が避難しているとのうわさを聞き、すでに引退し

た藤左衛門に声をかけ、その家を確かめに行ったのであった。姫は遠目にはまだ子供らしさが残る娘であったが、立ち振る舞いがしっかりしていた。藤左衛門が家の中に声をかけると、中から姥らしき人が出てきて話すには「宇須岸館の御屋形様・河野季通様のお姫様で、今年十五歳になる」とのことであった。三代目様は姥に「何か証拠になるような品は有るのか」と尋ねると、懐剣を出して見せた。そこには「折敷に三文字」の紋が入っていた。河野氏の紋であり「これは間違いない」と思った。それから何日もしないうちに件の姫君を松前徳山館に迎え、後に四代目の妻に迎えることを決めたのだそうだ。

　このことを季広殿に話す日の朝方、三代目様は不思議な夢を見たという。夢の中で、河野季通と名乗る侍が「蔦姫を頼む」と言って頭を下げ、そして「もし蔦姫に男子が二人以上生まれたら、一人には河野姓を継がせたまえ」と言って消えていったという。

　大永元年（一五二一）の頃、季広二十歳、蔦姫十七歳の時に結婚した。

　大永五年（一五二五）の春の事として、後の松前家の記録に「同年、東西のアイヌが蜂起して多くの館が攻撃され、多数の人民が殺害され、上ノ国や松前に逃げ込んだ」という記録がある。これにより、多くの館主もみな松前に引き移って来たという。この時の戦いは、和人側の完敗であったという。

　享禄元年（一五二八）、西在のアイヌ軍は七百五十人を以て瀬田内の館を襲い館主を討ち死にさせた。そしてその勢いを持って松前の徳山館を攻めてきた。父・義広らは戦陣に立ち、弓、刀槍を振るって必死に戦い何とか撃退させることが出来た。この時は季広も戦ったが、刀を抜いて戦ったのはこれが初めてであった。青山左門に助けられながらも、足が震え顔面蒼白になりながら、必死の戦いであった。それでも終わってから父に褒めてもらった。

　翌・享禄二年（一五二九）三月、アイヌ軍が上ノ国で蜂起した。義広が勝山館にいたことを知っていたのか、西在アイヌの首長タナサカシが襲ってきた。この時、勝山館は寡勢で、義広軍に勝ち目はなかった。義広は、タナサカシに和睦を申し出て、館に上る坂の途中の平地に多くの宝物を並べておいた。タナサカシは積年の恨みを果たした、とばかりに館を睨みつけてこぶしを振り上げた。父はこの喜び勇んでいるタナサカシを館内の矢倉から弓矢で狙っていた。距離は百間（約百八十米）ほどあったが、タナサカシの胸板に見事に当たった。大将のタナサカシが射殺され、アイヌ軍は慌てふためいて蜘蛛の子を散らすように逃げ散っていった。蠣崎軍はこれを見て、館の中から打ち出でてアイヌ軍を菱沼の方に追い込み、ことごとく討ち果たした。

　天文五年（一五三六）、西在アイヌの首長タリコナとその妻を、和睦の酒宴に招いて成敗してしまった。タリコナはタナサカシの娘婿で、妻にそそのかされて、度々父・義広を殺そうとしていたため、父はこの首長・タリコナ夫婦を討ったのだという。

それにしても、アイヌ軍はなぜにこんなにも騙し討ちに弱いのであろうか。それは元々アイヌ民族の中に「ツクナイ」と呼ばれる慣習があり、蠣崎氏側がそれを熟知して、うまく利用したからだといわれている。「ツクナイ」は、アイヌ人同士で争いごと（チャランケ）が起きて、途中で和議が成立して仲直りしようとするとき、その印として、和議を申し出た方が相手に「宝物（イコロ）」を送って、勝った方を敬い続けるのだという。ただし、和人である戦国時代の豪族にとって、「騙し討ち」とは戦略の一つであり、それ以外の何物でもなかった。

【第四代・季広の手柄】

天文十四年（一五四五）、アイヌとの戦いに疲れ切ったかのように、謀将義広は没した。享年は六十七歳であった。蠣崎家の第四代は嫡子季広が継ぎ、エゾ地の守護職となった。しかし季広には多くの難問が待ち受けており、内憂外患の状態にあった。

季広は自分自身を、優柔不断でおとなしい性格だとは思っていないが、しかし熟慮型であったためか、家中の意見もやゝもすると「性格が生ぬるい」とか「もっと厳しく対応すべきである」と陰口をたたかれることも知っていた。

特にアイヌとの関係については、先代の父が厳しい対応を取っていたことから、同様の厳しさを求めてくる者が多かった。ただ季広は、父の時代からずっと疑問に思っていた。アイヌたちは争いとは別に交易も求めてやってくるのである。双方に平和が訪れると、もっと落ち着いた交易を行うことが出来る。双方とも、今よりも発展することが可能だろう、と考えていた。

エゾ地を治める領主は、エゾ管領職で秋田・檜山屋形の四代目・安東舜季（きよすえ）様である。長い間南部氏との戦いを続けながら、東北の覇を争っていた。東北での南部氏との戦いに、時折使役として参加を促す命令が来る。兵を引き連れ海を渡るのであるが、不安定な体制の下では、いつ政権奪取の争いが起きないとも限らないのである。

家来衆についても問題がある。もともとエゾ地は十二の館があり、緩い守護体制の中に組織されていたが、基本的には十二の館は自立していた。二代目で祖父の光広様と父・義広が松前に出てきてから、十二館の館主はみな松前に呼び寄せられて家来になったのである。ただ、家来とはいえ、もとは同格であり格式が高いのである。扱いを間違えると、とんでもない問題に発展することになるのである。季広は、毎日こうした問題を考えていた。答えはいつも堂々巡りとなり、なかなか出てこないのである。

天文十五年（一五四六）春、秋田・檜山の御屋形様より「達し文」が届く。「河北郡深浦森山の館主・飛騨季定が謀叛を起こしたのでこれを攻める。季広殿は、搦手の大将として参加されたい…」との飛脚便が届いた。季広は人数を揃えて船を乗り連ね、津軽小泊から森山に入った。季広軍は森山館の裏口に当たる搦手門の前を固めていた。飛騨軍は籠城戦を決め込み、なかなか

動きが取れなかった。
何日か経ち、季広軍の見張り所から遥かかなたの館内に水桶を担いで出入りする者が見えた。季広は引きの強い弓を用意させ、「よく見ていろよ、蠣崎家の秘技じゃ。」と言って弓を十分に引き絞り、ヒョウと撃ち放した。矢は空中にあって、見るみる小さくなり水桶を担いだ者に吸い込まれるように、ついに命中してしまった。季広軍はヤンヤの大喝采であった。飛騨軍は慌てふためいて人の出入りが中々収まらない。
このことがあって、程なく森山の館は陥落した。生け捕られた者から「館内は水が無くなったので、悟られないように水くみの真似をしていたが、射殺されてしまった。」敵方の落城はこれが原因であったという。季広の矢一筋によって戦に勝ったのである。この噂は大きく広がり、御屋形様の檜山屋形内でも、エゾ地に帰ってからの松前でも噂が広がり、そのことが家中の心配事の解決策にぼんやりと近付いて来たような気がしていた。
上ノ国の勝山館より十粁米ほど北に勝山館の支城としての泊館がある。ここに従兄弟の基広がいる。父・義広の弟で、次郎・高広の子である。基広は自信家で感情が激しく、エゾ地の実権を握れるのは自分しかいないと考えているのである。だから季広を憎んでいた。ある時、季広に仕える法師の賢蔵坊を凋落させ、呪いの祈祷をさせた。この法師、金と地位に目が狂い一心に祈るが、なかなか効能が表れてこない。
ある時、季広が上ノ国に行く用事があり、賢蔵坊を供に連れた。賢蔵坊には千載一遇の機会であった。山中で季広を討とうと謀り同道したが遂に叶わず、天の川の見えるところまで来てしまった。この少し先に毘沙門堂があり、そこの参詣もしていくこととした。かの法師が厨子の帳を開いて礼拝し経を誦えていたが、途中から脂汗がにじみ出て苦しくなってついに我慢できなくなり、季広に謝罪をし始めたのである。「私は、太郎基広殿に頼まれて、殿を呪い殺そうとしましたが、出来ませんでした。」と告白を始めた。季広は「よく言った。これは毘沙門天王の霊験であろう。」といって法師を許し、上ノ国から帰った後、剣の腕の立つ長門藤六広益を派遣して太郎基広を討たせたという。
この事件が解決し、森山館の一件を振り返り、季広は人の上に立ち、国を治め、何事もなくまとめていくためには、人の心を掴み動かしていくこと、そしてそれを自分の方に誘い込んでいくことの大事さを悟ったような気がした。
こうした経験から、アイヌたちとの仲もこれまでとは違った関係を作ることが出来るだろうと考えるようになった。季広は自分でそう決めると、実行は早かった。アイヌが好んで大切にしそうな宝物を数多く揃えて、多くの者にこれを与えたという。アイヌたちは皆、季広の親切心と安穏さに感謝した。そして口々に神のような人だと讃えた。ここに、アイヌ人と和人と、互いに恭敬の情を以て接すると、国内は穏やかに収まるのだということが理解されるようになったのである。

季広は、およそ百年もの間続いていたアイヌと和人の争いの愚を悟り、アイヌ側と和睦協定を結ぶことを決めた。天文十九年（一五五〇）、秋田・檜山の御屋形・安東舜季（きよすえ）様をエゾ地に招聘し、和睦協定の裁定者になって頂こうと御屋形様に請願した。

協定は、和人の代表を蠣崎季広とし、西地域のアイヌの代表は勢田内の「ハシタイン」として、上ノ国に住まわせた。東地域の代表は志利内の「チコモタイン」とした。そして、この三人の代表者の上に、檜山屋形の安東舜季が全体を掌握する形で君臨していることを確認した。その上で「夷狄の商船往還の法度」というものを定めたのである。その概要は、諸国から松前に来た商船・旅人から関税を徴収し、その一部を二分して二人のアイヌの首長に分け与えるという取り決めである。

また、西から松前に向かうアイヌの商船は、天の川沖で停泊し、帆を下ろしてハシタインに「一礼」してから渡り、東から来るアイヌの商船は知内沖で同様にチコモタインに「一礼」してから渡るというものであった。この取り決めにより和人と東西両アイヌとの併存が実現し、エゾ地に平和が実現したのである。

エゾ地の平和は地域の安定を招き、季広は後顧の憂いなく北東北に進出できるようになった。そして、檜山安東氏の旗下の武将として積極的に北東北の戦いに関わり、大いに活躍して蠣崎氏の地位を高めていったのであった。

こうした、季広の幅広い交流がその実力を広げていった。季広の作った和平と人脈が後に活躍する第五代慶広の基礎地盤となり、『松前藩誕生』の遠因になったのであった。

時に季広は、十二男十四女という子宝に恵まれていたことから、これらの子供たちを利用して姻戚関係を組み、血縁を活用して安東家との連携を強化し、奥州北部の豪族たちとも組んで、そのつながりを深めていった。また、女子の多くは旧館主の末裔と婚を結んで主従の関係を深め、息男の多くは家臣となって家門を助けた。

季広にとって、子宝に恵まれたことは「幸せ」の一語に尽きるが、それゆえの悲しい事件もあった。季広の初子で長女は、勝山館の館主代行の南條広継の妻であった。上ノ国の蠣崎基広が季広を退けようと謀叛を起こした時、南條夫妻は基広を応援していたが、この事件が発覚して、基広は季広の刺客に討たれてしまった。（前述）

そもそもなぜこのような事件が起こったのか。上ノ国の基広は父の高広が早逝し、南條夫妻が養育係りを務めていた。基広の事件が発覚した後、南條の妻はその恨みを季広の嫡男舜広（きよひろ）に向け、近習衆の一人であった丸山某子（なにがし）という者に毒殺を頼んだのである。

また、丸山にはこの度の事件とは別に、逆心を起こす元とな る恨みがあった。季広の次男・万五郎（幼名・成人名は元広）がまだ十二歳の頃であった。白い子犬を可愛がり、よく懐いていた。どこにでもついて歩いていたが、ある時、客殿の中を歩い

ていたのを見て、丸山が万五郎を「武士に似合わざる振る舞いであり、もっての外でござる」ととがめた。万五郎は「誰に向かって言っているのか」と言うが早いか、脇差を抜いて首のあたりを切りつけた。重ねて切ろうとした所を傍らの人たちに止められた。

万五郎は、季広にこっぴどく折檻され、その後も根保田館の明石氏預りとして謹慎させられていた。しかし丸山の恨みは消えず、長男舜広の毒殺を頼まれた時、長男が死ねば家督は次男に巡ってくるため、更なる恨み心に灯が付き次男への犯行に及んだと思われる。

【第五代、慶広と「松前家」の誕生】

蠣崎家の第五世は、新三郎・慶広（よしひろ）が継いだ。慶広は不思議な運命の持ち主で、もしかして慶広でなければ「松前藩」は誕生していなかったかもしれない。慶広は三男であった。そのために津軽浪岡の北畠御所に猶子として伺候していたのであった。北畠氏は東北の名門で、陸奥国の国司で公卿武士として君臨していた。後に慶広が中央政界で和歌や茶の湯、有職故実など、文化的振る舞いを発揮し、中央の人たちを驚かせたのも、浪岡御所での経験が生かされていたからであった。慶広は、文武両道に優れた武士であったといえるだろう。

本来、蠣崎家の後継になるような機会などなかった慶広であったが、実家の蠣崎家である事件が発生して兄二人が毒殺されるという異変が起きてしまったのであった。そのため、北畠家との猶子縁組を解消して、蠣崎家に帰り家督を継いだのであった。

この時期、安東一族は湊安東氏と檜山安東氏の間で「湊騒動」という抗争があった。湊安藤氏を檜山安東氏が吸収する形で合併したのであるが、湊氏側に反対意見が多く、騒動の決着は長引いた。天正十八年（一五九〇）に、天下人・豊臣秀吉から「関東奥羽総無事令」が出されていたが、それにもかかわらず戦いをやめられなかった檜山屋形に、秀吉は上洛命令を下したのであった。

檜山安東氏の御屋形は、この時はまだ十六歳の少年領主・安東実季であった。この上洛に随行したのが、安東家の重鎮の一人であり、エゾ地守護職の蠣崎慶広であった。慶広は既に四十三歳という策謀巧者であった。上洛前には、検地で東北に入っていた前田利家父子にあいさつし、この度の経緯を説明している。

京都に入ってからの慶広は、実季とは別に単独行動で、情報収集することが多かった。前田利家に再び面会し、その口添えで太閤秀吉に会うことが許されたのである。陪臣の慶広に直接謁見するという、この破格で迅速な扱いは、秀吉がエゾ地に対して並々ならぬ関心を持っていたからであった。秀吉の関心は、エゾ地の交易と唐・朝鮮国へのもう一つの入口がエゾ地になるのではないかと考えていたからであった。

一方実季は、天正十九年（一五九一）の一月に秀吉に呼び出され、拝謁した。その席上、奥州検地による本領安堵状が下賜されたが、内容は秋田知行地五万石の内その過半が直轄地として召し上げられ、そして「エゾ地の支配権」には何も触れられていなかったのである。四百年に亘って、安東一族の誇りと交易の基盤になっていた「エゾ地の支配権」が秀吉によって、あっさりと取り上げられてしまったのである。

慶広は少し焦っていた。「エゾ地の支配権」は、このままでは豊臣恩顧の重鎮の手に渡り、エゾ地守護職は必ずしも自分ではないかもしれない。慶広は、ここは一発賭けの勝負に出るべきだと思った。文禄二年（一五九三）、秀吉は朝鮮出兵のため肥前・名護屋に陣を張っていた。慶広はある日何の予告もなしに秀吉を訪ね「慶広も参陣の一人に御加え下さい」と願い出た。秀吉はこの突然の訪問に驚きながらも「ワシらは朝鮮国への出兵のため、九州に就いているが、思いもよらずエゾの千島から御屋形殿が駆けつけて参られた。はるか遠い旅路を凌いでくるのは誠に神妙である。」と大喜びであった。そして「この後もエゾヶ島において御用の品を不足なくそろえ、忠義を尽くすように」との仰せであった。「何か望みはあるか」と聞かれ、「エゾ地にて御用の品を揃え、安定して殿のもとにお届けするには、エゾ地を管理する権利と、荷を運ぶ道中の安全を保障する殿の書付を頂きとうございます。」と願い出た。秀吉はしばらくして「フム…」といったきり、それ以上何も言わずに下がってしまった。

それから五日後、再び秀吉に召し出されて、控えていると突然のように、御付きの者から「太閤殿下の御決定により、蠣崎慶広殿に『志摩の守』を与える。国政の御朱印を以下のとおり授ける。」と告げられ驚いた。秀吉からは「望みのものだ、以後は励めよ。」との言葉があり、そのまま下がっていった。慶広は平伏したまま、頭が上がらなかった。もう誰もいなくなったが、ずっと同じ姿勢のままであった。夢を見ているようであった。「夢ならば一生醒めないで欲しい」とも思った。

蠣崎慶広という人物は、時勢を読む洞察力と外交手腕によほど優れた人であったようである。秀吉から朱印状を交付された翌日に、実力者の徳川家康に拝謁している。この時、慶広は陣羽織の道服に樺太アイヌから贈られた「エゾ錦」を着ていった。珍しいものであった。家康も目ざとく「変わった道服だな」と言ってシゲシゲと見つめていた。慶広は慌てて道服を脱ぎ折りたたんで「樺太アイヌから手に入れたエゾ錦です。よろしければご進呈申し上げます。」と言って献上したという。以後、家康とは浅からぬ縁となり「松前藩」が誕生することとなるのである。

今回の事があったので、松前に帰国してから老父・季広に拝謁し詳しく報告した。その時季広は、慶広より下座に控えて畏まり、頭を下げて「私は若州の館と交流を果たし、北東北では名が知られるようになった。しかし、上洛の本望は遂げられなかった。あなたは今や日本一の大将軍・秀吉様の直接の臣となられた。これ以上の喜びはない。」と言って喜んでくれた。

以上が松前家の「前史」である、「松前藩が出来るまでの五代の物語」である。

松前慶広は、徳川家康と縁が深く自分の子供二人を幕府に差し出し、旗本としている。天下の政務が家康の手中に入りかける慶長四年（一五九九）には、エゾ地の地図と家系図を家康に提出し、家康から氏姓を「松前」に改めるように勧められている。よく聞かれるが、それではなぜ「外様なのか」という質問である。実は、「関ヶ原の戦い」のとき、海が荒れて船を出せずに、戦いに参加できなかったからであったという。

江戸に徳川幕府が開かれて、その体制が確立していく中の慶長九年（一六〇四）に、徳川家康から松前慶広に黒印状（制書）が発せられた。以後代々将軍が交替するたびに同じ制書を受けているのである。

（了）

ノンフィクション　入　選

交流が世界の人々を結ぶ絆へ

末　永　玲　子

私は「肌の色、言語、文化が違っても、その違いを乗り越え互いを理解し合い、平和な世界を」という理念の下、16年間で20カ国以上、60人以上の留学生の受け入れをしてきました。いつも思うことは、世界は一つ、皆同じ人間であるということです。留学生の親、祖父母の中には日本を恨んでいる国もあります。恨みは復讐しか生まない。どこかで断ち切らないと、この連鎖が平和を妨げる。だからいつも留学生を受け入れる時は理由を話します。「今まで日本について色々聞いてきたかと思いますが、自分の目で日本を、日本人を見て下さい。そして本国に帰ったら自分の言葉で日本について語ってほしい。若い人にはこれからの世界を平和にする努力をしてほしい」と伝えます。留学生の中には第一ホストと第二ホストの、2つのホストファミリーを経験することもあります。すると前のホストファミリーはよく外食に連れて行ってくれたとか、お土産に高級なものを買ってくれたという学生もいます。そんなときは「日本にはお金持ちもいれば、平均的な家庭もあれば、もっと大変な家庭もあります。どれも日本の本当の姿です。受け入れ家庭の経済状態も色々です。でもどの家庭も心から暖かく迎える気持ちは同じです。私の家族はあなたが来てくれて大歓迎です。そしてあなたの国の文化、国のお話を聞くのがとても楽しみです。」と話します。皆はその言葉に真剣に耳を傾けてくれます。

モンゴルの大学生が2人来た時、1人は父親が大使で、エクアドルで生まれ、英語はペラペラ、もう1人はゲルに住む放牧民の家庭の学生でモンゴル語しか話せませんでした。ですからジェスチャーでのやりとりでしたが、一生懸命伝えようとすると分かるものです。彼は芸術大学でホーミーの勉強中でしたが、彼の両親も祖父もホーミーの名手だったとのことです。主人と4人で行きつけのピアノバーに行き、ジャズピアニストの伴奏でホーミーを披露してもらいました。ピアノは楽器の王様だから、ホーミーは負けると彼は言いました。しかし素晴らしいコラボ演奏になりました。こんなにピアノと合うとは！本当に素晴らしかったです。2人でいつか函館でコンサートを開こうと盛り上がりました。西洋の楽器とモンゴルの歌、二つの共鳴に

みんなびっくり。音楽は世界を一つに結ぶと感じました。ホーミーと江差追分は似ていると言われていますが、草原で歌うか、荒海で歌うか、どちらも遠くまで聞こえるように歌うという点で似ているのでしょうか。

２人のモンゴルの学生を受け入れて感じたことは大使館育ちの学生よりモンゴルのゲルで育った学生の方が魅力的であったということです。海外の人にとって魅力的な日本人とは日本のことをよく知っていて、日本文化を身に着けている人ではないだろうか、と強く感じました。違いがあるからこそ、魅力ある世の中、世界になるのではないでしょうか。

〝世界に一つだけの花〟の歌を思い出します。―色々な花があっていい―

スイスと中国の学生が我が家にホームステイしている時に、フィンランドの目の不自由な大学教授文学学者が我が家に二泊することになりました。そこでスイスと中国の学生にお国の料理で歓迎パーティーをしようと提案。スイスの学生はチーズフォンデュ、中国の学生は水餃子、私はおでん。目が不自由なのでみんなで手を貸し、食べ物や器や部屋の様子など色々説明をしているうちに、「まるで私たちは本当の家族のようだね。」という言葉が飛び出すほどの錯覚に陥りました。この心の繋がりに幸せをかみしめました。食後、フィンランドの大学教授が文学学者だったので、「お国の詩を読み合いましょう。言葉が分からなくても詩にはリズムがあるのでなにかが伝わるはず」と提案。自分の国の言葉で自分の国の詩を朗読しました。内容は分からなくてもフランス語、フィンランド語、中国語、日本語の声の響きに何か分からないけど魂を揺さぶる力を感じました。優雅な、素晴らしいひとときとなりました。

日中友好団が来函した際は中国交響楽団第二副団長を務めていた音楽家が我が家にホームステイしました。彼はテノール歌手でしたので、またピアノバーに案内しました。ピアノに合わせて「オー・ソーレ・ミオ」をはじめ色々な歌を披露してくれました。まさにコンサートです。声量豊かな歌声はビル中にわれんばかりに響き、素晴らしい時間となりました。その後、主人は彼をカラオケに誘いました。そこでは、点数がでるカラオケに大興奮。主人が90点、彼が88点でしたが、この点数が納得いかないらしく、彼は「これはおもしろい。」と言いながらもすっかり虜になり何回も挑戦していました。そして次の日も行きたいとのこと。私たちは中国語が分からないので、スマートフォンに頼り切りでしたが、歌は心を一つにしました。

アメリカの学生２人がホームステイしていた時、彼らは友達を我が家に呼びたいとのこと。ちょうど卒業生のご主人から牛肉の塊を送って頂いていたので、主人の友人でステーキ屋のオーナーシェフの方に来て頂き、豪華なパーティーとなりました。

日本はお客様をお迎えする時は家をきれいにしてお迎えするのだ、と話すと、彼らは主人の指示に従い一生懸命ガラスを磨いてくれました。主人とはビール仲間。毎晩楽しそうに飲んでいました。お酒は良いもの、心を繋ぐものとつくづく思いました。この２人のうちの１人は32歳でハーバード大学を卒業後、カリフォルニア大学で勉強中でした。事前に頂いていたアプリケーションフォームには留学生の嗜好も書かれていて、彼はタバコを吸わないことになっていました。ところがある日、２階のベランダに吸い殻のビンを発見。話を聞くとアメリカでは吸わないが日本はタバコが安いので吸っているとのこと。そういう事であるならタバコの値段が上がると喫煙者の数を減らせるのかなと思いました。我が家から帰る日、アジア系の女学生と日本を旅行してからアメリカに帰るとのことで「え、同じ部屋に泊まるの？」と聞くと「お母さん大丈夫。その方が経済的だから」との返事。文化の違いなのか、ただただびっくりしました。帰国後アメリカから「お母さん、大丈夫だったよ。」との便りでした。

また5年前と4年前には函館でユースキャンプを開催しました。スイス、ドイツ、フィンランド、ベルギー、イタリア、台湾からの留学生8名を迎えてのキャンプでした。開催場所は風光明媚なネイパル森とグリンピア大沼を選びました。また日本の学生にも将来世界のリーダーシップをとってほしいという思いで、北海道教育大学函館校の学生たちにも参加要請しました。日本語講座、レクリエーション、ジンギスカンパーティー、観光案内などすべて英語で対応してもらいました。ネイパル森の生活は二段ベッドの狭い部屋、そして時間通りの行動はヨーロッパの学生らにとっては「牢獄のようだった」という感想文が寄せられました。プライバシーを重んじるお国柄の学生にはつらかったようです。又昼食後、１人のスイスの学生がホールでピアノを弾き始めました。すると次々に色々な国の学生が演奏しはじめたのです。そしてそこにはいつの間にか人の輪ができ、拍手の渦がわきました。みんなの心が一つになった瞬間でした。

「音楽は素晴らしい。世界共通語だ」と感動しました。夜のカラオケでは日本の学生の上手さは飛びぬけていました。台湾の学生にテレサ・テンの歌をリクエストしたら「誰その人」と全く通じなくて、結局はスマートフォンで解決しました。テレサ・テンとは言わないのです。北京語でデン・リージュンでした。テレサ・テンはクリスチャン・ネームで、そのテレサを日本でデビュー時にそのまま使ったものだったことを知り納得した次第です。歓迎パーティーは函館山のレストランで、夜景を見ながらのご馳走に舌鼓。友人の大正琴グループの演奏、そして15分で6人の留学生が一曲マスターし演奏をしてくれたのです。覚えの早さには驚きでした。教育大生の面白クイズや歌の披露、最後はsukiyaki song を英語の歌詞で歌い、思い出深い夜は過ぎました。この時教育大の学生たちが披露した歌が素晴らしかったとレストランのオーナーに褒められ、クリスマスには歌のアルバ

イトをすることになったということをお聞きしとても嬉しく思いました。

またスイカ割りは初めての経験だったようでお腹を抱えて笑い転げる姿が微笑ましく、線香花火にも歓声があがり、茶道講座、書道講座では日本文化にすっかり魅了された様子、パンつくり、七宝焼き、お国紹介ゲーム、体育館でのバスケットボール。最後の日はみんなでアイディアを出し合った「さよならパーティー」。ベルギーのヘンドリックはムードメーカーでいつも笑いをとる学生でしたが、この日もヨガを披露してくれました。高度な演技の後は選ばれた4人がステージ上で指導を受けるというパフォーマンスもあり、みんなの笑いを誘いました。他の留学生はパワーポイントでのお国紹介、最後は教育大生の指導でイカ踊りで盛り上がり最後の夜を楽しみました。そして翌日のお別れの日は教育大の学生たちからの色紙の言葉に留学生は涙、涙。皆抱き合って泣いていました。部屋割りも留学生と日本の学生がミックスされるように組み合わせしましたので、本当に寝食を共にした1週間でした。色々な思い出が走馬灯のように巡ったのでしょう。留学生たちの次なる地、札幌行きのバスも出発できない状態でした。私たちもついもらい泣きしてしまいました。本当にやりがいを感じる瞬間でした。最後に留学生と教育大の学生たちが英語で感想文を書いてくれました。どこの国の学生も英語は得意、やはり英語は世界の共通語である事を再認識しました。今でもこの貴重な経験と彼らとの交流は宝です。

このような交流を続けているうちに、大人同士の交流はできないものかと考え始めました。そんな時に船矢美幸さんに国際俳句交流協会（HIA）を紹介されました。国際交流に興味があったので、国際俳句交流という言葉にひかれ直ぐ会員になりました。国際俳句交流協会とは１９８９年に俳人協会、現代俳句協会、日本伝統俳句協会の支援を受けて、俳句大会、シンポジウム、講演、機関誌「HI」を通して世界の俳人との交流と親睦を図り、俳句と俳句文化の交流を促進することを目的として設立されたそうです。会長は有馬朗人氏（第24代東京大学総長、第１２５代文部大臣、理学博士）でした。有馬先生の俳句講演では偉ぶらない、優しいお人柄に接していただけに、今年1月、先生の突然の訃報をテレビで知った時は、とても衝撃を受けました。今になっては「有馬朗人会長と行くスウェーデン俳句の旅　２０１８」で先生と俳句の旅ができたことは一生の宝となりました。「有馬朗人会長と行くスウェーデン俳句の旅　２０１８」について少し説明します。

２０１８年は、日本とスウェーデンの友好航海通商条約締結150周年を記念して、白夜のスウェーデンでの俳句シンポジウムを開催することとなりました。スウェーデンの人々は、穏やかな国民性と言われています。１９６１年9月18日にコンゴでの

和平ミッション遂行中、搭乗機が墜落して事故死するまで国連事務総長を務めたダグ・ハマーショルド氏もスウェーデン人の一人で、彼も俳句を愛していたとのことです。この歴史的な人物の墓前を訪問できたことも感銘深かったです。有馬朗人会長を団長に文化交流の旅が、６月24日から6月30日まで実施されましたが、この旅の企画者はスウェーデン俳句協会会長ラーシュ・ヴァリエ前駐日スウェーデン大使のご尽力のお陰でした。ヴァリエ氏のご厚意により、ストックホルム東洋博物館、ヴァレンツナ文化センターにおいて国際交流基金共催のふたつの俳句シンポジウムが開催され、日欧俳句交流大使、EU前大統領ヘルマン・ファンロンパイ氏、ベルギー俳句センターウィリー・ヴァンデワラ氏、有馬朗人氏の三氏の講演、パネリストとしてのお話を聞くことができたことは貴重な経験でした。６月26日のストックホルム東洋博物館での講演テーマは「世界の俳句の今」でした。講演終了後は、子供俳句コンテスト授賞式（ＪＡＬ財団）があり、昼食後は一番心の負担となっていた句会が開催され、講演いただいた三氏に加えて、スウェーデンの俳人の方々も参加。錚々たるメンバーに恐れをなしました。昼食後のゆったりした時間の中にも緊張が走りました。１票でも票が入ってほしいと願いながら固唾をのんで皆さんの俳句に耳を傾けていました。今となっては良い思い出でです。

Bending down low
and looking up at
Linnaeca borealis
Reiko Suenaga

27日の午前中は、麦畑に囲まれた小高い丘の上に立つ12世紀に建てられたというマルキム教会で、リュートを演奏しながらの詩の朗詠を鑑賞しました。俳句もこのように朗詠することで日本語の美しさを伝えられるのではないか、いつか函館でやってみたいと考えました。午後からヴァレンツナ文化センターで三氏による「俳句シンポジウム」があり、テーマは「俳句とは何か」でした。

ヴァンデワラ氏・・　西洋で詩を書くことは非常に個人的で孤独。俳句は季語を切り口とし互いに評価し作品が作られてゆく座の文学。

ファンロンパイ氏・・西洋の詩は個人的企て他人と共有できない。俳句は形式がシンプルで短い。作品には宇宙の欠片といった哲学が隠れている。

有馬氏・・　俳句は非常に短いが、季語をキーワードとして作者の意図をくむことができる。また、作品の解釈が個人によって違ってもよい。

この日のディナーでは、ヴァリエ氏ご自身によるスウェーデン語による芭蕉の俳句の朗詠がありました。実はヴァリエ氏は

「ＢＡＳＨＯ」というタイトルで６５１ページにわたる芭蕉のすべての句をスウエーデン語に訳した立派な本を出版されていたのです。本当に素晴らしい貴重な時間でした。

28日はストックホルム市長舎や市立図書館、ノーベル博物館や旧市街ガムラスタンなどを終日観光し、夕食はガムラスタンのレストランで最後の夜を楽しみました。

そして29日は旅の仲間と別れて、船矢美幸さんとアーランド空港からミュンヘンへと飛びたちました。途中ルフトハンザ航空への乗り換えがありましたが、1時間も出発が遅れハラハラドキドキでした。しかも何の説明もないのです。周りの人に聞いてもわからず、中には「いつもこうだ。」と話している方もいました。日本の良さを痛感しました。ミュンヘンではバイエルン独日協会ミュンヘン句会と交流体験をしました。ドイツに、こんなにしっかりした俳句組織があることにも驚きました。今回の句会の計画に尽力して下さった村戸祐子氏（ミュンヘン句会代表）から事前にミュンヘン句会メンバーからの質問がきて、答えてほしいと連絡が入りました。その質問の内容にもびっくりしました。

1. 俳句では底深い余韻をどうやって表現するか。
2. 何が俳句の本来のつよみか。
3. 西洋の俳句は日本の俳句とどのように違うか。
4. 俳句の「滑稽（ユーモア）」について
5. 造語について
6. 日本の俳人のどの程度の割合人が、俳句は日本語で書くべきだという意見か。その意見はどういう理由か。
7. 世界的な気象異変の中、季語題が現実の季節と合わなくなってしまった場合歳時記の使用の仕方がどのようにかわっていくか、またそれを強いられえるのか。伝統派の中のハードライナーはどのようにこの異変に対応していくのか。
8. 日本の俳人は、現在使われなくなった言葉もつかうのだろうか。

また『蜘蛛』『昼寝』の2句の投句を事前に送って欲しいとの連絡もありました。

句会の会場はイザール川を渡った街中の老人センターで、そのセンターの中庭にはキッチン付きの明るい一軒家があり、はじめは老人センターで自己紹介、函館の紹介をし（パワーポイントで）、徹夜で作ったつまみ細工のコサージュと折り紙の箱をプレゼントさせて頂きました。ドイツではあまり大げさな物のやり取りはしないとのことです。荷物になりましたが皆さんに喜んで頂け一安心。ミュンヘン句会の皆さんのフレンドリーな笑顔に温かく迎えられ、特に心に残ったことは、卓上のコップの野の花。そこに俳人の心を発見し、なんと素晴らしい心遣い、と俳句を通しての交流に感動した瞬間でした。その後、俳句リ

ストに載った『蜘蛛』『昼寝』の句を中心にディスカッションをしましたが、どの句が良いと思うか、その理由も含めて発言し、この二句に対する共感、疑問等活発な発言が続きました。人種を問わず共感出来る部分もある一方、疑問がある部分もあり、ドイツ人の議論好きはいい加減なところで妥協せず納得するまで話し合う国民性であることもわかりました。

山道や行く人なしか蜘蛛の糸　　玲子

mountain paths !
nobody has never passed through there
spiders, threads

世界旅行いった気がする昼寝かな　　玲子

the round-the-world tour
as if I could finish the trip
while I take a nap

スケジュール通り、句のディスカッションが一段落した後はティータイムとなり、ティータイムは中庭にあるキッチン付きの陽のさすお洒落な一軒家でした。皆さんが持ち寄った美味しいコーヒー、手作りケーキ、クッキー、お庭で採れたベリーの果物などのおもてなしに笑みがこぼれて、アットホームな雰囲気の交流となり、ドイツ人の一面を見た思いでした。ミュンヘン句会会員13名に囲まれて中庭で記念撮影。どの顔も笑顔でいっぱい。ティータイムのあと、事前のドイツ人の質問の季語、西洋人の質問についての説明は難しくて冷や汗のでる思いでした。ミュンヘン句会の皆さんの俳句に対する熱い思いを感じました。そして〝日本の俳句を真似るのでなく、ドイツ語独自の俳句を〟という思いも伝わってきました。時間が足りないほどの白熱したディスカッションに司会者もひと苦労。ミュンヘン句会も年配者が多いようで、病気や体調不良で参加できない方もいらしたようですが、充実した句会となりました。

このミュンヘン句会交流企画にあたっては村戸祐子氏（ミュンヘン句会代表）、青木陽一氏（元独立行政法人国立環境研究所社会環境システム研究領域主任研究官）に大変お世話になりました。また函館を紹介するパワーポイント作成では資料及びポスター、観光パンフレットなどの提供は青年海外協力隊としてネパールで活躍された函館市役所国際課の吉岡氏、イカール星人考案者の坂口氏に大変お世話になりました。吉岡氏との繋がりは私の所属する会で「ネパールの現状報告」をして頂いたり、ネパール料理教室のご協力が縁でした。函館紹介の準備にあたっては、ドイツの方々に是非函館を訪れて欲しいという熱い思いと、函館とミュンヘンが繋がる日を期待してのことでした。そんな日がいつか来ることがあれば本当に嬉しいです。

また函館日独協会会員として、函館日独協会公式訪問という形でバイエル独日協会ミュンヘン句会を訪問ができましたのは、

函館日独協会会長今均様のご理解と副会長船矢美幸さんのお陰です。心より感謝申し上げます。

このバイエル独日協会ミュンヘン句会ですが、１９９７年９月に俳句セミナーが神戸の俳誌「円虹」創刊主宰の山田弘子氏を迎えて開かれ、その反響が大きかったことからバイエルン独日協会の句会が孝子・フォン・ツェルセンさんによって立ちあげられたとのことです。伝統的俳句の有季定型を守っているとのこと。ドイツ語で５－７－５のシラブルでは内容が多くなりすぎることが多く、最近は４－６－４のシラブルで詠む実験をしているとのこと。バイエルン独日協会句会20周年記念誌合同句集がプレゼントされ、中を見て感動しました。日本よりも熱心に勉強しているのではと思うほどでした。私が函館で所属している函館国際俳句会（会長 井上白鷹先生）は今年で創立７年です。現在イギリス出身の方を含め19人の会員です。俳句は、海外の方にも読んで頂けるように、海外の方々と交流できるように日本語と英語で表現しています。３年後再びミュンヘン句会を訪れ、10周年記念誌をお渡しできたら嬉しいです。

因みに、テレビ番組に「世界！ニッポン行きたい人 応援団」というのがあります。昨年９月14日、20時から「ホンジュラスから日本に来た少女―芭蕉が大好き―」という番組がありました。その少女が芭蕉の「奥のほそ道」の行程をたどるというもので、出発地点の千住では「行く春や鳥啼き魚の目は泪」の芭蕉の句を詠み、松島では芭蕉が俳句を作らなかったのは「あまりにも美しくて言葉で表現できなかった」ということがよく分かったと語り、尿前の関を超えて宿泊した旧庄屋有路家住宅も訪問しその地のガイドの方と交流、俳句も披露 立石寺では「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」という芭蕉の句への疑問点、なぜ蝉が鳴いているのに閑かさなのか、がここに来て解るような気がするとのこと。黒羽は地元の方々に心暖かいおもてなしを受け、芭蕉が「奥のほそ道」でもっとも長く滞在した地だったことに触れ、この地の温かい人の心が芭蕉を２週間も長期滞在させた理由をあらためて感じとったと語り、別れの時は互いに涙涙で別れがたいシーンが流れました。そして、今年コロナウイルスのため訪問できずとも、オンラインで地元の方々と再会を喜んでいる様子も放映されました。日本人以上に芭蕉を研究し、芭蕉を愛しているのに驚かされると共に、今や俳句は世界のＨＡＩＫＵになっていることを改めて認識させられ、「ＨＡＩＫＵは世界を結ぶ絆になる」と確信した番組でした。

留学生をホストファミリーとして迎えたり、ユースキャンプを開催したり、俳句という共通の文学作品を通して交流したり、いろいろな交流方法はあります。コロナ禍で留学生を受けいれられない今は俳句交流に力をいれています。現在俳句をユネスコ無形文化遺産にしようと、前国際俳句交流会会長の有馬朗人

先生が２０１６年7月に伊賀市岡本栄市長とともに俳句をユネスコ無形文化遺産にと登録推進協議発起人を立ち上げられ、翌年の４月に俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会が設立されました。俳句は５・７・５という世界で一番短い詩形であること、俳句は自然と共生する文学として自然を大切にする心が養われること、さらには子供から百歳に至るお年寄りまで、幅広い人たちと創作及び鑑賞が共有できること。この世界で一番短い文学作品を通して交流をし、世界の平和をという観点から推薦しています。

どのような交流であっても、いつも思う事は「どこの国の人もみんな地球上の人間だ。嬉しい時は笑い、悲しい時は泣き、腹を立てると怒り、美しいものに感動し、残酷なものには目を背ける」という事です。今や宇宙に行ける時代。ガガーリン少佐は「地球は青くて美しい。こんな美しい地球上で争いがあるのは悲しいことだ」と話したことが深く心に残っています。

どんな時もあきらめずに夢と希望をもち続け、未来ある子供たちのために交流を通して世界の人々との絆をつくり、「平和で、きれいな地球」を残したいといつも願っています。

〝願えば叶う、一人一人の交流の輪が世界を平和にする〟

世界で一番短い文学作品、子供から大人まで楽しめる俳句ＨＡＩＫＵが世界を結ぶ

青い空　さくらの花が　きれいだな　　ゆい
小学　一年生

In the, blue sky
Cherry blossoms
so beautiful

耳にエコー　音心にリズム　踊りのビート

Echos through my ear
Rhythms sound in my head
Dancing to the beat

Aoi（New Zealand）
Elementary 5grade

無観客　家庭応援　金メダル

The Stadium desolate

Silence, dwellings roar
It ^s Gold.　　Martin(U.K.)

a kis ártatlan!
méteres gyökerekkel -
ki se irtható…
Nerhaft Antalné　(Hungary)

見下ろせば古戦場は花の海　　玲　子
Look down
an ancient battle field:
the sea of flowers

ノンフィクション　入選

だから大沼って面白い

小島　栄樹

わが家の大沼の春は水芭蕉から始まる。四月上旬、もう咲いているだろうか、などと言いながら小一時間ほど車を走らせる。大沼隧道を抜け、程なく線路に並行して走る道路左手に見えてくる湖と駒ヶ岳の素晴らしい眺め。その余韻もさめないうちに大沼に到着、信号機のある交差点を右に曲がれば水芭蕉があるトルナーレ通に、左に曲がれば大沼公園駅の前を通って小沼に行くという分かれ道だが、いつものようにまず小沼をひと回りすることにする。

駅の前を通り過ぎ、じき左側にある踏切を渡る。この付近にはかつて鹿園があったのだがいつの間にかなくなってしまった。そのときの名残かこの踏切の入口には今でも当時のものと思われる鹿園道路踏切と書かれた標識が立っている。

この時期になると湖の氷はもうすっかり解けてしまっている。小沼散策路を歩いて行くと毎年のように見かけるカンムリカイツブリ、今年もツガイで泳いでいた。そこを通り過ぎてしばらく歩いているとどこからか白鳥のあのカウカウという鳴き声がとぎれとぎれではあるがかすかに聞こえてきた。夕日が美しく見えるベンチの前の湖にも、氷河期の名残ともいわれているミツガシワが群生する岸辺に広がる湖にも、そこから望む白鳥台セバットにも白鳥の姿はない。

小沼をあとにして湖畔一周道路を左回りに進む。池田園駅への入口の標識を過ぎて少し行くと道路右の湿地の奥まったところに水芭蕉が見事に群生していた。いつもであればこのあとまっすぐトルナーレ通の水芭蕉の群生地に向かうところであるがこのたびは少し趣を異にすることになった。

この群生地を通り過ぎ湖畔に通じる木道を左に見てもう少し行ったところで左側の雑木林の間から見える湖におびただしい数のオオハクチョウがいた。車を安全な場所に止める。車を降りる前からもうあのカウカウという鳴き声が聞こえている。さっき小沼散策路でかすかに聞こえていたあの鳴き声、白鳥たちはこんなに遠くにいたんだ。雑木林の枯葉を踏み分けながら湖岸に出ると駒ヶ岳をバックにした湖面に浮かぶオオハクチョウの群れ、その数三百羽とも四百羽とも。今まで毎年のように白鳥台セバットで見て来た白鳥の群れは多くてもせいぜい五十羽

程度だったがいま目の当たりにしている白鳥の数はスケールが全然違う。初めて目にする光景、そしてやっとこのような光景に巡り合えたという感激、しばし立ち尽くす。白鳥たちは思い思いに右へ左へ少しずつ移動しながらくつろいでいる風であった。

オオハクチョウの群れの真ん中あたりにマガン四十羽ほどが横一列に並んでいる。見ているとマガンとオオハクチョウはお互いの世界に溶け込んでしまっているかのように振舞っている。このすぐ後にオオハクチョウが移動したときのマガンの行動がこのことを如実に物語っている。

周りを見渡せば左側の小さな入江の岸辺付近にもオオハクチョウの別の一団がいて、これもざっと見たところ百羽はいた。

しばらくするとオオハクチョウの群れはゆっくりと右の方に移動を始めた。マガンの列もそれに合わせて白鳥の群れの真ん中あたりにポジションを保ったまま移動している。左側の入江にいたオオハクチョウの一団もそれに合わせるかのように移動し始め、いつの間にかあれだけいたオオハクチョウとマガンはいなくなってしまった。

白鳥たちはキャンプ場の方角に移動したように思われたのでそちらに行ってみたが白鳥は一羽もいない。あれだけの数の白鳥たちはどこへ行ってしまったものやら。

キャンプ場からほど近いトルナーレ通の水芭蕉も気になるので立ち寄ってみたところ道路脇に広がる湿地にはまだ数は少ないがみずみずしいきれいな水芭蕉が咲いていた。

ふたたびキャンプ場に戻ってみるといたいた。オオハクチョウの群れがキャンプ場の前に広がっている。ほとんどが岸から少し離れたところにいるのだが人影に気づいたのか幼鳥三羽が岸辺に寄ってきた。冬のあいだ白鳥台セバットでパン切れか何かを貰った経験があるのだろうか、正面を向いてこちらをジッと見つめている。何もないよ、といって手を振ってもなかなか岸辺から離れない。

そのうちにまた白鳥たちの大移動が始まった。岸辺にいた幼鳥たちも群れに混じって去っていった。

数日後再び大沼へ。もちろんオオハクチョウの群れを見に行くためである。ところが最初に見かけた場所にもキャンプ場にも一羽もいない。あの群れはもう北に旅立ってしまったのかもしれない。

湖畔一周道路の大岩園地を過ぎてややしばらく行き駒ヶ岳神社の手前あたりにくると左手の雑木林の先に湖を望める場所がある。道路から湖岸に下りていくと湖をはさんだ向かい側には七飯スキー場も見える。湖上には白鳥十羽くらいずつが左右に分かれて浮かんでおり、それらをつなぐようにマガン四十羽ほどが横一列になって並んでいた。マガンの先頭にいた二羽、大きさも羽の色もマガンとほとんど同じように見えたが頭部の模様がマガンとは全く違っていた。いままでに見たこともない水鳥のようだ。

こういう時に教えを乞うために駆け込むのが大沼国際交流プラザ、常駐しているガイドさんはいつも親切に教えて下さる。このたびもカメラのディスプレイに映った鳥の姿を見ていただいたところ、即座にこれはシジュウカラガンという水鳥で絶滅危惧種に指定されているということを教えて下さった。それから常備の野鳥図鑑を取り出し、シジュウカラガンの項を見せて下さった。そこにはさっき自分たちが見た鳥の写真が掲載されていた。シジュウカラガンという名称の由来、ガンの仲間で頭部の模様が陸上でよく見かけるシジュウカラのそれによく似ているからとか。

絶滅危惧種に指定されている珍しい野鳥に大沼で出合ったのはこれが二回目である。因みに一回目は四年前の春に白鳥台セバットで見かけたハクガン一羽で、そのときも今回と同じように数羽の白鳥と共に過ごしていた。

さらにその数日後また大沼に。キャンプ場北側の岸辺に行ってみると向かい側には駒水橋が見え、その右に連なる岸にかけて白鳥の群れがいた。およそ二百羽。カウカウという声が聞こえていたがしばらくするとどこからか十羽のオオハクチョウが湖面に降りて来た。

この光景を見ていて今冬十二月下旬の白鳥台セバットでのことを思い出した。その日は大沼でも零下十八度という厳しい寒さに。冬になって大沼小沼が分厚い氷に覆われてもここセバットだけは凍らないといわれているがこれだけの寒気が入ってくるとさすがのセバットも岸に近いごく一部の他はすっかり氷に覆われていた。

ざっと見たところ二十羽もいただろうか、オオハクチョウが氷の上で過ごしていた。そのうちの十羽ほどがカウカウと鳴きだした。しかもみんな西の方角を向いて声をあげている。しばらくすると西の空から十羽のオオハクチョウが現れ、やがてすぐそばに着氷した。そして今度は飛んできたオオハクチョウたちが首を真上に向けてカウカウとやりだしたのである。白鳥語がわからないので実際にどういうやりとりがあったのかということはさておいて、この光景を見ていてこんな会話が交わされたのではないかと勝手に想像（創造）してみた。

「おーい、こっちだ、こっちだ、ここにおりてこーい」

「どうもありがとう。お陰で無事着くことができました。これからもよろしくね」

見ていてなんとも心温まる光景であった。

春になって北への旅立ちを前にした今、湖上にいるオオハクチョウの鳴き声に呼応して別の群れが舞い降りてくるという四ヶ月前と同じような光景がまた眼前で繰り広げられていた。

お前たち、冬になったらまた大沼に戻って来いよ。

そういえば去年の三月、それまで幻の鳥だったシマエナガに初めて出合うことができた。しかも巣づくりの最中という場面で。

小沼の駐車場から小沼散策路を東屋に向って歩いて行くと道路と湖の間の水際にミズナラの大木がある。そこに大きなカメラを持ったご婦人がお二人、「何かいますか」と妻が声をかけたところミズナラの木を指して「ここにシマエナガが巣を作っていますよ」と。

湖に面した太い幹の地上三メートルほどの高さのところから上に向かって三本の細い枝が伸びている。その細い枝と太い幹に囲まれた空間にシマエナガの巣が作られていた。

巣の形は敢えていえばパイナップルに似ていなくもないが大きさはその倍以上はある。色はうす茶色。巣は底部から作り上げてきていて半分くらいでき上がっているような感じであった。

十五分くらい待っているとシマエナガのツガイが巣の材料をくわえて戻ってきた。一羽が巣の中に入って何かの作業をしている間はもう一羽は付近の枝に止まって待っている。運んできた巣の材料は苔とか鳥の小さな羽などのようである。一通り作業を終えると二羽ともまた材料探しに飛び立っていった。それから十五分とか二十分経つとまた戻って来る。

シマエナガは動きが早い鳥なのでゆっくり観察することが中々難しいと言われているがこのたびは比較的長い時間同じ場所に留まってくれていたのでよく見ることができた。

日が経つにつれてカメラを手にした人たちが増えてきたがシマエナガはさして気にする様子もなく巣作りに励んでいた。

数日後に行ったときには巣はでき上がり、抱卵が始まったようだ。この時期になると抱卵している親鳥にもう一羽が餌を運んでくるようになるので一旦巣を飛び立ってから戻ってくるまで一時間とか二時間かかるようになる。

ヒナが誕生するのを楽しみにしていたが残念ながらその望みはかなわなかった。数日後に訪れた時には巣は何者かによって壊され、材料に使ったとみられる鳥の羽などが壊れた巣の隙間からはみ出している状態であった。さらに二週間ほど経ってから行ってみたところ巣はきれいさっぱり跡形もなくなっていた。

そういえばおととしクマゲラに初めて出合ったときのこと。あれは三月に入ってすぐのことだった。大岩園地でクマゲラが見られるというホットな情報を耳にしたので早速行ってみた。駐車場に車を止め、付近を歩いてみたがそう簡単に見つかる相手でないことは今までと同じである。

しばらくすると駒ヶ岳神社の方からガイドさんと外国人お二方が歩いて来られた。二言三言お話をするとみなさんもクマゲラを探しに来たとのこと。

そうこうしているうちに外国人のお一人がスマホを取り出し、野鳥の鳴き声を大きな音量で流してくれた。するとその声を聞きつけたのか一羽の黒い鳥が湖の方から飛んできた。あっ黒い鳥が、と思って見ていたが、みなさんはその飛んでいる姿を見て、あっクマゲラだ、と口々に叫んでいる。

クマゲラはあまり遠くない、そうかといってあまり近くもな

い木に止まった。途中に視界を遮るものが何もない木を選んでくれたのはラッキーだった。
クマゲラは声の主を待っている様子だったが現れるはずもなく、やがてさっき来た湖の方へ飛び去っていった。
これがクマゲラに初めて出合ったときの顛末であるが、何か心に引っかかるものがあり、クマゲラに出合えたうれしさもイマイチといったところ。

その年の五月のこと、カンムリカイツブリが巣作りしている現場を見ることができた。カンムリカイツブリは毎年見かけているが巣作りを見るのは初めてである。
いつものように小沼散策路の駒ヶ岳がちょうど正面に見えるベンチでひと休み、おにぎりなどを食べていると一羽のカンムリカイツブリが長いものをくわえて目の前を右から左へと泳いでゆく。その先には葦の大きな茂みがあるのだがその少し手前に茶色の枯葉で覆われた小さな浮島のようなものがあった。岸からわずか十メートルほどのすぐ目の前である。カンムリカイツブリはくわえて来たものをその浮島の上に置いた。よく見ると木の細い枝のようである。別のカンムリカイツブリが今度は左側から黒い葉っぱのようなものをくわえてやってきてその浮島の上に置いた。どうやらツガイで巣を作っているようだ。
この巣は浮巣と呼ばれ、カンムリカイツブリは水面すれすれに顔を出している葦や睡蓮などの上にどこからか拾ってきた大小の枝や枯葉、水に潜って食いちぎってきたであろう睡蓮の茎などを積み上げて作っていく。先端に大きな葉のついた自分の体長より長い睡蓮の茎を口にくわえて運んでいく様子などはなんともユーモラスな光景である。
そのうちに抱卵するようになったが、別の一羽は相変わらず巣の材料を運んでいる。恐らくは巣のメンテナンスをしているのだろう。
巣が岸のすぐ前にあることから日を追うごとに訪れる人の数も増え、ベンチを独占してのんびりおにぎりなどを食べているどころではなくなった。
そんなある日のこと。二羽のうちの一羽が遠くに出かけて不在のときに抱卵していた一羽が何を思ったのか巣から湖面に降り、そして巣から離れた。そのとき突然どこからともなくカラスが現れ、多くの人が見ている前で巣から卵をくわえて飛び去ったのである。
自然界の厳しい現実を垣間見た一瞬であった。その後この巣は放棄され、誰もメンテナンスをしなくなったので時間が経過するにつれていつの間にかばらばらになってしまった。
不思議なもので一度このような現場を見てカンムリカイツブリの巣とはこういうものだということがわかると散策中にそれらしいものを見るたびに、もしかして、と思ってしまうのだが巣を見つけることはそう簡単ではない。
いつもとは違ったあまり人が行かない散策路を歩いていたと

き、林の奥の湖面にそれらしい巣を見つけた。よく観察するとやはりカンムリカイツブリの巣であった。前と同様にカンムリカイツブリのツガイが次から次へといろんなものを運んでくる。

数日後には抱卵が始まった。抱卵中の親鳥が立ち上がる。卵が三個見える。親鳥が長い嘴で卵の位置を少し変えたり、転がしたりして卵を慈しんでいるようだった。

七月のある日、小沼散策路の夕日が美しく見えるベンチに座り湖を眺めていると右の方からカンムリカイツブリが二羽やってきた。そのうちの一羽の背中がいつもより少し膨らんでいるように見えたがしばらくすると羽をパッと広げて何かをバラバラと湖面に落とした。湖面にはゼブラ模様のヒナが三羽浮いていた。親鳥はヒナを羽の中に乗せて連れて来たのだ。ヒナたちは元気にそこらへんを泳ぎ回っていたが親から遠く離れることはなかった。巣から少し離れたところへ散歩でもさせにきたのかなあ。このような情景が目の前で展開するとは思いもよらないことであった。このヒナたちが無事育っていくことを願うばかりである。

あれから二年が過ぎた今年六月のはじめ、カンムリカイツブリが抱卵しているのを見かけた。去年はあちこち探したり詳しい人に聞いてみたりしたが結局は見つからずじまいだったので二年ぶりのことである。場所はおととしカンムリカイツブリの巣を見つけたところと同じで小沼散策路の駒ヶ岳が正面に見えるベンチの前である。ただ巣の位置がおととしは葦の茂みの手前にあったのだが今年は巣は茂みの中の少し奥まったところに作られていた。そのため手前にある葦が視界を遮ることになり巣を見つけるには難しい場所ではあった。抱卵している親鳥はじっとしているように見えるが時折首を動かしてあたりを見渡したりしている。そのちょっとした動きをしてくれたことによって巣を見つけることができた。抱卵していないもう一羽が巣の材料を調達してきて巣のメンテナンスをしているのは以前と同じであった。

カンムリカイツブリはオスとメスが交代で抱卵する。何度か見に行っているうちに抱卵を交代する場面も見せてもらえた。

巣を見つけてから十八日目のこと、巣の周りにはゼブラ模様のヒナたちが水面に浮かんでいたり親鳥の背中にあがったり首にまつわりついたりしていた。それでも親鳥のもとにはまだ孵化していない卵があるらしくそのまま抱卵を続けていた。

二十日目のお昼どき、ヒナたちはどうしているかと思いながら巣の様子を見にいったところ葦の間から鳴き声は聞こえていたが親鳥もヒナも姿はなかった。念のため夕方にもう一度行ってみたときのこと、件の散策路を通りかかるとちょうどそのとき巣のある葦の茂みの奥の方からカンムリカイツブリのツガイが湖上に出てきた。背中が膨らんでいる親鳥の羽の中からはヒナ一羽だけが顔を出している。あと何羽いたかはわからない。そろそろ黄昏がせまってくる湖をカンムリカイツブリ二羽が沖に向かって進んで行く。こんな時間にどこへ行くのだろうか。

その後何日かして小沼散策路で大きなカメラを持っている何人かの人にカンムリカイツブリの消息を聞いてみてもみなさん、もういねーよ、と言うばかり。

数日前の夕方、ヒナを背中に乗せて沖の方に去っていったあのときのうしろ姿、あれが旅立ちのシーンだったのかと思い返している。

これまでついぞ見たことがなかったエゾフクロウに初めて出合ったのはもう六年も前のことだったろうか、しかも同じその年に別々の場所で二回も。

四月に入り大沼は水芭蕉の季節、いつものようにまずトルナーレ通の水芭蕉を見てから大岩園地に立ち寄ったときのこと。駐車場で車を降りたときに駒ヶ岳神社の方から大きなカメラを持ったご婦人がやって来た。「何かいましたか」と妻が声をかけたところ「この道を少し行ったところにエゾフクロウがいますよ」とのこと。しかもご案内しましょうか、とおっしゃって下さったので素直にご好意に甘えて案内していただいた。

道路から湖畔側の林の中へ十五メートルほど入ったところに一本の老木がある。まだ四月なのでまわりの木々に葉はなく道路から見通せる。エゾフクロウはこの木の洞(ほら)の前で泰然自若としてこちらを向いて端正な姿を見せていた。古木にできた洞とその前にいるエゾフクロウの静かなたたずまい、これがエゾフクロウとの最初の出合いであった。

それから一ヵ月ほど経った五月の終わり頃湖畔一周道路を自転車に乗って東大沼キャンプ場のそばを通ったとき、何人かの人がキャンプ場の中の道路から上の方を見ているのが目に入った。行ってみると高い木のずっと上の方の葉の茂みの中にエゾフクロウがいた。ジッと下を見ている。今年になってエゾフクロウを見たのはこれが二回目だがこれだけで終わらないのが大沼の面白いところ。

そこを通り過ぎてキャンプ場の中を流れている小川に架かる橋を渡ると今度は大きなカメラを三脚にのせて構えている人や手持ちのカメラの人たちが同じ方向を見ている。話を聞いてみるとその先のそう遠くないところにある大木の洞からエゾフクロウの幼鳥がときどき顔を出すというのである。待つことやや暫し。やっと顔を出してくれた。実に可愛らしい。どこか遠くを見ている風だ。もしかしたら親を探しているのかな。先に見た高い木にいたのが親鳥かもしれない。親鳥は少し離れたところにある高い木の枝に止まって幼鳥を見守っているとよく言われている。

カメラマンの中に物知りの人たちがいて洞の中には幼鳥は四羽いるとか五羽いるとかいろいろな説が飛び交っていた。

あまり見る機会がないエゾフクロウの幼鳥が見れるというのでキャンプをしている人はもとよりたくさんの人が集まって来る。キャンプの子供たちもワイワイ言いながら集団で見に来る。エゾフクロウは音に敏感なのか周囲が騒がしくなるとさっさと

引っ込んでしまう。
翌春この地域は大風に見舞われて多大の被害を蒙った。この台風により大岩園地の大木もキャンプ場の大木も倒れてしまい、その後エゾフクロウの消息は途絶えてしまった。
普段は見る機会がほとんどない野鳥たちとの出合い、そのひとコマひとコマはまさに一期一会である。
大沼に通うようになってからすでに久しい。いつ来ても四季折々に移り変わる美しい自然が迎えてくれる、来るたびに新しい出合いがある、感動を呼ぶ出合いが待っている。
だから大沼って面白い。

ノンフィクション　入選

座礁船の生涯―81年前の追憶

齊藤　満

夜明けにはまだ早い時刻だった。祖父母と川の字のようになって寝ていたところ、祖父は掛け布団を投げ出すようにはね起き、表に出て行った。私は時ならぬ事が起きたと感じ、祖母に縋りつき着替えさせられ二階から降りた。三歳の弟と一歳の妹は母の両脇に寄り添い、じっとしているのが、石油ランプの灯る障子から影絵のように見えた。

浜風が戸板を揺する音が聞こえる。昭和十五年三月二十二日午前四時四十分ころ、近くの警防団の櫓（やぐら）から半鐘が乱打され、サイレンが鳴りだした。

不気味な騒動になっている。祖父が「大変なことが起きたぞ！」と、同じことを大声で叫び、祖母は私の手を引き祖父の後を追った。わずか十米もない波打ち際の石垣の上に連れ出した。

目の前のすぐ沖に大岩があり、その右側の沖から、探照灯が浜や丘一帯に大きな円を描き投射している。祖父は船が岩礁に乗り上げたらしいといった。うめくような汽笛が止まない。次第に夜がしらじらと明けるにしたがい、驚きで度肝を抜かされた。巨大な船の「助けてくれ！」という汽笛であることが分かった。

浜の中ほどにある漁業組合の建物の下に、ぞろぞろと人影が動くのが、見えてきた。救助に向かうため警防団の分団長、吉田鉄五郎（三五）は約十人ばかりの団員を集め、陸揚げしていた、中船（ホッケやイワシ漁に使う）に、櫓櫂やロープなどを近くの倉庫から積み込んでいるようだ。

吹雪は止んできたが、浜風を防ぐ垣根から虎落笛のように、しのび泣きしている。五歳の私には、遭難という意味も分からない、ただ恐怖だけが体中をかけ巡り、ただ怯えている。恐怖と寒さで歯がカチカチと鳴っているのを感じた。

この日の日の出時刻は午前五時十八分で、祖父は寒さで幾度も家に出入りしては、状況を知らせている。祖母はこれから何事が始まるのだろうかと、うろうろしている。

彼岸の頃には北西の風が毎年のように吹き荒れ、季節風は止むことない。「寒さ暑さも彼岸まで」はこの地方には通用しないのだ。

そのさなかに起きたので、村あげての緊急事態となった。

村落では、漁船や小舟の遭難などはめったにないが沖が荒れ帰りの遅い時は、いち早く陸の位置を知らせるため、大きな迎え火（かがり火）をたくのが習わしになっている。薪が燃えだし始めた。救助に向かう準備ができたのか、中船は波打ち際に下がっている。

大波と小波が寄せるバランスがある。横波を受けないように一気に、寒波の中に乗り出した。村一番の男たちの命懸けの瞬間だ。

村中の人たちは石垣沿いで、無事に助けてほしいと手を合わせている。

村の象徴であるノコギリ状の大岩（横長で約七十二米）の、その右端、沖合い約五十米ぐらいに暗礁がある。遭難船はその上に乗り揚げたのだ。あまりにも大きく、船首は鉞（まさかり）型で日本の造船所で造られた船ではないと、話し合っている。

「でかいもんだのー」「ウダデもんだナ」（すごいの意）、「たまげた船だ！」まさに黒船来たるに似た驚きの声が改めて聞こえてきた。

中船は巨大な船の左舷に寄り添っているのが見える。もう一時間ぐらいたったのだろうか、船員たちを乗せて中船が戻ってきた。その勇ましい姿に新たな感激の声があがった。両手を挙げて万歳をする人、感極まって涙を浮かべている人。人を助ける場面を見て私の小さな心は、恐怖から感動に変わった。

四十六名のうち半数が、近くの可香旅館と斉藤旅館に分散して収容された。直ちに漁業組合の倉庫の中で、船長や運転士が座礁に至る経緯を語っているらしい。

船の名は「豫州丸」と呼び、小樽から横浜へ向けて航行中、降雪のため視界が悪く過って座礁したという。積み荷は石炭ということが、次第に伝わって来た。

時折「シタギ」というこの沿岸特有の現象が起きている。この方言は（青森南部、ヒタギ・夕立、秋田県）南洋でいうスコールのように一時的に海上を竜巻のようにやってくる気象だ。豫州丸は村のすぐ前の沖であったことが不幸中の幸いであった。左右にずれていたら救助はできなかったからだ。

幼児期に脳裏に刻まれたこのことが、その後の人生の海に対する恐怖感がつきまとう原因となった。

座礁船の真実を求めて

遭難時の新聞は同じような記事を掲載していたことを、図書館で閲覧して分かった。取材の新聞ごとに遭難場所、集落名、沖合の距離、サルベージ船の動向などが異なっていることに気が付いた。現場の真実を残すことの意義を感じた。しばしば孫引きの文章を見かけ、訂正することの難しさを体験してきたので、真実にまさる真実はないという執念が働いた。記憶を記録するだけでなく、資料の収集のために時間をかけた。

新聞記事は訂正をあまりしない。各社の記事を読みながら間

違いを見つけだしては、メモをとり続けてきた。

この船はどこの船

四月に入ってから、波が穏やかになってきた。流失した重油は波の背に乗りゆっくりと浜辺にたどりつき、檜山沿岸、松前郡白神岬周辺まで広がり損害は大きくなった。

翌日から函館の各新聞社が取材にやってきたが、当時の豫州丸の船体の写真が一枚も掲載されていない。昭和初期の国家の機密に属するための配慮なのか、不思議な気がした。

十年前まで豫州丸の写真は見ることはできなかった。（詳しくは後述）

当時、座礁船のことをどのように掲載していたか。八十一年前の新聞記事を紹介したい。

豫州丸沈没に瀕す

原口沖　乗組員全部避難

昭和十五年三月二十二日（日）神戸山下汽船所有貨物船、豫州丸（五七一一噸）は、三月二十二日午前四時四十分ころ石炭七千九百噸を積載し、小樽から横浜に向かう途中、松前郡**江良町**字原口沖合八百米の個所で暴風雪のため座礁、乗組員五十六名中二十六名がボートで直に上陸避難した。なお、翌二十三日午前五時サルベージ函館出張所から三保丸が救助に向かったが、現場の波が高く作業困難を極め、**吉岡村**に引き返した後、同日午前八時ころ、風雪がおさまり乗組員を無事救助することが出来たが、船体は沈没に瀕している。

この新聞記事は、別な新聞とは異なる内容も見られた。

昭和十五年三月二十三日　函館タイムス

石炭八千噸を積み

豫洲丸座礁　原口村沖合で

船底へ浸水、一部上陸

山下汽船所有豫洲丸（五七一一噸）は石炭七千九百トンを積載小樽より横浜へ向け航行中二十一日午前四時四十分頃松前郡原口村沖合**八百米**において風雪のため針路を誤り座礁二、三艙船底へ浸水したので午前六時頃に至り乗組員四十三名中一部は同海岸に上陸し目下陸岸と連絡作業中である、尚サルベージ救助船三保丸が二十一日午後さきに礼文で遭難した藤山汽船弘安丸を曳航したので同船の処置済み次第豫洲丸救助に急航の予定。

翌日の新聞は、【函館発】夕刊既報の如くであるが、午前六時乗組員は荒波を冒して避難、上陸現場は北西の強風で船体救助見込たたず「浸水に船体絶望」三保丸救助に急航した。

別な新聞は、豫州丸から午後一時二十三分発電によれば、原口村は目下電話の連絡なきため、詳細不明であるが村民総出で

避難上陸船員及び船体との連絡につとめている。
※各新聞社の記事は概要を掲載しているが、
遭難場所が、**江良町村**、松前郡**吉岡村**とあり、乗船者数が五十六名、四十六名、白神岬は崎、**比良上崎**など記載され、座礁した場所までの距離も異なっている。
歴史に残る文献であるので、自らの記憶を報道記事と照合し、確かな記録に長い時間を要したのはそのためであった。新聞報道は続いている。
同年三月二十七日（水）函館タイムス
浮くか沈む?海で哭く石炭
豫州丸の七千八百噸
石炭飢餓！燃料節約だの掛声で、家庭のストーブはいはでものこと、電燈までが暗くなっている今の御時世に、大枚七千八百トンという石炭が万斛のうらみをのんで、荒海の底へ沈められるという勿体無い話。
去る二十二日午前四時ころ、折柄の風雪に針路を誤って、松前郡大島村字原口沖合の岩礁に乗上げて、沈没が危殆にひんした神戸山下汽船、豫州丸（五七一一トン）は、函館から急行したサルベージ救助船三保丸の手をもって、目下船体の破損甚だしく侵水多いため、作業進まずこの分では結局沈没の悲運に陥るのではないかと、みられるに至っていたので、応急処置として、まず同船の積荷である石炭七千八百トンを揚陸することになり、発動機船数十隻が現場に向かったがこの内もし浸水が停止すればよし、もしこれが止まらない場合は七千八百トンの石炭陸揚による時間的危険もあるというか、七千八百トンの石炭は涙ながらに、原口沖の海底へ放棄してしまうことになるわけで、船体百五十万円を救うためとはいえ、みすみす七千八百トン時価約十二万円の重要資源を無にしてしまうことは、新しい話題であり「石炭よ生あらばなけ」とでもいいたいところだ。
村の二軒の旅館に収容された船員たちは、沖の波浪が収まると船に戻り、一部要員は安全を確かめ船に残るようになった。やがて波が次第にやわらぎ、ボートで通うようになった。
豫州丸の船体の長さは、百二十五米、沖に横たわる大岩と比較しても、その大きさが分かる。
ただ新聞紙上では、岩礁の乗り上げた?村人の中にも大岩に乗り上げたというのが、定説になっているが、それは間違いで、そうだとしたら、船首が大きく損傷したことになる。暗礁が正しく、また浅瀬にという記事もあるが、定義があって浅瀬とは満潮時でも人が立って見えるぐらいの深さをいうとある。
船が座礁した暗礁周辺は、赤く紫色になっており海流が常に渦を巻いている。不気味であり、村の漁師は言わず語らず近寄らない暗礁地帯だ。「君子危うきに近寄らず」を心得ている。
休日返上で船底の仮修理のため、日本サルベージ函館支社から、三保丸と静波丸の二隻は豫洲丸の船体に寄り添っている。救助船には十人ほどの潜水士が乗り込んでいるようだ。
急ピッチで応急処置が進んでいる。春が一足飛びにやってき

た。重油の流失で特産の海苔の採収が全く放棄の状態であり、ワカメ、コンブの生育、さらにはアワビ、ウニの被害は想像以上の損害をきたし、山下汽船との折衝が続けられた。海面は重油で沼のようになり、波頭が抑えられている。

海鳥は羽に油がついて飛び立つことができない。打ち寄せる波際に死骸が多く見られた。船長の苦悩は続き、船員たちの姿はうつむき加減でつらい日々が続いている。

近隣から連日船を見るために村落にやってきた。驚きの声が聞こえる。目前の沖の巨大な船を見ることは、史上稀な出来事で、最初で最後であろう情景は語り草になった。

函館新聞　昭和十五年四月二八日

遭難船の流油で

海苔の被害甚し

大島村原口の大損害

先月二十二日午前四時四十分松前郡大島村大字原口村において遭難せる豫洲丸（五七一一噸）事件についてこれが被害取調べの結果このため同地方面にあたへた被害は船体破壊によってピッチの油の流出その主要なるもので五百噸程もあったものが約四百噸の流出を見、文字通り油の海と化し、これがためその近海に繁茂していた海草の被害は実に甚大なもので就中同方面の海苔の被害は同地方の重要海産物で重大なものとされている。然し約五割は収穫ずみで残る五割は製品としての価値を失ったわけである、（中略）特に応召者家族が従事していたものでこの方面にあたへた被害も又時節柄遺憾とされている、海面の油の面積は何分比重の関係で檜山郡上ノ国村から松前郡**比良上**崎にわたる広範囲でその損害は目下取調中である、これが実地に調査した人々は道庁からは岡村技師、檜山より松田技手、支庁より金子技手の三人であった（中略）船長は中島氏で船体の救助作業は目下サルベージと山下側と荷積主が協力して・・・割合困難ではないかと見られるが八月中には完全に救助される見込みであるが、万一九月に入るとこの方面の天候からしてやや難と見られているが、これに積まれた石炭の多くが粉炭のため海底の鮑にあたへる被害が重大視されている。

村に自転車も二、三台あるだけで、リヤカーも少なかった。そんなところに小樽からハイヤーに乗った偉い人がきた。山下汽船小樽支店長石原潔であった。船側と村の三役は、積み込まれている石炭の陸揚げ場所などを決めた。石炭を運搬できる発動機船、櫓櫂で運べる船など相当数がこの作業に当たり、油の海面を行き交いながら村はずれの場所に運搬船が数を増してきた。

サルベージ側の応急修理の進捗と豫州丸との船体放棄まで事態が切迫していたが、再就航できる見通しが話題になってきたのだ。

函館新聞　昭和十五年六月二十日

豫州丸離礁成功
明日函館に廻航修理

今早春石炭輸送の途中風雪に、針路を失って松前郡**吉岡**沖合に座礁遭難した豫州丸は四月上旬来当市地蔵町山崎善平氏の手によって船体引上げ作業を進めていたが、十八日完全に離礁したので、二十日夕刻までには函館港へ廻船修理の上、再就航することになった。※地蔵町（現在の豊川町、山崎氏は日本サルベージ函館支店長？と理解される）尚、遭難当時同船に積載していた石炭七千トンは一時海中投棄を予想されたが四千トンを揚陸したものの約二千五百トンは海潮に流失した。残余の三千トンは尚船内にあり函館廻航後この揚陸をすることになっている。

ついにこの日が来たのだ。被害は檜山支庁管内の沿岸、松前郡下の一帯に及んだが、事故者がなかったことは幸いであった。この新聞が発行される前に、船長の計らいで、船の見学が許可されたのだ。

石炭輸送に使われた舟や艀で、約三十人が一組になり船内の指定された甲板、船艙などを一時間ぐらい見学することが出来た。

私は祖父に手を引かれ、船の左舷からタラップが何本も下げられ、直角の長い船体から海面を見ないようにして船員の手を借りた。船は微動だにしない、船体に波が打ち寄せている、船体の吃水部分は赤紫の色をした岩礁独特な色と区別ができない、深い海と暗礁の間は青く不気味な渦巻きになって、川の流れのように動き、めまいを感じた。

案内されたのは、大きな船艙から石炭が陸揚げされた後の船艙で大きな広さとなって、海水の溜まった船腹に、潜水夫が四，五人休んでいた。体はロープでつながれ命綱と太めの管が巻き付いている。潜水服に酸素を送る管だという。体が左右に動き出し、反動をつけて船底に潜っていく。宇宙人のようだ。子どもの眼には別世界の空間であった。

私は海に対する恐怖感がさらに深まった。同年代の子どもたちは私より反応が少ない。やはり生まれつきの意気地なしなのだろうか、時が過ぎてもなにかの障害者として生まれてきたのだろうか。

陸に戻る時間がやってきた。私は祖父にすがりついていて案内の乗組員の手を借りてタラップから艀に乗り移る動作も、幼児だが周りから度胸も試されているようであった。改めて船体に打ち寄せる波は岩に打ち寄せるような、ひたひたではなく、太鼓を打つような音を出している。艀は揺れ動いている。乗り移るタイミングとバランスを乗組員が巧みに抱きかかえてくれた。

さらば豫洲丸

六月十八日午前八時ごろ、かねて離礁した船は、三保丸と静

波丸の二隻に曳航され、いよいよ別れの時が来た。函館ドックに向かうようだ。村人が波打ち際の石垣の上に続々と集まってきた。別れの汽笛が二、三度鳴った。左舷には乗組員が整列をしている。「帽振れ」が始まった。まるで軍艦の出港時の行事のようだ。礼儀正しい姿がひと際目に焼き付いた。座礁から八十八日目に動き出したのだ。名残尽きない思い出が脳裏に刻まれている。

夜明けを待って救助に当たった、警防団分団長たちの命懸けで救助した誇りが、別れをつらいものにした。鳥も通らぬ、陸の孤島と揶揄された村落の人たちは、この地に住み着いた歴史の中で人情の厚い風習が根強いところだ。

サルベージ船が豫洲丸を曳航する太いロープが見える。右舷に松前大島、船首の先には松前小島がよく見えている。中島船長と一等運転士の原田義雄の心境は鉛のように重く切ないものがあったに違いない。船員たちは宿の近くの人たちに洗濯などの世話になった。いつか船影が左方の視界から消えた。ぽっかり穴が空いたように、いつもの場所に船の姿が消えもの寂しい海になった。

中島汀蔵船長の涙

古来、戦国の武将、将官も、船長も「指揮官孤独」だと、よくいわれてきた。指揮官の上に指揮官がいないのだ。

長い間会う機会がなかった、縁者で現在、奈良県奈良市に住む二歳年下の斉藤一衛氏と三年前に約五十年ぶりに会う機会があった。長兄と姉の法事をすませ午後に函館を発つので、会いたいという電話であった。ホテルに迎えに行ったが、早い時間なので会う場所がない。この際市内港町の津軽海峡フェリーの待合所に案内した。ふる里の話をするには、海が見える函館湾がよいと判断した。

つもる話は豫洲丸のことであった。同氏の家の隣が、遭難時の船長たちの宿、可香旅館であった。玄関に出ていると、たびたび中島船長が抱き上げてくれたという。船長にも同じ年頃の幼児がいたのだろうか、同氏の父は軍隊に召集され傷病後に逝去した。父のぬくもりを知らないで育ったので、うれしかったと語る。束の間の再会であったが、うれしかった。

中島汀蔵船長は、就職の世話をしていたのだ。この地方はイカ釣り漁で、家族の多い家では、分家して土地を得て、船を持っても陸揚げ場も制限される、定着して村落に暮らしていくことは至難の業であった。あたかも昭和恐慌の時代で、小学校を退学して働きに出るという、親に仕送りすることが親孝行だと村を出た話を耳にしたことがあった。

若い女性は、伝手で奉公に出た。仙台以北の北の都、函館へ住み込み女中や、酌婦として中には芸者などの道を歩まなければならない境遇にあった。中村船長は温情を受けた村落のために就職の話を薦めた。

現在（令和三年）縁者の旧姓東館カツヨさん（九五歳）は、大阪の耳鼻科医院へ、他の二人は、船長の奥さんが経営している神戸市須磨区「中村産婦人科医院」に就職する事が決まり村を後にした。十五、六歳の少女の旅立ちであったが、戦争が激しくなり昭和二十年の終戦まで勤めたという。

今年八月の初めにカツヨさんに電話で当時のことを再確認した。三人とも私の家から二百メートルも離れていなかった。

私の生まれたのは昭和十年、国内外に大きな異変が起きていた時代であった。

○昭和九年一月、旭川の第七師団満州派遣
○昭和十一年二月二六日の二・二六事件
○昭和十二年七月七日の日支事変勃発
○昭和十三年七月七日日中戦争勃発
○昭和十四年五月十一日ノモンハン事件

時代は軍靴の音が次第に高くなり出してきた。その中にあっても同郷の三人集まれば「豫州丸」の話に行きつくのだ。友情を深めるための潤滑油となった。そして、船の名前は合言葉になっていた。

海員審判の記録

豫洲丸は左記のとおり海員審判を受けていた。

官報第四三〇六号

昭和十六年五月十九日　月曜日

○判決

海員審判所裁決　東京、大阪、門司及函館ノ地方海員審判所ニ於テ言渡（中略）

豫州丸　座礁の真実は「汽船豫州丸乗揚ノ件」大阪海員審判所決録

海員審判所裁決録

汽船豫州丸乗揚ノ件、昭和一五、一二、七

大阪、　被審人　中島汀蔵　同　原田義雄

場所—渡島国沿岸

損害—損傷

原因—降雪中臆断航行

【主文】被審人中島汀蔵受有甲種船長免状ノ行使を二月停止ス

被審人原田義雄を譴責ス

【理由】被審人中島汀蔵ハ、甲種船長の海技免状ヲ受有シ神戸市に船籍港を定ムル、宇和島運輸株式会社所有、汽船（中略）豫州丸に船長として、又被審人原田義雄は、昭和十五年三月二十一日午前九時五十分、小樽ヲ発シ横浜ニ到ル航行ノ途、同日午後十一時五十四分（測定機四示数百十海里）、奥尻島稲穂燈台ヲ東に転ジ、一時間約九海里、全速力デ進行中、船長は翌二十二日午前零時当直ニ服シタルガ、当時西北西方ノ軽吹キ降雪断続ノ天候ナルガ、所定ノ進路及ビ速力ヲ保持シテ続航シ同二時五十五分、江差・鷗島燈台ニ並行（中略）松前小島燈台

ノ閃光ヲ描キ、一等運転士手楠直俊ト当直ヲ交代シ（中略）進行シタルトコロ同時三十八分突如船底ニ衝動ヲ感ジ急遽全速後退及右舵一杯ヲ令ジタルモ、同時四十分、原口部落沖合ノ岩礁に乗揚タリ。当時天候は降雪ニテ展望遮断セラレ北西ノ軽風吹キ潮候ハ落潮ナリ。

越エテ六月十日、午前十時浸水水船ナリタル船体は、日本サルヴェージニヨリ浮揚セシメ広島県御調郡因島工場船渠ニ入渠ノ調査底部外板ハ全部ニ渡り損傷（中略）。

本件乗揚ハ前述ノトオリ船長ノ運転士ノ船位ヲ妄信、確認シナイタメ・・（中略）。トノ裁決。

参考までに、運転士が航海士となったのは、昭和十九年船舶職員法の改正により、また、海員審判所は大阪、函館、長崎に設置、海難審判所になって平成二十年函館、仙台、横浜、神戸、広島、門司（那覇支所含む）長崎の各地方海難審判所が、それぞれの管轄地において発生した海難の審判を行う。

現在、国土交通省に置かれた特別の機関である（函館は中央ふ頭の合同庁舎内に）。

折に触れ今も語られ続けているが、あの日から今年で八十一年が過ぎた。正確さと真実を残さなければ意味がない。各新聞掲載記事の誤りは、この審判で明記された。例えば、函館ドックに曳航されたという豫州丸は、広島県因島であったことなど新しくメモを書き替えることができた。

豫州丸が再び村落の沖に

翌年の昭和十六年七月の初め、修理を終えた豫州丸は、再び小樽と横浜を航海することになった。ある朝、村落の沖に豫州丸が現れたのだ。目を疑った。別れてから一年余、村民は歓喜に沸いた。なんということだろうか。浜の石垣に人々が群れた。寒風吹きすさぶ中で、救助に当たった人たちや、特に宿の近くの人たちは感涙した。

古来「かけた情けは水に流し、受けた恩は石に刻め」という格言がある。豫洲丸は忘れていなかった。あの暗礁より．陸に近いところまで巨体が再現したのだ。

再会の喜びを汽笛が鳴らしている。「その節はお世話になった・・」感謝の汽笛だ。私は泣いた。曳航された時の別れの辛さが、喜びの感動になっていた。

やがてボートに乗った船長たちが、浜に着いた。もろ手を挙げて歓迎している人たちに迎えられた。村落の三役には事前連絡されていたのだが、村社境内には正装の氏子たちが待機していたのだ。

大きな包み二個が降ろされた。それをリヤカーに乗せて原口川沿いの山里の八幡神社に向った。ここからドラマが始まった。

すでに裃の正装した神社氏子たち。五百有余年の歴史ある村祭りは、七月十五日が例大祭だが、その日に間に合わせていたのは、大きな「幟」二旒（りゅう）であった。中村船長の意向と

石原潔支店長の上申で、本社のある神戸の旗店で作製されていたのだ。

山下汽船の社長は日本の海運界で海の偉人といわれた山下亀三郎である。

神社の屋根より高い幟は大きく、境内の両脇に掲げられた。「奉納　村社八幡神社　主願　山下汽船会社　豫州丸船長、大里勇哉」そして隣村の江良町村八幡神社の神職の松前神楽の伝承人、佐々木勇作が祝詞を捧げたあとに、大里船長を囲み記念撮影となった。

船が航行の時間を割いて村落の沖に停泊したのには、その訳があった。航海の安全、豊漁の祈願する村人の信仰心を、中村船長が滞在中に村人の信仰心が篤く、座礁時に命懸けで救助したことへの恩返しであり、その意志を後任の船長に託したのであった。

村社の祭神は、「誉田別命（ホンダワケノミコト）」、十五代応神天皇を祀り、神仏習合時代には、「八幡大菩薩」と呼ばれた。村社に参席した三十四人の中に私の父もいた。戦後から氏子総代人となり、神楽の伝承人として生涯を終えた。平成三十年三月、松前神楽は国の重要無形民俗文化財となり、村社は約三百五十年の歴史を今に伝えている。

父が残していたA四判の記念写真をいま私が保存している。記憶にある人たちばかり、今年、令和三年九月現在、縁者の猩々栄一さん（九十歳）当時小学校五年生、ただ一人健在である。

行事は終了した。大野船長は浜で待つボートに乗った。大勢の人が見送るなか、汽笛が鳴った。別れの時が来たのだ。黒い煙を吐きながら船は大きく針路を北西にとり、奥尻島の方向に船首を向けた。乗組員が手を振っている、この情景は私の脳裏に鮮やかに刻まれ、セピア色になっていない。

元船乗りの一人が「ホスぺ」かけたぞ！といった。この単語は、フルスピードのことで、船が速力を上げたことを意味する。

別れの辛さが二年目にまた再現した。豫洲丸は自力で航海した姿を披露したのだ。晴れがましい船影に村民は安全航海を念じた。

その年の七月十四日の宵宮祭から、幟ははためき、あの日から八十年の歳月が流れた。

横浜から小樽までの距離は七三二マイル、八ノットで航行したとき、三日と十九時間ほどかかる。小樽港の手宮線高架桟橋に岩見沢駅から幌内線に入り、幌内炭鉱からの石炭貨車は、月に三、四回の航海に合わせて積載の効率的な運行をされていた。

船を見送ってから約四か月後の昭和十六年十二月八日、太平洋戦争（大東亜戦争）が勃発した。国籍不明の潜水艦の攻撃が始まり、豫州丸の航海は終了した。

豫洲丸の生涯

豫州丸は旧名ニール・ニーセン、ノルウェイ国（面積は日本と

同じである）の西部、ベンガル港に船籍を置く、大正五年九月、北米のワシントン州北西部にある同州最大の都市シアトル、タロマ造船所で進水した一番船、（アメリカの首都ワシントン（DC）は別）大正十五年八月、売りに出された同船を、四国・愛媛県の宇和島運輸（堀部社長）と山下汽船（山下亀三郎社長）の共同購入となったが所有権は宇和島運輸で運用は山下汽船へ傭船となる。

やがて船は伊予の国（豫洲は伊予の異称）その名をとり、同年八月十四日、豫州丸と命名された。外国航路に就き、その後、樺太（サハリン）から本土への木材運搬船にもなった。太平洋戦争に入り、陸軍の徴用船になり、昭和十八年九月十七日、佐賀沖に集結し、門司出港後に木曾丸等百九十五船団を編成され、台湾・基隆（キールン）に入港したあと、馬公（マーゴン）入港を経て、南洋への物資輸送にあたる。

さらに昭和十九年十二月三十日「ヒ八六船団」が再編入され、豫州丸は生ゴムとボーキサイト（アルミニウムの鉱石）を積載して昭南（シンガポール）を出港。油槽船四隻、貨物船六隻は日本の継戦にとって重要な物資を満載し、昭和二十年一月九日正午、護衛艦の到着を待って、サンジャック、仏印（ベトナム）を出発して門司港を目指した。

練習巡洋艦「香椎」（司令：渋谷紫郎少将）海防艦五隻に守られ、一月十二日午前六時四十五分ベトナム、キノン湾を出港、午前十一時頃輸送船団は、米第三機動部隊の搭載機に発見され、午後一時四十分には約百機の攻撃を受け、正午、最初に豫州丸が攻撃されて沈没した。戦死者四十五名、便乗者五名は無念の最期を遂げたのだ。

沈没をまぬがれたのは、海防艦三隻だけであった。日本商船隊の総決算では莫大な損害を受けたのだ。

開戦時+建造船舶　四千二百二十五隻
戦時喪失三千百二十九隻
敗戦後運航可能船舶　五百八十八隻
判明している船員の戦死六万六百七人
（日本殉職船員顕彰会調べ）（トン数略）
陸海軍への徴用船のみとした。

サルベージ船の二隻

函館港に係留している三保丸と静波丸は、軍の徴用船になり、南シナ海で商船や幾多の軍艦の救助に当たっていたが、三保丸は昭和十九年九月十二日、フイリピン・セブ島付近で空爆により沈没。また清波丸はジャワ島現在のインドネシア、ジャカルタで「バタビア沖海戦」で船体は保たれ戦後、昭和二十一年七月二十一日、連合軍に接収された。

私は生後六年の間に、村の沖で巡り合った三隻の船の思い出を追憶しながら、船の生涯のはかなさを感じ、むなしさだけが残った。

小樽の偉い人、支店長の石原潔は（山下社長の同県人で船頭から認められた人）、6年間の勤務後の昭和十八年に東京支社の副長に栄転し、奥さんと子息の二人、長男、愼太郎氏、次男裕次郎は、天下の山下亀三郎社長の別邸で伊豆に少年期を過ごした。俳優・裕次郎は私の一歳上であり、五十二歳に病で没した。父の石原潔は昭和二十六年、五十一歳で世を去った。私の村から小樽まで約二百八十キロの沿線の小樽に滞在していたのだ。子息は豫州丸の座礁のことは知らない。

十年前に、宇和島運輸からは社史を、商船三井（山下汽船を合併）からは船の写真を送ってもらった。当時の新聞記事を送り、私の身元が判明したからだろうか。

なかでも、小樽、第一管区海上保安本部海洋情報部・海の相談室から、海図に基づく資料を提供していただいた。

八十一年前の記憶を記録に残し、祖父が没して七十七年、私は執念の宿題をようやく仕上げた気がする。

令和三年の秋の夜長に「波濤を越えて百年」宇和島運輸の社史を再読し、老涙が頬を濡らした。村落は「限界集落」となり、砂浜が浸食されて、波消しブロックだけが村落を守るふる里となった。

豫州丸、三保丸、静波丸は南洋の沖で生涯を終えたが、三隻の写真が私のもとで生きている。あの三隻が村落の沖にいたことに奇跡を感ずる。私は永遠に忘れない。

終り

参考文献（資料提供含む）
第一管区海上保安本部（海洋情報部）
商船三井（社史編纂室）（東京）
宇和島運輸（社史編纂室）（四国）
函館市中央図書館（資料室）
松前町史
ＰＣ（検索）

ノンフィクション　佳作

勤続三六年のはじまり

佐藤　健

昨年からの新型コロナウイルスの感染拡大が続いて、東京・北海道を含む九都道府県に緊急事態宣言が発令中の五月二一日に防衛省から小包が届いた。

小包の中身は、第三六回危険業務従事者叙勲（瑞宝双光章）の賞状と勲章である。受賞の内示は三月中旬に書面で通知されており、四月二一日には新聞発表があった。関係各所から祝電が届き、知人からメールや電話を戴いたものの、実際に手元に届くまでは実感が湧かなかった。賞状はＡ２版の大きさで、勲章は小さいながらも重量感のあるものである。本来であれば、この機会に天皇陛下への拝謁の栄誉を賜るはずであったが、コロナ禍で昨年に続き中止となった。

三六年間勤務した海上自衛隊を満五五歳の誕生日で定年退職してから六年が経った。函館に家を買って地元の造船所に再就職している今、修理に入っている灰色の自衛艦を見て思うのである。

「よく、あの鉄の塊の中で何年間も勤務したものだ」

そして、同時に思う。私に今回の叙勲を受ける資格が本当にあったのかと。

高校を卒業して、岩手県の田舎町から神奈川県の横須賀市に向かったのは、一九七九年の三月下旬だった。その日の朝、母親に連れられて近所に挨拶をし、祖父母と妹に見送られて父親の運転する車で最寄り駅に向かった。特急列車に乗り換え上野駅に着くまでにはかなりの時間がかかった時代である。昼の弁当を食べたであろう。私の隣の座席には母親が座っていたはずである。でも、当時四一歳の母親の横顔どころか、あの日の行動が思い出せないのである。唯一の記憶は、品川駅で京浜急行線に乗り換える時に二人でオロオロしたことと、降り立った三崎口駅が山の中で何もない駅前に驚いたことぐらいである。前年に流行した山口百恵さんが歌った『横須賀ストーリー』のイメージとの違いに大いに戸惑った。

翌朝、宿泊したホテルに迎えに来た青色の海上自衛隊の大型バスに乗って、海上自衛隊横須賀教育隊の門をくぐったのである。到着後すぐに身体検査が行われ、午後に合格結果が発表された。それを確認してから母親は帰ったはずである。しかし、そ

の日の昼食やどのタイミングで母親と別れたのかも記憶にない。気が付いた時には一人だった。もっとも親が同伴している者は少なかった。

私は、『第四期一般海曹候補学生』として採用され、教育隊で五か月間の基礎訓練を受けることになったのである。

私の手元には、何度となく全国を転勤する中でも捨てずに持ち歩いたB5判サイズのノートがある。横須賀教育隊での五か月間の訓練記録である。記録といっても、その日の訓練や生活で考えたことや感じたことを書く雑記帳で、毎日担当班長に提出しなければならなかったものである。

そこには、一九歳だった等身大の自分が記録されているようで、今までなかなか読み返すことができないでいたものである。

今回の受賞を機に初心に帰るべく、これからページをめくって、四二年前の自分に会いに行こうと思う。

●一九七九（昭和五四）年三月二八日（水）

―自分はできれば陸上勤務につきたいと考えている。みんなのように泳げるようになれるか心配です―

この日が海上自衛隊に正式に入隊した日である。あの日のことは忘れられない記憶で、午前中に入隊式が行われ『服務の宣誓』をしたのである。

「私は我が国の平和と独立を守る自衛隊の使命を自覚し（中略）事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂に務め、もって国民の負託にこたえることを誓います」

午後はいきなり水泳能力測定が行われた。

「服装、海水パンツ、サンダル、雨衣着用。隊舎（居住する建屋）前に整列」

午後の訓練が始まる一三〇〇時（午後一時）に号令が掛かったのだった。隊舎内の居住区と呼ばれる二段ベッドとスチール製ロッカーが詰め込まれた部屋に居た私たちは、急いで指定された格好に着替えて外に出た。雨の降る中で整列して点呼の後、駆け足で屋内プールに向かったのだった。

プールの中は黄色っぽい照明で塩素の匂いが強く立ち込めていた。学校では、身長の低い者順に並んでいたが、自衛隊では身長の高い順に並んだ。一七三㎝の私は前の方の位置である。

「ヨーイ、テーッ」（用意、撃て）

の号令で前から二人ずつ飛び込んで平泳ぎで五〇m先を目指した。あっと言う間に私の番がやって来て、笛の合図で飛び込み台に立った。水面を覗いただけで足が震えた私は泳げなかったのである。山間部で生まれ育った私は川で遊ぶことはあったが、川は魚を捕る場所だった。大きな石の下にいる魚を素手で捕まえることが出来た。覚悟を決めて足から飛び込んだが、二回目の自由形とともに記録は一mと記された。水泳は海上自衛官にとって必須技能であることをこの時初めて知ったのだった。

●四月四日（水）

―今日は私の人生において最も長い日だった。自分は赤帽に選ばれてしまった―

赤帽とは、水泳能力が最低限の基準に到達していない水泳未熟者を言う。水泳訓練の際は識別できるように赤い水泳帽を被ることからの呼称である。私の他にも四人いたが、泳ぎ方や息継ぎが悪くて五〇ｍを一分以内に泳ぎ切れない者たちで、全く泳げないのは私一人だけだった。

この日から赤帽訓練（特別訓練）が始まったのだ。その日の訓練が終わって夕食までの時間が赤帽訓練に充てられる。訓練に対する記述はこの後も何度も出て来るが、他の四人は早い時期に赤帽を脱して私一人の集中特訓となった。プールの中央部は足が付かない水深があり、それを考えただけでも恐怖で息苦しくて呼吸が出来なくなった。それでもコースロープが張られている時はまだ良いが、コースロープの無いプールは果てしなく続く大海原で泳いでいる感じで恐怖でしかなかった。

「はいはい、顔を水につけて」

日替わりで教えてくれる班長や体育教官たちが長い竹竿でプールサイドから私の頭を小突く。苦しくなってコースロープにつかまったり、プールサイドに近付こうとすれば、その竹竿で阻止する。まだ夕食前だったが、プールの水を飲んでお腹はパンパンだった。

●四月五日（木）

―一番つらいのは、腕立てが他の者のように出来ないことである―

誰かが集合時間に遅れたり、ミスをした場合には班や分隊単位で連帯責任が問われた。

「前ささえ用意」

班長の号令で、腕立て伏せの姿勢をとる。班長のカウントで顎が地面に着くまで腕をしっかりと曲げる。何回やるかは班長の気分次第だが、体重八〇キロの私は途中で腹ばいになってしまう。苦痛に歪む仲間の横顔を見ながら連帯責任から脱落した自分が情けなかった。

●四月六日（金）

―初めて手旗を経験した。腕が痛かった。この世の地獄を感じた―

この日から手旗信号の訓練が始まった。手旗信号は、視覚で通信を行う手段であり海上自衛官にとって必修科目である。右手に赤旗、左手に白旗を持ち、一五種類ある原画（基本形）の一～三つを組み合わせて文字の形を作る。相手から見るとカタカナ文字になるように組み合わされている。

最初はその一五の原画を覚えさせられる。一つの原画を気の遠くなるほど繰り返して、体に叩き込むのである。その後に、イロハ四八文字を覚えてゆく。これもまた一つの文字を気の遠くなるほど繰り返して体に覚えさせる。最後の仕上げがイロハ連続の発信である。航海職種の担当班長が吹く「ピッ・ピッ・ピッ」の笛に合わせて手旗を動かす。真夏の炎天下でこれもまた気の遠くなるほど繰り返された。いつまで続くかわからない恐怖が地獄に感じられた。今でも少し練習すれば発信は出来るよ

うに思うが、受信はなかなか難しいものである。

●四月一八日（水）

―今日、生まれて初めて給料をもらった。お金を得ることがこんなにも厳しく、またうれしいものであったとは―

よく覚えていないが、総支給額が八万円ぐらいだったと思う。所得税などの源泉控除のほか個人で購入した運動靴やジャージ代を引かれると手元に残ったのは五万円ぐらいだったろうか。現金支給で班長から給料袋を手渡されたが、明細書と現金を確認させられた直後に一万円未満の端数を手渡され、残りは班長預かりとなった。班長が厚生隊に行って各人の分を貯金してくれるのである。制服や作業服のほか、パンツを除く下着や靴下も支給され、食事も支給されるので外出が制限される生活ではお金の心配はいらなかった。私はしたことがないが、仕送りなどの特別な理由があれば、班長が貯金をおろして送金手続きもしてくれた。

「分隊は家族、分隊長は父親、分隊士は母親、各班長は兄だと思え」

と教えられたが、分隊事務室への入室要領が複雑で簡単には出入り出来ず、貯金をおろすお願いなど出来なかった。

●四月二八日（土）

―今日、五〇〇〇ｍのタイムトライアルが行われた。時間二六分〇八秒―

教育期間中は、とにかく走らされた。八〇キロで入隊した私は、ここで運動らしいことをして来なかった高校時代のツケを払うことになった。〇六〇〇時（朝六時）に起床ラッパの放送が隊舎内に流れる。

「総員起こし。服装、短パンＴシャツ、隊舎前に整列」

当直班長の指示で一日交代の当直学生が号令を掛ける。各人は一斉に飛び起き、掛け布団代わりの毛布を簡単に畳んで指定された服装で居住区を飛び出す。

余談であるが、入隊式の二日前に着隊した夜に私はパジャマに着替えた。実家では一度もそんなものは着たことがなかったが、都会に行くのだからと母親が持たせてくれたものである。そこに班長が来て言った。

「自衛隊ではパジャマは着ないぞ」

周りを見れば誰もパジャマに着替えている者などいない。その時私は思ったのだった。

「なんだ、みんな田舎者なのか」

隊舎前に一個班一五名の五個班が横隊で整列する。

「右へならえ、直れ、番号」

当直学生の号令で、最前列の第一班が一人ずつ番号を発声する。

「いち、に、さん・・・」

人数を確認した当直学生が当直班長に挙手の敬礼をして報告する。

「第二一分隊、総員七五名、事故なし、現整列員七五名」

ここまでが、起床してから五分以内である。そこで体育班長の登場である。体力強化専門の班長がいたのである。口髭があり、小柄だが引き締まった体で一番若い班長だった。職種はヘリコプターの機上整備員である。雨の日以外は、毎日毎日その班長に追い立てられながら走った。

「野武士のように走れ」

それが体育班長の口癖だった。並んで隊列を組んで走るよりも本能の赴くままに各自が全力を出し切って走ることが求められた。

土曜日の昼食前の五〇〇〇ｍのタイムトライアルは毎週続けられ、速い者は一五分台で走り抜けた。

●五月一日（火）

―今日の陸警（陸上警備）訓練、もうライフルなんか見たくもない―

正式名称『口径３０Ｍ１型小銃』である。重量四・三kgの小銃は、太平洋戦争時にアメリカ軍が使った銃である。両手で胸の前に保持して走らされ、保持している腕がだんだん下がってくると陸警班長の怒声が飛ぶ。

「銃の角度は三〇度」

体の中心線に対して三〇度の角度で保持し、胸から一〇cm離さなくてはならない。腕に抱えることは許されず気の遠くなるような時間を走り、続いて匍匐前進の訓練に突入した。

海上自衛隊の匍匐前進は次の三通り。

第一法　上体を起こして、片手を支えにして両足で地面を蹴って進む。

第二法　上体を低くして、片腕を支えにして両足で地面を蹴って進む。

第三法　地面に腹ばいになって、両手で地面や草を掴んで、少しずつ体を前に進める。敵はすぐ目の前だ。

●五月二日（水）

―今日、初めてカッターを漕いだ。班長がケツの皮がむけると言ったが、それで自分のケツの肉も少しは落ちるだろう―

なんて能天気なことを書いているのかと自分でもあきれるばかりだ。初日で、少し漕いだ程度だったに違いない。

正式名称は、『短艇』である。全長九ｍ、重量一・五トンの木造船である。左右六人の一二名で漕ぎ、舵を操る艇長と全体の指揮をとる艇指揮で編成される。櫂（オール）は長くて太くて重い。池でボートを漕ぐ光景を想像したとしたら全く違うものである。椅子は横に並べられた厚い板であり、足掛けに足をふんばって背筋を使って体全体で櫂を引く。引き切ったところですばやく腕を前に突き出す。動きが合わなければ後ろから背中を突かれたり前の者の背中を突くことになる。何よりも櫂がそろわないとガチャガチャにぶつかって漕げなくなるのだ。この動作を気の遠くなる時間繰り返す。

短艇訓練は、船乗りとしての基本であるシーマンシップの涵養と個人の体力、チームワークの錬成を目的とする。

漕ぐ一連の動作を繰り返す中で、椅子と臀部が接触する状況が生まれ、尾てい骨周りの皮膚が剥けるのである。何とかそれを防ごうとタオルを当てたり、摩擦軽減のために海水パンツを重ねてはいたりしたが効果はなかった。短艇訓練があった夜は、二二〇〇時の消灯前に班長が各人のベッドを回って順番に皮膚が剥けた個所に赤チンを塗ってくれた。その日はみんなうつ伏せで寝たものだった。ようやく傷口にカサブタができても次の短艇訓練で剥がれてしまうことの繰り返しだった。

●五月二一日（月）

―今日から衣替え、白の制服になった。はやくこれを着て岩手に帰りたいなあ―

私が採用された『一般海曹候補学生』は、二年間の教育を経て三等海曹（下士官）になるものだった。制服も一般隊員のセーラー服ではなく、金の七つボタンが付いた丈の短い詰襟だった。古い映画で見た予科練の制服のデザインである。実は私は入隊して制服が支給されるまでそれを知らなかった。テレビで見た海上自衛隊のセーラー服に憧れていたところもあった。

冬服は二着支給されたが、夏服は冬服と同じデザインで白のものと略衣といって開襟シャツ型のものが一着ずつだけあった。着用機会が多い略衣の私物を隊内の売店で購入した。白はすぐに汚れるため毎日のように洗濯してアイロンをかける必要があった。限られた休み時間で限られた洗濯機とアイロンの争奪戦が繰り広げられたことは言うまでもない。

確かに白の七つボタンの制服は格好良く、早く帰省して祖父母にその姿を見せたいと思ったものだった。

余談になるが、海上自衛隊では制服着用時は傘をさせない規則がある。その代わりに冒頭に記した『雨衣』が支給される。確かに艦上で傘をさすことは安全上も問題がある。

「いいか、夏服の下には柄パンは履くなよ」

班長からの指導である。外出先で突然雨に降られた場合、下着が透けて最悪の事態になるのだ。下着が透けないように『ステテコ』も支給されていたが、履く人は少なかったように思う。ステテコはオヤジのイメージが強過ぎた。

●六月七日（木）

―今日は自分の人生の道が決定した。やはり自分の道は経理しかなかった―

入隊後すぐに知能検査、性格検査、適性検査が行われた。そこで導き出された結果が事務職（経理・補給・給養）だった。残念ながら密かに狙っていた航空管制官は、示された選択肢にはなかった。できれば艦艇勤務になりたくないと思っていたので、陸上勤務の可能性が高い経理職を希望していたので、一応希望どおりだったと言える。海上自衛官になって艦艇勤務を嫌うとは言語道断である。

●六月一〇日（日）

―ついに五〇ｍを泳ぎ切った。クロールで五〇ｍを泳いだ―
日曜日は、ほとんどの者が朝から上陸（外出）しているが、体力が基準に満たない者や売店の裏でタバコを吸っているのが運悪く見つかった者たちは隊内で留守番である。もちろん私の場合は前者の理由であり、この日の午前中も一人でプールに向かった。ずっと赤帽訓練を続けていたが、息継ぎが出来ずに未だに五〇ｍにたどり着けないでいた。指導する班長は言う。
「肺の空気を全部吐き出せば、あとは顔を横に向けて口を水面から出すだけで自然に空気が入って来る」
両腕を交互にパタンパタンと水に打ち付けるだけではスピードが上がらず、口を開けた瞬間に水が入って来た。どれほどの量のプールの水を飲んだか知れない。
「天井を見るようにすれば息が楽だよ」
誰かが言っていたのを思い出した。思い切り首を右に捻って天井を見るようにした。息を吸っても水が入って来ない。それを繰り返しているといつの間にか対岸の赤い五ｍラインの上を通過していた。だが、時間がかかり過ぎるため赤帽訓練はそれからも続いた。
●六月一三日（水）
―本日防火実習、火に向かって進んで行く恐ろしさ、あの熱さ。今思い出しただけでも足がすくんでしまう―
艦内の火事を消す訓練である。屋外に設置された丸タンク（高さ一・五ｍのフタのない大きな空き缶の形）や艦の機関室を模したコンクリートの建屋の火を消すのである。剣道の防具の垂（たれ）のような素材の難燃性の防火衣を着て顔はタオルで覆っただけの装備で、消化ホースを抱えて火に突撃するのである。ホースの先の万能ノズルから出る高速水霧で空気を遮断して火を消すのである。特に、機関室の足元のグレーチング（金属製のすのこ）から吹き上がる炎を消すときは、炎から逃げたい気持ちを必死に耐えた。もし自分が逃げたら後ろでホースを保持している仲間が火に巻かれてしまうのだ。
●六月一七日（日）
―なぜ自衛官に勇気が必要か―
この課題に対して、一九歳の私が次のように書いていた。原文のまま記すことにする。
『人はだれでも楽な方向に進みがちである。もし、山火事が起きたとする。すると人は逃げるだろう。その方が、その人にとって最も楽で安全であると、その人が単純に考えるからである。もし、だれも火を消さなかったら、火が燃えひろがり、やがては自分の家もやかれてしまうことまで考えない。考えたとしても考えないふりをして、一時の安楽の方向に走ってしまう。これを国防の面から見た場合、すべての人が上にあげたようなら国を守る人間がいなくなってしまう。いざという時に逃避する心をおさえ、物事に対処していく、それが勇気である。人間とはだれかが先にそれをやれば、それまでは逃げていても、勇気とま

ではいかないにしても、物事にぶつかってみようという気が起きてくるものである。一人ではこわくて何もできないが、二人、三人となれば。しかし、自衛官は一人の時でも、まず先に国を守るという使命を果たさなければならない。そのための勇気である。』

●七月三日（火）

―本日のカッター競技、第一班が優勝した―

この頃になると短艇の漕ぎ方も競争できるほどに練度が向上している。競技の一週間前は毎日短艇訓練があった。スタートダッシュのための三段引きやバケツを曳いての特訓は地獄だった。前に書いたが自衛隊では身長が高い者が基準となる。身長順に漕ぎ手の一二名が選ばれ、舵を取る艇長を入れて一三名である。一五名の班員のうち二人は予備員となる。

「イーチ、ニーイ、サーン、・・・」

と掛け声を掛けるのが予備員である。体が大きいからと言って体力も腕力もあるわけじゃないのに、予備員に対して妬みとも羨望ともわからない感情を抱いていた情けない自分がいたのを思い出した。

●七月五日（木）

―今日は富士登山の日である。午後は一五〇〇時まで昼寝して教育隊を出発、二二〇〇時富士山五合目を出発―

今でいう弾丸登山である。真っすぐに頂上を目指して御来光を拝む計画だ。当時は混み合っている印象はなかったが、防寒用にジャージとウインドブレーカーを着て、その上に黒い雨衣を着た全身黒ずくめの総勢一七〇名の男たちが列を作る姿は、はたから見れば異様だったかも知れない。ほとんど明りのない暗闇の中で、前の者の背中だけを見て登った。この頃には、私もある程度の体力がついていて息苦しさも疲労も感じなかった。ただ、寒かったことだけを強烈に覚えている。動いている時はいいが、小休止で立ち止まると汗が冷えて体温が急激に奪われた。

●七月六日（金）

―あたりが明るくなってきた。あの鳥居を通れば頂上だ。太陽が昇り始めた―

残念ながら頂上に着く前に太陽が顔を出したのだった。眼下の雲海から昇ってきた太陽の光を全身に浴び、太陽エネルギーのすごさを感じた。太陽光がこんなにも温かいものであることを実感し、体の隅々、細胞の一つひとつにエネルギーが行き渡る感覚があった。

●七月一〇日（火）

―本日、朝のトレーニング水泳、自分は耳を疑った―

七月になると各訓練項目の仕上げの段階に入った。起床と同時に当直学生の号令が通路に響き渡った。

「服装、海パン、Tシャツ、プール前整列」

急いで指定の格好に着替えて隊舎を飛び出した。そして、だいぶ離れたプールまで各人バラバラで全力疾走するのである。

プール前には体育班長が腕を組んで立っている。
「お前らは、野武士になれ」
体育班長の声が頭の中でリフレインした。泳力向上のための特別訓練である。
『早く艦から遠ざかれ』
これは総員離艦時の注意事項の一つだ。被害を受けて艦が沈没するとき、艦を捨てて海に飛び込まなければならない。そして、沈没による渦に巻き込まれない距離まで速やかに離れなければならないのである。泳力の向上は自分の命を守る手段なのである。
この頃の私は、やっと五〇ｍを泳ぎ切れるようになったばかりで、後から飛び込んだ仲間が自分の横をどんどん追い抜いていった。
「今の時代に艦が沈むことがあるのか」
訓練には一生懸命に取り組んだつもりだったが、私の心の片隅に、そんな甘い考えがあったことも事実である。
●七月二六日（木）
―今朝の服装、ジャージ、そしてその上にウインドブレーカー、それでもって大回り三二〇〇ｍコース―
朝とはいえ気温は高い。その中で体操着を着込んでのランニングである。終わった後は全身汗でグッショリと濡れて脱ぐのも大変な有様だった。何人かは体の手入れや洗濯に時間を割いて朝食に行かなかった者もいたことも記され、次のような記述もあった。
―今の生活から食事をとったら、もう生きる望みを奪われたも同然である―
私は自衛隊のバラエティーに富んだ食事の味にも量にも満足していた。生まれて初めて食べたメニューも多かった。牛肉のステーキはその最たるものだった。田舎ではトンカツが最上級であり牛を食べるなんて思いも寄らなかった。
「こんなゴム草履のような固い肉なんて食えるか」
中にはそんなことを言う者もいた。
「だったら、俺にくれ」
と私は心の中で思っていた。また、今ではテレビなどで紹介されるようになった海軍カレーだが、当時も一週間に一度はカレーだった。土曜日が半ドンと呼ばれていた時代の昼の定番メニューだった。
●七月三〇日（月）
―本日水泳検定。記録、クロール五九秒、平泳ぎ八二秒―
水泳訓練の成果がわかる記述であるが、目標の三級（クロール三九秒未満、平泳ぎ四六秒未満のいずれかを達成）まではまだ遠く険しい道のりであった。
●七月三一日（火）
―今日、実弾射撃が行われた。結果、八〇点満点中三二点である。最初の一発目、手が震えてねらうどころではなかった―
一〇〇ｍ離れた的に一六発の弾を発射した。屋内射撃場なの

で耳栓をしていても発砲音が結構響いた。当然初めての体験で極度の緊張から顔の汗が滝のように流れて、メガネが曇って五点の黒点など見えない中で必死になって引き金を引いた。戦場では引き金の先に生身の敵がいる事など想像すらできなかった。

●八月一一日（土）

―本日、研修旅行。石和温泉フジホテル、山梨県に来た。一九〇〇時から夕食および演芸大会、ビールが出た。一人一本と聞いていたが、どんどん出てきた。よくあんな苦いものが飲めるものだ―

自衛隊内から試験を受けてこの課程に再入隊した者は二〇歳になっていたが、ほとんどの者は未成年者だった。この記述についても特段に班長からのコメントはない。今の時代なら大変な不祥事となるところだが、まあ、四〇年前はそんな時代だったのだ。私は早く寝てしまったが、夕食後に班長を先頭にして何人かが温泉街にあるストリップ劇場に行った話を翌日に聞かされた。

●八月一四日（火）

―本日、体力検定。記録、五〇ｍ走七・二秒、ハンドボール投げ三三ｍ、走り幅跳び四・三ｍ、懸垂一一回、一五〇〇ｍ持久走五分三五秒―

目標の運動能力三級を達成したのである。入隊当時八〇キロだった体重がこの頃は七〇キロを切っていたのである。

現在の私の体重を考えれば、あの当時その気になれば飛べたかも知れないと思う。

●八月一八日（土）

―本日、短艇競技。〇八五〇時第一回目スタート、二一分隊は優勝候補の第一班だ。残念ながら自分は予備員で陸上で応援となった―

相手分隊との競技である。それぞれ一個班ずつのガチでの勝負になる。それぞれのタイムによって班優勝と分隊優勝が決まる。最初の対戦はお互い優勝候補の班である。残念ながらわずかの差で我が班は負けてしまった。唇を噛みしめながらカッターから上がって来た仲間の目には悔し涙が光っていた。仲間と一緒に何かを真剣にやって、負けて悔し涙を流す姿を正直に羨ましいと思った。そんな貴重な体験を自分は逃したのだと思うと同時に予備員になって、少しほっとした自分の弱さが情けなく思ったのだった。総合で分隊優勝は勝ち取った。

●八月二五日（土）

―やったぜ優勝だ。本日の水泳競技、第二一分隊優勝。メートル競技五三秒第二位―

これを読んで思い出した。自衛隊は優秀な者だけじゃなく、末端の者にもスポットをあててくれた。メートル競技とは、赤帽を対象とした競技であり得点にはならないエキシビション的種目である。簡単に言えば、五〇ｍを指定されたタイムで泳ぐのである。普通は六〇秒前後が指定される。私の場合は、一生懸命に泳いだタイムがそれぐらいだった。しかし、当日の観衆の

応援の中で力一杯に泳いだ記録が五三秒だ。入隊時の記録一ｍだった私が、五か月の訓練を経てここまでになったのである。

●八月三〇日（木）

―借りたものはほとんど返してしまった。やっと肩の荷がおりたような気がする。あとはジャージと隊歌集ぐらいのものである―

この頃は、各種試験が終わって主に清掃に充てられた。掃除は毎日、朝昼晩に行っていた。夜の掃除は厳しい点検があって、洗面台などに水滴が一滴でも残っていれば全部やり直しさせられた。加えて、毎週金曜日の午後には大掃除があり、その後にグランドや屋上に集合して教育隊の歌や軍歌を中心とした隊歌演習を行った。伴奏などなく、班長が歌うのを聞いて覚えた。私のお気に入りは、『君のその手で』という歌だ。自衛隊発足一〇周年を記念して一九六〇年に作られた歌である。ちなみに私が生まれた年でもある。作曲は、ＮＨＫの朝ドラでも語られた古関裕而先生である。この歌が好きな班長がいたお蔭で、何度も歌うことで私もすっかり好きになってしまった。一番の歌詞を記しておく。

〜小さな樹でも　青空に
　のびゆく自由を　もっている
嵐をささえ　その樹をまもれ
　君のその手で　僕のこの手で
　のびゆく日本の　自由をまもれ

●八月三一日（金）

―今朝のマラソンで走り納めだ。ようやくこの日がやってきたのだ―

修業式の前日まで朝のランニングは続いた。だから、ジャージの返納が最後になったのである。毎日寝る前に朝だけでも雨が降らないものかと願い続けた。雨の朝は、起床時間が〇六〇〇時から〇六三〇時になって、朝のトレーニングが無くなるからだ。

この日で記述が終わっている。翌日の午前中に修業式を終えた私たちは、それぞれの職種の専門技能を学ぶための各術科学校へ向けて出発した。広島県、千葉県、京都府、愛知県へ向けてそれぞれが旅立ったのである。バスやトラックを見送るどの班長の目にも光るものがあった。私は経理の勉強をするために京都府舞鶴市にある第四術科学校に向けて横須賀教育隊を出発したのだった。

これまで記したように、私は強い信念をもって海上自衛隊に入隊したわけではなかった。高校時代のある日、路線バスの運転手をしていた父が夕食を食べながらぼそっと言ったのだった。

「自衛隊では、羊羹を一本のまま貰えるそうだぞ」

今思えば、父が勤めるバス会社に入社した自衛隊を任期満了で退職した者から聞いた話だったように思う。別に羊羹に釣られたわけではないが、その話が記憶の片隅にあった私は、高校で開かれた自衛隊説明会に顔を出してしまったのだった。大学

への進学を希望していた私は、国立と私立の受験をさせてもらった。結局どちらの大学にも落ちてしまった私に父親が言った。

「自衛隊に入れ」

お世話になった自衛隊の広報官の勧めで自衛隊の試験を受けていた私は、先に記述した山口百恵さんの『横須賀ストーリー』のイメージを抱いて故郷を後にしたのであった。全くの余談であるが、一九八〇年一〇月五日の『山口百恵さよならコンサート』を武道館で観たことについて、少しだけ運命を感じている。

入隊してからの私は、毎日寝る前に考えていた。明日こそ辞めたいと班長に言おう。でも、朝になれば起床ラッパで起こされて考える間もなく分単位で訓練に追い回される毎日の中で、申し出るタイミングが合わなかっただけなのかも知れない。

私の自衛隊人生は、こうして始まったのである。横須賀教育隊の五か月で私は生きる術を学んだ。いや、教えていただいた。そして何よりの宝は、一緒に過ごした仲間たちに出会えたことである。本当は、歩きたいとか予備員になりたいとか逃げ出したいと思っていたヘタレの私にいつも声を掛けて、一緒に走って一緒に泳いでくれた。最後まで引っ張って来てくれた仲間たちには感謝しかない。

お陰様で、四〇歳までは艦艇勤務をして、訓練で外国にも行くことが出来た。以後は、市ヶ谷の防衛省をはじめ各地の陸上司令部で勤務して三六年間を勤め上げることが出来た。

本当はここで終わろうと思ったが、最後にどうしても書いておきたいことがある。当時の記憶が蘇ってくる中で、一人の男の顔が思い出された。班は違ったが、名前もはっきりと憶えている。彼は、私と体型も顔立ちも似ているような気がした。体が大きく、青白い顔に眼鏡をかけていた。出身を聞くと東京と答えた。私のイメージする東京人にピッタリだったので思わず納得した。そして、少し安心したのだった。ところが、入隊して一週間もたたない頃に彼は自衛隊を去って行った。

「大学への補欠入学が決まったから」

と先任班長から説明があった。彼は泳げたが走るのは苦手だった。夕方二人で鉄棒にぶら下がって懸垂の練習をした。私は何だか裏切られたような気分でひどく落ち込んだのを覚えている。

『羽尾健太郎』

記念アルバムの中には、彼の名前も写真もない。でも、姓名申告をする時の異常に甲高い声の記憶が今でも耳の奥に残っている。

「おい、元気でやっているか。それでもお前は私にとって、忘れがたい同期だ」

選評

竹中　征機

入選

『松前家前史』―五代戦いの記録―」

木村　裕俊

松前家の歴史は本州諸藩と大きな相違があった。その中で、その特徴としては、米の穫れない事から無石の藩と言われる。藩士は割当ての知行地の水産加工物への税を交易税を福山、江差、箱館三港で税を沖口番所で扱った。

前史はアイヌたちの蜂起があり、特に交易上での不正、またコシャマインの乱は康正二年（１４５６）函館市志海苔地区でマキリ（小刀）の出来具合や値段等で争いになり、殺傷された事から、和人とアイヌの人たちの戦いに広がってしまった様である。

特に先住民の虐待や差別は過去、現在関わらず事実である。作者は津軽安東氏の流れを汲む蠣崎氏（武田家の青き闘将といわれた）初代の苦闘を、温かく真摯な目で描いている。

ノンフィクションは情報の視点を、いち早く発見し公正な立場を堅持するには根拠が必要な事は申す迄もありません。作者は敢えて、フィクション的な手法を駆使し、「新羅の記」のような支配側が徳川と因縁をこじつけるため三井寺に系図を依頼した支配者的立場からでなく、歴代の藩主の人間性を生き生きと描く事によって寧ろその時代を身近にした。

また、アイヌの人たちを外敵と見るだけでなく共に生き抜く共生者と見る目があった事は確かと思える。

末筆になりますが、「人間として生まれた以上は、できるだけの仕事をして死にたい」大宅壮一の言葉を作者にお贈りします。

「交流が世界の人々を結ぶ絆へ」

末永　玲子

頭で良い事だと思うが出来ない事がある。その一つがこの作者の体験のホストファミリーでしょうか。実は若い頃、一回は東欧の女性、二回目はカナダの二人の女子高生を宿泊させお世話した事があります。女子高生は函館山の夜景を観せて国語辞典を買い与えた記憶があり懐かしく思い出させてくれました。

正直避けたい気持ちもありましたが、やはり、この若い人達が母国に帰り、日本という東洋の文化の一端に触れた事により身近に感じただけでも大きな収穫だと思うし、目に見えないが小さな絆の糸が世界中張り巡らせられたらという、夢が語られ、感銘を受けた。

モンゴルは東洋人の中でもチベット同様日本人に似ていると言われる。

大変だが良い機会を得たと思う。

「だから大沼って面白い」

小島　栄樹

大沼の四季の移ろいと、わが家を中心とした折々の動植物の動きを生きとし生きるものを、自然の中に温かく描いている。

たとえば、春を告げる水芭蕉。そして今はないが鹿園にあった道の踏み切りの入り口、時の変遷を描くかのようです。

湖面の氷が溶けてカイツブリやコハクチョウ、オオハクチョウ、それに真雁まで加えての大沼の春の目覚めを明るく描いている。

作者は大沼に通う大きな喜びと、また自然界への畏敬を込めて書かれている事が良く分かりまた極めて読み易い作品だった。

「座礁船の生涯―81年前の追憶―」

齊藤　満

山下汽船所有の石炭貨物船「豫州丸（よしゅうまる）」が檜山管内原口村沖合で座礁したのは昭和十五年三月の事であった。

春の遭難は鱈つりでは、しばしばみられ、その風雪は半端ではなかったといわれる。

豫州丸（五七一一トン）は松前小島の間、右手の暗礁に船底を損傷し浸水した経緯と、その顛末を幼くして立ち合った臨場感で生き生きと描き、海難の現場の凄まじさと、対応する家族愛、そして自然界の驚異を新たにさせた。

また資料の添付と構成等も含め本年度のこの部門での大きな収穫でもあった。

佳作

「勤続三六年のはじまり」

佐藤　健

作者は自衛隊員として三六年の勤務を重ねて来て今日に至った。そこでその永年の勤務に報いる意味で、叙勲にされる栄誉を迎えるに至った。しかし、コロナの事情で皇居での拝謁叶わず自衛隊からの送付だけに終わった。

その中で注目したのは初出の所で、叙勲の瑞光章について小さいながら重量感を感じたとあった。選者も学生時代運動部に所属し、汗を流したが、職業なれば甘いものでなし、まして国を守るという使命の訓練だけに、その激烈さが想像出来る。

これは、ほぼ自衛隊生活の日誌だが、ポイントとして、最初の受験の失敗、そして時々垣間見る母の記述が印象的だった。

それらの歳月は流れたが常に心で支えた母。

ここ一、二年世界の歴史上未曽有の新型コロナウイルスが猛威をふるい多くの尊い人命を失った。今ある日々を伝える事は紛れもなく今を生きる人たちの使命でもあります。

皆様がお書きになった幾つかの作品も、一つの懸命に生きた証でもあります。

本当にそれぞれの観点からの作品に大変感動させられました。末筆ですが応募された方々に心からお礼を申し上げます。

○良い参考書　梯久美子「散るぞ悲しき」
―硫黄島指揮官・栗林忠道―
狂うひと―「死の棘」の妻・島尾ミホ
著者・・・梯久美子（かけはし・くみこ）
熊本県出身・北大
大宅壮一ノンフィクション賞受賞

以上

詩

入選

食の喜遊曲

水関　清

食べ物には、色がある。
それは、
自然の息吹きが蓄えた、
彩りから生まれ出たもの。
四季の恵みは、
人びとの手が加えられて食卓にのぼり、
食べる人の、いのちになる。

春うらら、人まばら。

残月が照らす　花の雲。
湿った竹皮の中で、
ふくよかな重なりを見せる、さくら餅。
塩漬けにすることで、香りを高めた
桜の葉に包まれた餅生地のおもてには、
地上にこぼれ落ちてきた花明かりが
つぶつぶの光となって宿り、
餡の甘さと、鼻に抜ける葉の香りを包みこむ。

夏さかん、人まばら。
山野に育つ、葛と蕨。
萌え出した緑を粉にして柔らかく炊き上げ、
餡を抱かせた生地を猪口に流し入れて、

汲み上げた井戸水の流れる水槽の中で、
じっくりと冷やされた、水まんじゅう。
葉陰から降り注ぐ陽光は、
その表にとどまることを許されず、
速やかに流れ去る。
餡の甘さと、つるりとした食感を約束して。

秋さやか、人まばら。
秋に畑にまかれ、
ひと冬を雪の下で過ごした小麦の種は、
春に芽吹き、夏を迎えると穂が実り、
麦秋と呼ばれる、収穫の時期を迎える。
粉に姿を変えた小麦は、

卵と砂糖に出会って焼き上げられる。
さらに生クリームを搾りかけられ、
雪に擬した砂糖を纏った後で、
味付けされた栗の一片が、その頂を飾って、
モンブランと名づけられる。
光あるところは、栗と生クリームの上だけ。
その土台には決して届かない。
口に含んで初めて分かることがある。
表面のなめらかさと、
その土台となる生地の弾力に富んだ、
ふたつの食感からなる、この菓子の魅力。
粉に姿を変えても、
卵や砂糖を混ぜられても、なお残る、

土台となった小麦の味わい。
奥深い、その豊かな味覚の源には、
小麦が、
ひと冬を過ごした雪の下で綴られた、
大地のものがたりが、
隠されているからだろうか。

冬しずか、人まばら。
仕事の帰り道、
まだ開いていた売店で買い求めたシベリア。
竹皮に包まれ、新聞紙でくるまれて、
そっと手渡された。
帰宅して、お茶の準備をしながら、

早速、ひと口頬張る。
しっとりとして弾力のある羊羹を、
柔らかいカステラの間に挟みこんだ、
シベリアという名のお菓子。
歯形が残る黒々とした羊羹の上に宿るのは、
頭上に点された、部屋の電球の灯り。
シベリアは、
「カステラの羊羹サンド」なのではない。
焼いたカステラ生地の上に羊羹を流し込み、
さらにカステラ生地をかぶせる、手間を見よ。
そうすることで、
カステラと羊羹が密着するのだ。
頬張って、舌の上を過ぎて、

飲み込まれるまでの間、
ふたつの味は常にいっしょで、
決して離れることはない。

人々は、自然の恵みに、
こんなふうにして手間ひまをかけて、
食べ物にして、
いのちの源にしていたのだ。

人と人とが肩を寄せ合い、
笑顔を交わす、
食卓という舞台。

そこにあるのは、食べ物の色、そして光。
自然の息吹きが生みだした色たちは、
人の手が加えられることで光を得て、
四季の恵みという名の食べ物に姿を変えて、
日々の食卓を彩る。

人が食卓で涙をぬぐう時、
悲しみは、食べ物の中の光に包み込まれ、
やがて、ポッと胸が明るんでくる。

唐突に始まった、「三密の禁」。

その中で、人びとは知ったのだ。

限られた人とだけ、限られた場所で、
食べることの切なさを。
そして、分かったのだ。
人が言葉を持つ前から、
人と人とをつないでいたのは、
ともに食事する場だったのだと。

さらに、のみこめたのだ。
ともに食べることで、
身体とともに、こころのなかにも、
栄養を通わせることができるということを。

食べるということは、灯すということ。

身体には、いのちの輝きを。
こころには、晴れやかな彩りを。
その灯が、
連綿として点りつづける世界の中で、
辛抱強く、
新しい時の到来を待つ。

詩

入選

自然につつまれて

寺崎　達雄

木のなか　緑のなか
草や花のなか　空気のなか

空と一体　木のにおい
緑のにおい　草のにおい
土のにおい　空気のにおい

いま山の中の緑にふくまれ
においにふくまれる

心もそして体も
生れ変るような気持ちだ

詩

佳作

六月の朝

森田　昌恵

青い風　頬(ほほ)にうけ
シロツメクサの匂い　かいだ
君の匂いに　似ているようで
会いたくて
愛しくて

六月の晴れた朝
陽に照らされた暖かな道を
わたしはひとりで歩く

乾いた空気が冷やりとひたいを撫でた

もしも君がいたら
二人で行きたい
目に入る一面緑の小高い丘のむこうまで

二人で歩いてみたい
オタマジャクシの棲む池のほとりを

二人でたしかめたい
花の匂いを
風の色を
朝の光を

空の広さを

二人で見てみたい

今日から明日へ続く未来の　そのまた未来を

選評

鷲谷　峰雄

今回は応募が26作品ありました。

入選　「食の喜遊曲」

水関清

食べ物には、色がある。というから、それは当然だと思う。でも、ちょっと気になる。それは、色がありあまっているが、自然色にはなかなか出合えないからだ。

作品を読むと、湿った竹皮の中で、ふくよかな重なりを見せる。香り高めた、さくら餅、塩漬けにすることで、桜の葉に包まれた餅生地（せいじ）に落ちてきた花明かりが、餡の甘さと、鼻に抜ける葉の香りがする。

この鼻につんとくる甘さには、なかなかよくて、人間の五感をうまく利用しています。

水関さんの食通は、万遍な味などにくわしく知っているが、もうひとつのよさは、上品で、みやびやかな趣（おもむき）がすることです。

入選　「自然につつまれて」

寺崎達雄

自然をかたるには、緑のなか、草のなか、木のなかで語るとよい。

また、土のにおい、空のにおい、草のにおい、緑のにおいなどが大空と一体となって語りあうのだ。

そうすると、心いっぱいが、生れ変るような気持ちになる。

だから、私たちは緑いっぱいの、よろこびを、もとめているのです。

詩もそうです。

文章の中に、どれだけのポエジーがあるのか。それが文章とつながっているのか。そんなポエジーが、あふれるほどにあるのなら、それが詩です。

佳作　「六月の朝」

森田昌恵

青い風、頬にうけて、シロツメクサの匂いが君と似ているので、わたしが会えたのは、あなたなのだ。

まとめると、こうなります。文章はその場その場の環境をのばしているにすぎないのです。君に会うことが目的なのです。

もし君がいたのなら、小高い丘のむこうまで歩いていきたい。

今日から明日へ続く未来の、そのままの世界まで。だから、二人はいってみたいのです。六月の小高い丘のむこうまで。

文章に無理はありません。風の色と朝の光などの取り込み方もよい。

あとは「六月の朝」全体の青い風のゆらめきを表現してほしい。

短歌

山縣 庸美選

入選

遠くには此方窺う北狐熱い視線は手元の串焼き　渡邉陸王

日雇の母を迎へに暮れなづむ坂を下りし幼き我ら　竹田光彦

男にも男の事情ありスーパーに背筋を伸ばしカボチャを選ぶ　菊地利春

佳作

食べ物を飾って見栄えのインスタは飽食の世に飢餓を語らず　森田　裕

柄杓よりそそぐ湯の音心地よし梅雨の茶室の雨音もよし　伊藤静子

腹這ひのカメラの列が捕らへたる土に零るる球児の涙　水関　清

ふわふわと青空で浮く雲たちは誰も描けぬ動く芸術　下地彩可

この声の届かぬけれど希(こいねが)う胸が塞がる有明の月　久保美鈴

選評

山縣　庸美

入選

遠くには此方窺う北狐熱い視線は手元の串焼き

情景の捉えかたがユニークなので今後に期待したい。初句「遠くには」と詠まれたのは、広いキャンプ場にでも行かれた折の作品か。「袖捲り背中汗ばむ散歩道先行く君を照らす木漏れ日」も良い。

日雇の母を迎へに暮れなづむ坂を下りし幼き我ら

幼き日仕事を終えた母を迎えに何時もの坂を上り下りされたのであろう。それぞれに生きる苦労があった時代。

男にも事情はありてスーパーに背筋を伸ばしカボチャを選ぶ

二句切れ、字余りになっても「男にも男の事情あり」と強調したい歌。「背筋を伸ばし」に作者の意地が感じられる歌。

佳作

食べものを飾って見栄えインスタと飽食の世に飢餓を語らず

「食べ物を」「見栄えの」「インスタは」と調子を整えたい。大食い競争などテレビに見ると、下の句をつくづく思う。

柄杓よりそそぐ湯の音心地よし梅雨の茶室の雨音もよし

素材を生かし何首か詠まれたかも知れないが、「湯の音心地よし」「雨音もよし」と音の重なりに趣を感じる。茶道、歌道とも入り易いが奥が深いと思う。

腹這ひのカメラの列が捕らえたる土に零るる球児の涙

甲子園球場の試合後の一齣にピントを合わせた歌か。三句の「捕らえたる」は「捕らへたる」に。

ふわふわと青空で浮く雲たちは誰もかけない動く芸術

原作通りでも良いが、三句の「誰もかけない」を「誰も描けぬ」としたい。素直に感じたままを詠まれており上の句が下の句を生かした女学生の作品。

この声の届かぬけれど希う（こいねが）胸が塞がる有明の月

この歌も女学生が応募された相聞歌と思われる作品。「希う」、「胸が塞がる」、「有明の月」と語彙の豊富さに驚く反面、上の句そのままに「コロナ禍終息有明の月に」と詠むことも出来る。「希う」ははたして相聞歌か。重いことばなので。お二人とも今後が楽しみ。

今年度も二十三名、七十九首の応募の中から選ばせて貰ったが、ここ何年か常連の方々の壁を破ることができないでいる。高齢の作者、五首頑張って応募して下さった方の作品は、なんとか採りたいと毎回思うのだが。若い方にも短歌に興味を持っていただければと願っている。

選者詠

山縣　庸美

父母が用ひし看護ベッドに眠る今宵見上ぐる遺影は微笑みをれど

三種類の新札それぞれ使ひ分け今年の盂蘭盆無事に終へたり

ウィンドーの着物レンタルのマネキンさん首なく足なく着物きせられて

コンクリートの雪融け水を舐める猫飲料水の味は知らずや

チューリップの外側の花は真紅なれど中は不気味な黄色と黒色

俳句

熊澤　三太郎　選

入選

春昼の椅子に微睡む老母かな　竹田光彦

秋涼し縄文土偶の遠まなざし　斉藤ふじお

全身を声にして蝉つきるまで　小板彩羊

佳作

蝌蚪の紐田に張る水のゆるむころ　千葉誠一

亡き父の足跡残し刈田かな　清水法雄

ラベンダー蒼の中の小宇宙　太田満喜子

夜半の秋又ひとつ消すアドレス帳　見春妙子

街歩く隣の人はあごマスク　菅原麗花

選評

熊澤　三太郎

入選

春昼の椅子に微睡(まどろ)む老母かな

春昼(しゅんちゅう)と読みますね。春の昼の椅子に居眠りなさっている年老いたお母様を詠みました。一語一語無駄のない描写です。特に「微睡む」がいいですね。「老母かな」の詠嘆も適切です。お母様への慈しみの句です。

秋涼し縄文土偶の遠まなざし

「新涼」ですね。秋になってから立つ涼気で、「秋涼し」ともいいますね。そのことで、人は「残暑」から解放されたような心持になります。句はここに「縄文土偶」を登場させました。それなら「秋涼し」が相応しいかもしれません。作者はなにかの折りに「縄文土偶」が展示されているのを見たのでしょう。「土偶」は古代人が土人形を呪術用に拵えたと云われていますね。

「縄文土偶」が自分の生まれた「縄文」時代を思って「遠まなざし」になっていると作者は想像しました。

「縄文土偶」と「遠まなざし」の取り合せがとてもいいですね。

全身を声にして蝉つきるまで

「蝉」は夏の季題です。いい句ですね。この句の背景にあるものを、次に少しばかり説明します。

先ずは「蝉」の他に「蝉生る」の季題がありますね。「蝉になる前の幼虫は土中に**数年から十数年いて蛹(さなぎ)となる。**ある時、地中から出て、殻を着た蝉が木に登り、背が割れて、そこから蝉の成虫が時間をかけて出てくる。この過程が〈蝉生る〉」ですね。

（講談社　俳句歳時記）

蝉が、この地上に現れるのにとても長い月日がかかっています。

次に「空蝉(うつせみ)」と云う季題があります。

蝉の蛹(さなぎ)が地上に出て、蝉になったあとの透明なぬけ殻のことですね。この語は蝉のきわめて短い生の抜け殻を指す意から転じて、人間のことをもいう言葉として用いられるようになりました。奈良末期から平安にかけて**無常な**世にかかる枕詞（うつそみの・うつせみの）となったとのことです。

この句は、右の事柄を包含するような一句だと私は思いました。

佳作

蝌蚪の紐(ひも)田に張る水のゆるむころ

「蝌蚪の紐」は晩春の季題です。

池や沼の水に蛙の卵が寒天状の紐になっている。それが十日ぐらいで孵ると〈お玉杓子〉になっていて、黒い頭と尾が泳いでいますね。幼い頃それを手で掬って、乾いた径に放ったりして酷い悪たれ坊主ぶりを発揮していたものでした。「田に張る水のゆるむころ」の表現がいいですね。

亡き父の足跡残し刈田かな

稲刈は十月に入ってからでしょうか。「刈田」はその稲を刈りとったあとの広々とした田圃ですね。それだけでも、切株ばかりが並んだ寂しい眺めに加えて「亡き父

の足跡」ですから寂しさが募るばかりです。稲刈を終えて、間もなくお父様が亡くなられたのですね。「刈田かな」との詠嘆にこの句を読む当方もぐっと胸がつまりました。

ラベンダー莟の中の小宇宙

辞書には「〈ラベンダー〉は夏、高さ六十センチメートルほどでシソ科の小低木。頂に穂状をなして青紫色の小花をつける。花を蒸留して揮発性ラベンダー油をとり、香料・薬用としてヨーロッパでは古くから栽培され、化粧品などに用いられている」とある。

ところで、私の持っている歳時記のどれにも「ラベンダー」がない。古い歳時記ばかりで、どうしようと思っていたら、ありました。**（ザ・俳句歳時記第三書館）**

句に戻りましょう。

その「ラベンダー莟の中の」にも「小宇宙」があると詠じました。「小宇宙」とは、世間と云われているような意ではないでしょうか。その天地間の存在を指しているものと解釈しました。

夜半の秋又ひとつ消すアドレス帳

「秋の夜半は殊に空気が澄んでいて、月が美しく、虫が鳴き、静寂な趣である。」と歳時記が云っています。ところが、この句は、それとは別の方向へ向きを変えました。「又ひとつ消す」とは、どなたか、作者の知人か、親しい人が亡くなられたのでしょう。住所録の氏名には線を引くとかする、とても寂しい「夜半の秋」となったのですね。

下五の「アドレス帳」がいい表現でしたね。少しばかり気になる箇所があります。「又」を「また」と記したらどうでしょう。

街歩く隣の人はあごマスク

この句はコロナ禍のマスクのことですね。「マスク」は冬の季題なのですがコロナ禍がはじまって、マスクが春夏秋冬に長いこと掛けなければならなくなりましたね。「マスク」が冬の季題であることが毀れそうですね。

ホトトギス新歳時記（平成七年刊）の「マスク」の項を引用してみます。

「冬期に入って空気が乾燥し始めると感冒にかかって、あるいはかからぬようにマスクを掛ける人が目立ってくる。冷たい空気や病菌、塵埃などを防ぐためであるが、マスクを掛けた顔は無表情になる。大正年間に流行性感冒が非常に流行して以来ことに用いられるようになった。」と、云っています。

まあ、歳時記のことはいいとして、私など、外に出る時、マスクを忘れてあわてて引き返すことが幾度もあります。過日妻の替りにスーパーへ買物に出かけたとき若い主婦らしいひとに「おじさんマスクしてないよ」と云われて、あわてて車へ戻って掛けてきたことがありました。

この句、「あごマスク」がとても面白いですね。

選者吟

熊澤　三太郎

初景色函館山へお辞儀して

下萌や他人(ひと)に遅れて歩く老

吾が庭に生(あ)れし紋白蝶何処へ

爽やかやいつもの句座にみな揃ひ

棒鱈のカチカチしばれ糶(せり)出さる

川柳

中村宵星選

入選

おだてればその気になって伸びる腰　白井靖孝

ゆったりと聞けば良かった母の愚痴　岩本真穂

見られてる猿はどうどう露天風呂　本間総子

佳作

老いて尚生きる糧への句に挑む　水島悦子

本棚が僕の背骨を作り上げ　竹内穣

金メダル束の間コロナ忘れさせ　大山利子

自販機は「行ってらっしゃい」妻寝てる　齊藤満

コロナ禍で充実させよう読書時間　剛田尊

選評

中村　宵星

入選

おだてればその気になって伸びる腰

人間誰でも誇りを持って生きていると思う。その欲は、生きて行く為に自然と身に付いて来る。その欲とは様々な見方があるが、気学の方から見れば三通りになる。

二黒の欲　持って生れた欲
五黄の欲　二黒八白を包括した欲
八白の欲　持って生れた以外の欲

二黒の欲は一般の人達、五黄の欲は政治家だとか天下を揺るがす悪党共で八白の欲は、資産をたくわえ、他人に大きな迷惑を掛けても平然としている者を表す。

おだてと言う八白の気に五黄が少し顔を出したと選者は見る。

ゆったりと聞けば良かった母の愚痴

子供等の成長と、家庭内の安定もあり、心にも何時か安らぎが出て、少々のへそくりなども出来る様になる。小額だから家計簿のポケットなどに。しかし何時の間にか額が違う。夫にばれたか文句も言えず別の処に腹をくくる。

ＰＴＡなどの集会に夫の会社で、出張の特別手当が出たとの情報に夫を責めるなど序の口で、聞こえるか聞こえないかで様々な事を愚痴っていた亡母にすまないと思う。

見られてる猿はどうどう露天風呂

人間社会の風紀なんて勝手にしなさい。猿の赤い顔が尚赤くなって観客を喜ばせている。

それでも、猿社会は人間社会よりも厳しい。猿の山の主ともなれば、実力本位で袖の下などあるはずもない。そこまでは人間に追い付かないから見る方も楽しい。

佳作

老いて尚生きる糧への句に挑む

上手とか下手には関係ない。そりゃ上手に越した事はないが、心の糧に薬にこんなに良いものはない。たまさか高点にでも抜擢されれば何倍もの効能を発揮する事でしょう。

ですから作句する事は生きる力を日常茶飯事に見出す手段として、軽い気持で挑むと川柳だけではなく様々な日常に発用され生きる楽しさが倍加されることでしょう。

本棚が僕の背骨を作り上げ

このような句仕立を現代風とでも申しましょうか。本棚がバックボーンを作った訳ではなく、本棚に積上げた本の中身が教養を高めて来たことになる。

春望　　杜甫

國破山河在
城春草木深
感時花濺涙
恨別鳥驚心
烽火連三月

家書抵萬金
白頭掻更短
渾欲不勝簪

書は命の本かも知れない。又、文字一字一字に神宿るとも言われて来た。

一字一字を文と言い、文字とは別のものとして五千年の昔から現代に有る。

金メダル束の間コロナ忘れさせ

一年遅れのオリパラに、疑心暗鬼の怪。世界に渦巻く壮絶な厄病神との闘いを押し切った後はどのように成るのだろう。

日本だけではあるまい。オリパラの必死の姿に疫病とも闘い、やっと手にした金の重み、例年のオリパラの金よりも優ると思う。

良く取れば最高、悪く取れば最悪、人間って勝手なもの。

自販機は「行ってらっしゃい」妻寝てる

良い世の中になったもの。

昔は妻は三つ指をついて夫にしたがったものだが、戦争で敗けたお蔭でナイロンの靴下と女が強くなる、男の不甲斐なさ。

妻はきっと夜勤でもしてお疲れだったのでしょう。

コロナ禍で充実させよう読書時間

此の世紀に、チンプなど言っておられぬ。大惨事となるコロナ禍に、或る者は大変な損害を受け、職を失い、その反面休職で時間を持て余す人達が本に親しむ時間を見付け、図書館に足を運ぶ良い機会を得たと思う。此のような動機はめったにあるものではない。じっくりと知識を身に付け、コロナ明けに役立ててほしい。

選者吟

中村 宵星

ベッドにも朝日がほしい体時計

老いて尚早寝早起き身に付かず

一歩二歩三歩に掛ける人間譜

清清し屹度退院闊歩して

今日も又輸血点滴日が暮れる

審査員紹介（＊本紙各部門受賞作品の掲載順）

随筆

函館文学学校講師　対馬俊明

小説・文芸評論

北海道教育大学名誉教授　安東璋二

ノンフィクション

函館文学学校講師
文芸誌『海光』代表　竹中征機

詩

日本現代詩人会会員
日本現代詩歌文学館評議委員　鷲谷峰雄

短歌

新アララギ会員
道南歌人協会顧問　山縣庸美

俳句

函館俳句協会会長
『ホトトギス』同人　熊澤三太郎

川柳

函館川柳同好会顧問　中村宵星

あとがき

『市民文芸』第六十一集をお届けします。

今年の各部門の応募作品数は、

随筆四十編、小説十一編、文芸評論二編、ノンフィクション十編、詩二十四編、短歌七十九首、俳句百六十九句、川柳百四句、計　四百四十点となり昨年度を上回る応募数となりました。コロナ禍の中、皆様のご協力のおかげで今年も作品集を作成することができました。心より感謝申し上げます。

【追悼】川柳部門の審査員中村宵星（本名　中村富嘉）先生が、令和三年十二月十六日ご逝去されました。病床にありながら、今年度応募された川柳を審査し、選者吟も詠んでくださいました。選者吟を読み直すと、闘病まで川柳で描いた中村先生の様子が浮かび、在りし日の先生を思い出しました。流石に長年川柳をやってこられただけあり、飄々としたお人柄でした。

川柳を作られる方が大勢いて、応募も多いため、審査は大変とお聞きします。中村先生は長い間市民文芸に投稿いただき、令和元年度の五十九集から、今年度の六十一集までの三年間審査員を務めていただきました。体調が思わしくない中、応募作を審査し選評を書いていただいたことを深く感謝すると共に、ご冥福をお祈りいたします。

函館市民文芸　―第六十一集―
発行日　令和４年３月19日
編集・発行　函館市中央図書館指定管理者図書館流通センター・マルエイヘルシーサービス共同事業体（函館市五稜郭町26―1）
TEL（〇一三八）三五―五五〇〇
題　字　木　下　順　一
表　紙　五稜郭の桜と函館市中央図書館（撮影・丹　羽　秀　人）
印刷所　有限会社　日孔社

【 応 募 要 項 】

募集作品

１．随筆	400 字詰原稿用紙	５枚以内
２．小説	同　　上	４５枚以内
３．文芸評論	同　　上	４５枚以内
４．ノンフィクション	同　　上	３５枚以内
５．詩	同　　上	５編以内
６．短歌	同　　上	５首以内
７．俳句	同　　上	５句以内
８．川柳	同　　上	５句以内

【 応 募 規 定 】

１．応募資格は函館市民であること（函館市内の学校に通学している児童、学生、生徒、また函館市内に通勤している者を含む）

２．原稿は未発表のものであること。

３．原稿には　**①応募部門**
②住所
③氏名（ふりがなを必ず付記のこと）
④年齢・性別
⑤職業（児童、学生、生徒は学校名・学年も必ず記載のこと）
⑥電話番号　を明記してください。

４．400 字詰め原稿用紙に手書き、またはワープロ・パソコン原稿によるもの。
原稿用紙に手書きする場合、ボールペンもしくはインクで誤字脱字のないように、読みやすい字（楷書）で記載してください。
ワープロ・パソコン原稿の書式は、原稿用紙（400 字・20 字×20 行）設定で、規定枚数内であることをご確認のうえ、ご応募ください。
短歌・俳句・川柳は、すべての漢字にふりがな（読み方）を記入してください。
ふりがなについては、作品集掲載の際に表示を希望する箇所に（　　）をしてください。

５．応募原稿は返却いたしません。
また、入賞（入選・佳作）作品の著作権は、すべて函館市に帰属いたしますので、ご了承願います。

６．作品の中では個人情報保護に配慮し、個人・団体を誹謗・中傷するような内容の記載はご遠慮ください。